オリーブ褐色シルトで、径1㎜前後の砂粒を多く含む。南端水口下部の②層は暗オリーブ褐色シルト。中南水口下部の②層は、オリーブ褐色シルトに径1㎜前後の砂粒と不定形炭化物が少量混じる。中水口下部の②層は、オリーブ褐色シルトで、一部にぶい黄色を呈する。そして、北水口下部の②層はオリーブ褐色シルト。中南水口と中水口は②層が安定して堆積し、あるいはこれらが畦畔の一部であった可能性もある（図41－42～45）。

[SS-138]

SS-121の西側、幅50cm前後、比高差約4cmの断続的な畦畔で画されているが、調査範囲内で認めた広がりは、東西40cm前後。水田面の標高は26.05m強。東側SS-121との間に4箇所の水口を認め、南側にSS-137とも、畦畔東端が途切れ水口となると推測され、同様な状況は北側畦畔にも想定される。

[SS-135]

調査区東辺、DQ48・49区に位置し、東側は調査区外へと広がる。調査範囲内で検出した広がりは、東西1.9～2.4m、南北5.8m、水田面の標高は26.14m前後。わずかながら、掘り下げ気味か。南側は幅約50cm、比高差約1cmの微弱な高まり、西側は幅50～70cm、比高差約5～7cmの畦畔、北側は幅約70cm、比高差1cm以下の微弱な高まりでそれぞれ区画されている。

南北の畦畔は微弱な高まりを辛うじて見いだし、それぞれ西端が水口となるとしたが、埋土等の詳細は記録していない。一方、明確な畦畔を認めた西辺は、中央部と北端に水口が開く。中央部の水口は北半に撹乱が及び、幅は70cm以上で、SS-122側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径1㎜以下の砂粒を多く含み、砂質が強い。ただし、シルト質土もやや含み、粘性も少し伴う。北端の水口は幅約60cm。やはりSS-122側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径2㎜以下の砂粒を多く含み、シルト質土も少量含むが、砂質がかなり強い（図41－46・47）。

[SS-122]

DQ48・49区、DR48・49区にまたがって広がり、北辺推定約4m、南辺約5m、南北約5.7mの台形状を呈する。水田面の標高は26.14m弱。南側を幅50～80cm、比高差4～5cmの畦畔でSS-115と、東側を幅50～70cm、比高差6～8cmの畦畔でSS-135と、西側は幅40～50cm、比高差2～4cmの畦畔でSS-123と、そして北側を幅70cm弱、比高差約4cmの畦畔でSS-129とそれぞれ画されている。

南畦畔には2箇所、東畦畔にも2箇所水口が開くが、これらについては既に詳述した。西側畦畔は南端に幅30cm弱の水口が開くが、埋土等の詳細は記録していない。また、北畦畔の西端部も開くが、詳細不明。

[SS-123]

SS-116の北側、DS48・49区を中心に見いだした。南側には東半に幅約40cm、比高差3～4cmの畦畔、西半は微弱な高まりによりSS-116と画され、東側は幅40～50cm、比高差2～4cmの畦畔でSS-122と画されている。しかし、西側は南のSS-116西畦畔の延長位置に辛うじて微弱な高まりを見いだしたに留まる。また、北側はSS-135・122北畦畔の延長に畦畔を想定したが見いだせなかった。想定される水田面の広がりは、南辺約2.2m、北辺推定3.3m、南北約5.5mの台形状。水田面の標高は26.13～14m。確認できた水口については、既に述べている。

[SS-124]

DS48・49区、DT48・49区にまたがって広がり、東辺推定約6m、西辺約5m、東西幅約7mを測る台形状を呈する。水田面の標高は26.09～26.11m。南側は幅約50cm、比高差約1cmの畦畔でSS-117と画され、東側は微弱な高まりにより辛うじてSS-123と区分され、西側には幅60cm前後、比高差1～2cmの畦畔でSS-125と画されている。北側も、等高線の走りからして、西半には畦畔が存在した可能性があるが、認識できていない。またその際には、SS-124北側・SS-129西側にもう1枚の水田面が広がることになる。

水口は西畦畔南端部で確認している。幅約80cmでSS-125側に傾斜する。埋土は径1㎜前後の砂粒をまばらに含むオリーブ褐色シルト（図41－48）。

[SS-125]

DU48・49区に位置し、東西約3.5m、南北約5mを測る。水田面の標高は26.06m前後。南側のSS-118との間には幅60cm前後、比高差3～4cmの畦畔、東側SS-124との間には幅60cm前後、比高差約3cmの畦畔、西側SS-126との間には幅60～70cm、比高差2～3cmの畦畔、北側は幅90cm以上、比高差約3cmの畦畔がある。

東畦畔南端と南畦畔両端の水口については既に述べた。北畦畔と西畦畔は連続し、西畦畔の南端で水口が開く。幅50cm以上。段差をもってSS-126側に傾斜するが、埋土の詳細は記録していない。

[SS-126]

DU48・49区に位置する。南側は幅70～80cm、比高差５～６cmの畦畔、東側には幅60cm前後、比高差約２cmの畦畔、西側は幅50cm以上、比高差３～５cmの畦畔、北側を幅70cm以上、比高差約３cmの畦畔でそれぞれ区画され、平面台形状を呈する。水田面の標高は26.10m前後。

水口は東畦畔と西畦畔の南端にそれぞれ開くのみで、南畦畔と北畦畔は閉じたままである。東畦畔南端の水口については先に述べた。西畦畔南端の水口は幅約50cm。SS-127側に傾斜する。埋土は、上部の①層が一部明黄褐色を呈するオリーブ褐色シルトで、径１mm前後の砂粒を含み、小指先程のブロックが混じる。下部の②層はオリーブ褐色シルト（図41－49）。

[SS-127]

DW49区に位置し、東畦畔際は壁壕による攪乱が及び、南側と西側は一連のＬ字状に畦畔で画され、北側は調査区外へと水田面が広がる。結果、東西約５m、南北５m以上を測り、水田面の標高は26.05m弱。東側畦畔は幅50cm以上、比高差５～６cm、南畦畔は幅約60cm、比高差約４cmで、西側でも同じく幅約60cmで、比高差は約２cmとなる。

水口は、東畦畔南端と南畦畔東端に開き、前者は既に詳述済み。後者は西半に攪乱が及び、幅は30cm以上でSS-126側へ傾斜する以外、詳細不明。

[SS-128]

DX49区を中心とし、南側を幅約70cm、比高差６cm前後の畦畔でSS-121と画され、東側は幅約60cm、比高差約３cmの畦畔でSS-127と区画され、西側は幅約80cm、比高差約４cmの畦畔でSS-139と区画されている。なお北側へは調査区外に水田面が広がる。調査範囲内で確認した水田面は、東西約5.2m、南北約3.5m、水田面標高は26.03mである。

東畦畔には水口が開かない。南畦畔には３箇所水口が開き、いずれも南側からの導水が窺える。詳細は既に記述済み。一方、西側畦畔でも、壁壕攪乱を挟んだ南北でややずれがあり、クランク状の水口が存在した可能性がある。

[SS-139]

DY49・50区に位置し、東側を幅約80cm、比高差は約４cmの畦畔で画され、西側と北側は水田面が調査区外へと広がる。攪乱に周囲を囲まれ、検出した範囲は狭い。水田面の標高は26.02m前後。水口については、SS-138あるいはSS-128で既に述べている。

[SS-136]

調査区北東隅部のDQ49区に位置する。南側は幅約70cm、比高差１cm以下の微弱な高まりでSS-135と画され、西側は幅約40cm、比高差約４cmの畦畔でSS-129と画され、東と北へは調査区外へと水田面が広がる。調査範囲内で認められた水田面は東西約2.5m、南北約1.8mで、水田面の標高は26.13m前後。

南畦畔は西端が途切れ水口となるらしいが、詳細不明。西畦畔も南端が水口となる。幅約90cmで、底面はほぼ水平。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径２mm以下の砂粒を多く含み、シルト質土も少量含むが、砂質が強い（図41－50）。

[SS-129]

最初に述べたように、南側水口並びに挟じて東西にSS-129とSS-130に便宜的に分割していたが、畦畔が検出できなかったため、SS-129として一括する。

南側東端には幅70cm弱、比高差約４cmの畦畔がありSS-122と画され、東側は幅約40cm、比高差約４cmの畦畔でSS-136と区画され、南端に水口が開く。

(2)　出土遺物

中層水田出土遺物には、中世の土師器、瓦器、陶磁器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、弥生土器や、石器、鉄器がある。それらは、畦畔部分（b2層）と耕作土層（b3・4層）に大別される。また本来なら、後者は水田面単位あるいは畦畔単位で区別されるべきであるが、城北団地区調単位での取り上げとなってしまっており、一括して報告する。なお、明らかな近現代陶器３点がⅡ－2－④層出土遺物に含まれたが、いずれも調査区西端あるいは北端の土層観察用畔からの出土で、混入品とみなしてⅡ－2－④層出土遺物からは除外した（表６）。

①　畦畔部（b2層）出土の遺物

水田畦畔部から出土した遺物のうち、図化できたのは６点（図42）。１は平底の土師器坏で、底部にわずかな立ち上がりをもち、底部に回転糸切り痕の痕跡を残す。２は小型の土師器坏底部で、回転糸切り離し痕を残す。３・４は貼付高台の土師器椀底部。ともに高台は断面方形。５・６は瓦器椀。５は横ナデにより口縁部がやや外反し、体部には指オサエ痕が残る。炭素の吸着はなく、全面灰白色を呈する。高台は矮小化し、径も小さい。13世紀以降に位置づけられよう（図

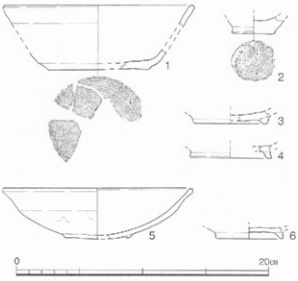


図42　Ⅱ・2・④層畦畔部（b2層）出土遺物（縮尺1/3）

版14－2）。一方、6は断面三角形の貼付高台で、高台径も大きく、5よりは古く位置づけられる。

② 耕作土・床土（b3・4層）出土の遺物

耕作土から出土した遺物から、図化提示できた遺物は104点（図43～45、図版14－3～図版15－2）。

1～54は土師器（図版14－3）。1～11は塊または坏の口縁部ないし体部。1・2は口縁部を横ナデし、端部を外方へ短く屈曲させる。3は、にぶい黄橙色の胎土に橙色の塗彩を施す。端部付近を横ナデし、端部を尖り気味に収める。4も灰白色の胎土に橙色の塗彩を施す。回転ナデにより器面に凹凸が見られる。5～7は体部への横ナデがやや強く、口縁部がやや肥厚し、端部を尖り気味に収める。8は体部から内湾してそのまま口縁部にいたり、端部を丸く収める。9も同様に端部が丸く収まる。10は内外面、11は外面に炭素が吸着し、一見瓦器風。10は端部を外側に小さく屈曲させ丸く収め、体部外面が横ナデにより多段状。11は体部片で、内面に横ナデが顕著。10・11とも、須恵器の範疇とすべきかもしれない。

12～31は坏底部。12～23は平底の底部で、15・20・21は底部にわずかな立ち上がりをもち、他は内湾して立ち上がり体部にいたる。16～23の底部には、回転糸切り離しの痕跡が残る。24・25は底部が外に強く突出し内面が深いタイプ。27～31は円盤状に厚い底部。28～29は小型で、26・30・31には回転糸切り離しの痕跡が残る。

32～54は貼付高台の塊底部。32は断面三角形の高台で、灰白色の胎土に橙色の塗彩を施す。33は外に踏ん張った台形の高い高台で、接地部が凹線状に凹む。34・35の高台は丸みをもった台形状だが分厚い。36～38は断面三角形、39～41は丸みをもった台形状で薄い。42～45は断面三角形ながら、横ナデが顕著で細長い。46～51ではさらに細長くなる。そして、52～54では外底面が膨らんでいる。47・48の内面にはミガキが残り、後者はとくに平行する暗文風となる。また、50の高台内面には、回転糸切り離しの痕跡が残る。

55～67は内黒の黒色土器塊である（図版14－4）。55～60は口縁部。いずれも口縁部外面を横ナデ調整して外反するが、55は大きくS字状に外反し、56は端部をやや外方へ屈曲させる。61～67は貼付高台をもつ底部。61～63は断面三角形の高台で、64～66は端部にやや丸みをもった断面三角形の高台。67は細長い台形の高台である。いずれも内面にミガキを施したとみられるが、残りは良くない。

68～75は瓦器塊（図版14－5）。68～71は口縁部。68は口縁部横ナデが明瞭でやや外反する。体部外面にオサエ痕、内面にミガキがよく残る。75の底部と同一個体の可能性がある。69・70は外反が弱く、70はやや口径が小さい。71は内湾して口縁部にいたり、そのまま端部を丸く収める。72～75は貼付高台の底部。貼付高台断面は、72が比較的外に踏ん張った台形、73は三角形、74は低平な台形。精良な瓦質の胎土で、内面のミガキも丁寧。75は断面三角形ながら、高台径も小さく、貼り付けも丁寧でない、矮小化した高台。13世紀以降に位置づけられる。

76～81は貿易陶磁器で、81のみ青磁で他は白磁（図版14－6～8）。76は薄い玉縁状口縁部の白磁碗Ⅱ類。77・78は厚い玉縁状口縁部の白磁碗Ⅳ類。79は碗体部で、外面下半が露胎である。80は削り出し高台の底部。外面下半は露胎で、削り時の工具のアタリ痕が残る。削り出しが浅く、見込みを凹ませる点で白磁Ⅳ－1b類に類似する。81は龍泉窯系Ⅰ－4類の青磁碗体部である。外面には2条の沈線、内面には2条1単位の片彫りの文様を施す。12世紀中頃～後半。この他に、DT48区で白磁体部小片1点、DV48区で白磁と龍泉窯系青磁の体部小片各1点が出土している。

82～88は須恵器。82・83は坏身の受け部。82は厚ぼったく、やや高い口縁部をもつ。84は平底の坏底部で、体部は直線的にのび、底部は回転ヘラ切り。内外面に火襷が認められる。85は鉢口縁部片。86は小型壺類の

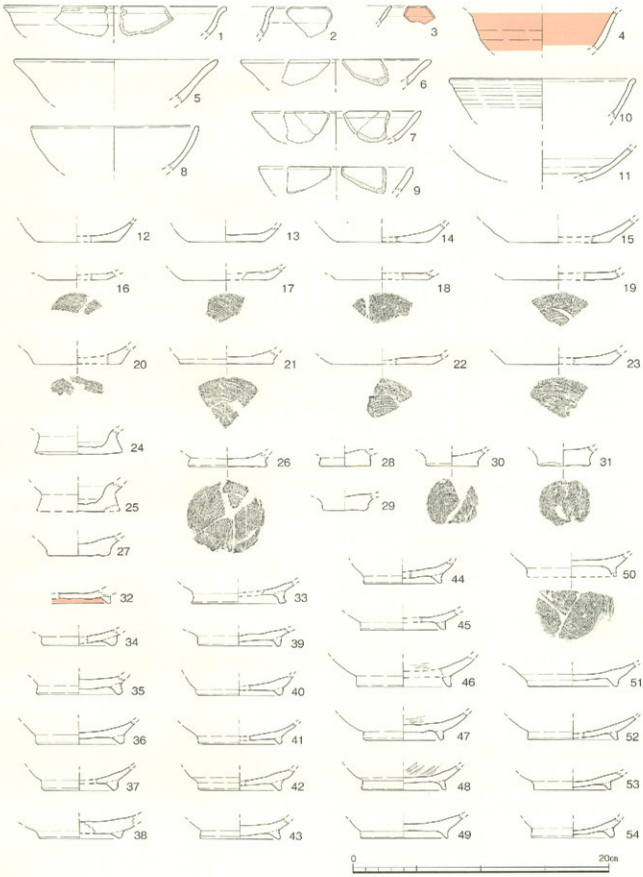


図43　Ⅱ－2－④層耕作土（b3・4層）出土遺物(1)　（縮尺1/3）

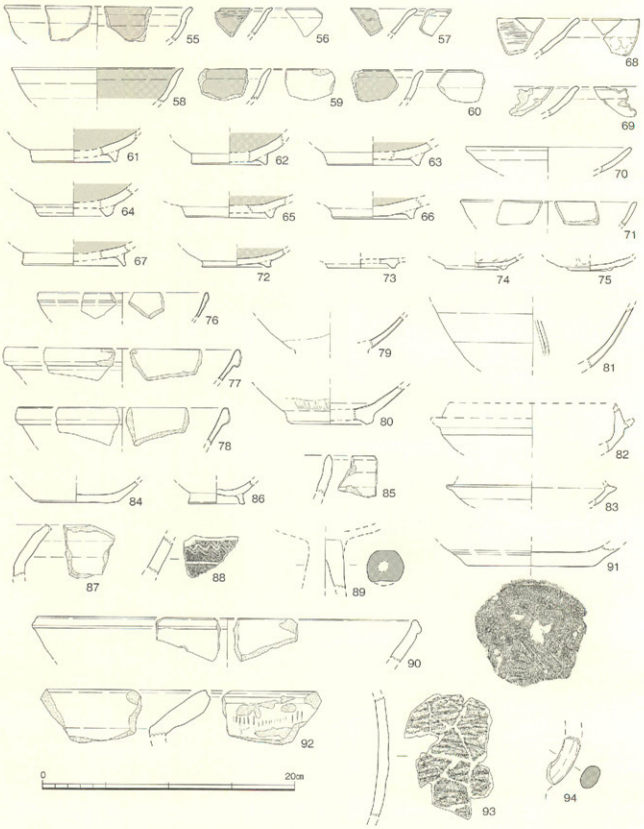


図44　Ⅱ-2-④層耕作土（b3・4層）出土遺物(2)（縮尺1/3）

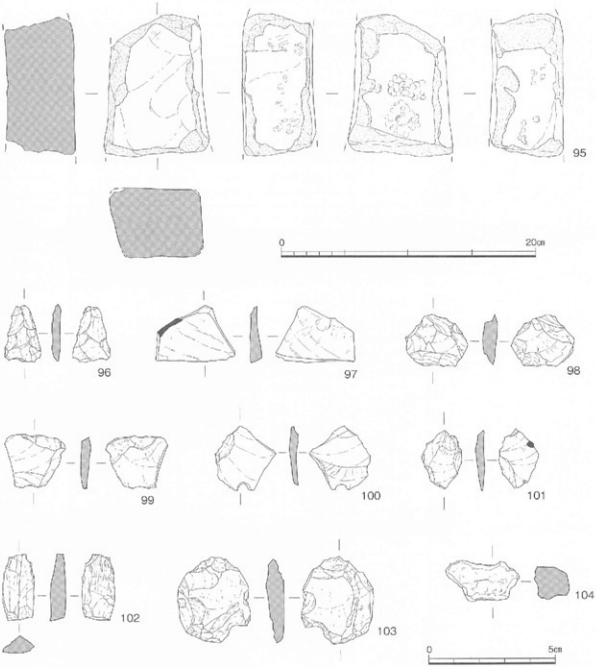


図45　Ⅱ－2－④層耕作土（b3・4層）出土遺物(3)ー石器・鉄器ー　（縮尺1/3・2/3）

高台部。87は壺の直線的な口縁部。端部は横ナデによりやや外反し、その端部は面をなす。88は甕口縁部。外面に波状文および沈線文を施す。

89は土師器高坏の脚柱部。坏部と脚柱部は別造りで、側面に粘土を補充して接合したと想定される。断面形は不明瞭ながらも多角形を呈している。

90はこね鉢口縁部。端部を丸く収め、東播系Ⅱ－2段階の口縁部と考えられる。焼成は軟質で、瓦質土器に近似する。91は底部で、焼成は軟質で著しく磨滅しているが、底面にヘラ切りの痕跡が認められる。

92は土師器甕の口縁部。外面は縦方向のハケ目の後、ナデを施す。93は土師器甕胴部片。外面横方向のタタキ調整。

94は弥生土器の把手部。断面は楕円形を呈する。

表6　Ⅱ-2-④層出土遺物観察表

図42　Ⅱ-2-④層畦畔部（b2層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R30073	r3216 r3128	b2層 b1層	SS126北畦（DU・DV49） SS126	土師器	坏	全形	内外面回転ナデ。外底面回転糸切り離し痕。内外面浅黄橙色、外底面灰黄褐色。微細な石英・長石まばらに含む。	6
2	R30068	r3166	b2層	SS101-106間畦（DR46-1）	土師器	坏	底部	内外面回転ナデ。外底面回転糸切り離し痕。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	6
3	R30072	r3192	b2層	SS111-112間畦（DU・DV47）	土師器	椀	底部	全面摩滅。内外面淡橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	6
4	R30075	r3219	b2層	SS133-106間畦（DQ46）	土師器	椀	底部	高台周辺横ナデ、内面摩滅。にぶい黄橙色。微細な石英・長石まばらに含む。	6
5	R30074	r3216	b2層	SS126北畦（DU・DV49）	瓦器	椀	全形	外面上半横ナデ、下半指オサエ、内面摩滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	6
6	R30076 R30050	r3219 r3122	b2層 b1層	SS133-106間畦（DQ46） SS122	瓦器	椀	底部	全面摩滅。外面明黄褐色、内面灰白色。石英・長石の砂粒とチャートの細礫わずかに含む。	6

図43～45　Ⅱ-2-④層耕作土（b3・4層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R30152	r3267	b3・4層	DU46	土師器	椀 or 坏	口縁部	外面横ナデ、内面ミガキか。外面灰白色、内面浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	7
2	R30182	r3283	b3・4層	DW46	土師器	椀 or 坏	口縁部	全面摩滅。外面淡赤橙色、内面褐灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
3	R30123	r3253	b3・4層	DS48	土師器（赤彩）	椀 or 坏	口縁部	外面横ナデ、内面摩滅。内外面橙色（赤彩）、断面にぶい黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
4	R30142	r3262	b3・4層	DT48	土師器（赤彩）	椀 or 坏	体部	全面摩滅。内外面橙色（赤彩）、断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
5	R30136	r3260 r3262 r3263	b3・4層 b3・4層 b3・4層	DT47 DT48 DT48	土師器	椀 or 坏	口縁部	全面摩滅。橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
6	R30100	r3239	b3・4層	DR47	土師器	椀 or 坏	口縁部	内外面摩滅。灰黄褐色。微細な石英・長石、赤色粒多く含む。	7
7	R30117	r3250	b3・4層	DS47	土師器	椀 or 坏	口縁部	全面摩滅。灰白色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	7
8	R30175 R30178	r3280 r3281	b3・4層 b3・4層	DV48 DV48	土師器	椀 or 坏	口縁部	全面摩滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	7
9	R30189	r3289	b3・4層	DW48	土師器	椀 or 坏	口縁部	全面摩滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
10	R30103	r3240 r3250	b3・4層 b3・4層	DR47 DS47	土師器？	椀	口縁部	内外面横ナデ、外面はナデにより多段。灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
11	R30106	r3242	b3・4層	DR48	土師器？	椀	体部	外面摩滅、内面横ナデ。外面灰色、内面灰白色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	7
12	R30111	r3247	b3・4層	DS46	土師器	坏	底部	全面摩滅。外面浅黄橙色、内面黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	7
13	R30151	r3267	b3・4層	DU46	土師器	坏	底部	全面摩滅。にぶい橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	7
14	R30110	r3247	b3・4層	DS46	土師器	坏	底部	全面摩滅。外面灰白色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	7
15	R30112	r3247	b3・4層	DS46	土師器	坏	底部	外面摩滅、内面横ナデ。外面灰白色、内面浅黄橙色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	7
16	R30116	r3250	b3・4層	DS47	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。外面黄灰色、内面灰黄色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
17	R30181	r3283	b3・4層	DW46	土師器	坏	底部	外面横ナデ、内面摩滅。外底面回転糸切り離し痕。外面黒褐色、内面灰黄褐色、断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
18	R30193	r3294	b3・4層	DX47	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	7
19	R30169	r3278	b3・4層	DV46	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。	7
20	R30187	r3284	b3・4層	DW46	土師器	坏	底部	全面摩滅、内外面ナデか。外底面回転糸切り離し痕。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
21	R30150	r3267	b3・4層	DU46	土師器	坏	底部	内外面ナデ、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。微細な石英・長石多く含む。	7
22	R30170	r3278	b3・4層	DV46	土師器	坏	底部	内外面横ナデ、外底面回転糸切り離し痕。外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
23	R30154	r3268	b3・4層	DU47	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
24	R30102	r3240	b3・4層	DR47	土師器	坏	底部	中空の柱状高台。内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
25	R30206	r3316	b3・4・c1・2層	DS45畦	土師器	坏	底部	中空の柱状高台。内外面回転ナデ。外面灰黄色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒、微細な雲母、赤色粒多く含む。	7
26	R30190	r3291	b3・4層	DX46	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。内外面灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	7
27	R30124	r3253	b3・4層	DS48	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕か。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
28	R30191	r3291	b3・4層	DX46	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕か。褐灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
29	R30160	r3272	b3・4層	DU48	土師器	坏	底部	全面摩滅、内面剥落。外底面回転糸切り離し痕か。橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
30	R30163	r3276	b3・4層	DV46	土師器	坏	底部	内外面横ナデ。外底面回転糸切り離し痕。外面浅黄橙色・内面灰白色。石英・長石の砂粒多く含む。	7
31	R30162	r3276	b3・4層	DV46	土師器	坏	底部	全面摩滅、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	7
32	R30209	r3323	b3・4・c1・2層	DV50畦	土師器（赤彩）	椀	底部	全面摩滅。高台内面橙色（赤彩残存）、断面灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
33	R30171	r3278	b3・4層	DV46	土師器	椀	底部	外面横ナデ、内面摩滅。外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
34	R30078	r3227	b3・4層	DQ46	土師器	椀	底部	高台周辺横ナデ、内面摩滅。外面にぶい橙色、内面褐灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
35	R30216	r3328	b3・4・c1・2層	DY46畦	土師器	椀	底部	全面摩滅。外底面回転糸切り離し痕か。外面にぶい褐色、内面浅黄橙色、高台～外底面橙色。微細な石英・長石まばらに含む。	7
36	R30211	r3324	b3・4・c1・2層	DW45畦	土師器	椀	底部	全面摩滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
37	R30164	r3276	b3・4層	DV46	土師器	椀	底部	全面摩滅。浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒ごくわずかに含む。	7
38	R30109	r3246	b3・4層	DS46	土師器	椀	底部	全面摩滅。外面にぶい黄橙色、内面灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	7
39	R30099	r3239 r3236 r3237	b3・4層 b3・4層 b3・4層	DR47 DR46 DR46	土師器	椀	底部	全面摩滅。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	7
40	R30133	r3258	b3・4層	DT46	土師器	椀	底部	全面摩滅。外面淡黄色、内面灰黄褐色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
41	R30172	r3278	b3・4層	DV46	土師器	椀	底部	全面摩滅。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
42	R30137	r3260	b3・4層	DT47	土師器	椀	底部	全面摩滅。外面灰白色、内面浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	7

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
43	R30144	r3266	b3・4層	DU46	土師器	坏	底部	全面磨滅。淡黄色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	7
44	R30118	r3250	b3・4層	DS47	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰黄褐色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
45	R30208	r3323	b3・4・c1・2層	DV50畦	土師器	坏	底部	外面横ナデ、内面磨滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
46	R30207	r3321	b3・4・c1・2層	DU46南壁	土師器	椀	底部	外面横ナデ、内面ミガキ。外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色、高台内面灰色。微細な石英・長石、雲母まばらに含む。	7
47	R30132	r3258	b3・4層	DT46	土師器	椀	底部	外面横ナデ、内面ミガキ。浅黄橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
48	R30104	r3241	b3・4層	DS46	土師器	椀	底部	外面横ナデ、内面平行の暗文。灰黄褐色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	7
49	R30131	r3258	b3・4層	DT46	土師器	椀	底部	全面磨滅。外面淡黄色、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	7
50	R30210	r3324	b3・4・c1・2層	DW45畦	土師器	椀	底部	全面磨滅、外底面回転糸切り離し痕。浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	7
51	R30166	r3277	b3・4層	DV46	土師器	椀	底部	全面磨滅、外面横ナデか。浅黄橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	7
52	R30167	r3277	b3・4層	DV46	土師器	椀	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	7
53	R30108	r3246	b3・4層	DS46	土師器	椀	底部	全面磨滅。浅黄橙色。石英・長石の砂粒と赤色粒まばらに含む。	7
54	R30138	r3260	b3・4層	DT47	土師器	椀	底部	全面磨滅。淡黄色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	7
55	R30105	r3241	b3・4層	DS46	黒色土器(内)	椀	口縁部	内外面横ナデ。外面灰黄褐色、内面黒色。微細な石英・長石わずかに含む。	8
56	R30067	r3229	b3・4層	DQ47	黒色土器(内)	椀	口縁部	口縁端部付近横ナデ、外面ナデ、内面ミガキ。外面にぶい黄橙色、内面オリーブ黒色。胎土精良。	8
57	R30068	r3229	b3・4層	DQ47	黒色土器(内)	椀	口縁部	外面横ナデ、内面ミガキ。外面灰黄褐色、内面暗灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	8
58	R30130	r3256	b3・4層	DS49	黒色土器(内)	椀	口縁部	内面・口縁部外面回転ナデ、外面磨滅。外面灰白色、内面灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
59	R30127	r3254	b3・4層	DS48	黒色土器(内)	椀	口縁部	内面・口縁部外面ナデ、外面磨滅。外面灰白色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	8
60	R30183	r3283	b3・4層	DW46	黒色土器(内)	椀	口縁部	全面磨滅、内面ミガキか。外面灰白色、内面と外面の一部黒色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
61	R30168	r3277	b3・4層	DV46	黒色土器(内)	椀	底部	外面横ナデ、内面磨滅。外面灰白色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
62	R30113	r3247	b3・4層	DS46	黒色土器(内)	椀	底部	全面磨滅。外面にぶい黄橙色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。砂岩中礫も含む。	8
63	R30184	r3283	b3・4層	DW46	黒色土器(内)	椀	底部	全面磨滅、内面ミガキか。外面灰白色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒、雲母・赤色粒多く含む。	8
64	R30153	r3267	b3・4層	DU46	黒色土器(内)	椀	底部	全面磨滅、高台周辺横ナデ。外面灰白色、内面暗灰色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	8
65	R30198	r3300	b3・4層	DY46	黒色土器(内)	椀	底部	外面横ナデ、内面ミガキ。外面灰白色、内面黒色。石英・長石の砂粒、雲母まばらに含む。	8
66	R30139	r3260 r3261	b3・4層 b3・4層	DT47 DT47	黒色土器(内)	椀	底部	全面磨滅。外面浅黄橙色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
67	R30214	r3327	b3・4・c1・2層	DY45畦	黒色土器(内)	椀	底部	高台周辺横ナデ。内面磨滅、ミガキか。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
68	R30173	r3279 r3043	b3・4層 b1層	DV47 DV48	瓦器	椀	口縁部	75と同一個体の可能性あり。全面磨滅。口縁部横ナデ、体部外面指オサエ、体部内面横方向ミガキ。外面黄灰色、内面黒色、断面にぶい赤褐色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	8
69	R30089	r3234	b3・4層	DQ49	瓦器	椀	口縁部	全面磨滅、口縁部付近横ナデか。外面灰色、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	8
70	R30101	r3239	b3・4層	DR47	瓦器	椀	口縁部	外面は口縁部横ナデ、体部指オサエ。内面磨滅。外面暗灰色、内面灰黄色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
71	R30145	r3266	b3・4層	DU46	瓦器	椀	口縁部	全面磨滅。外面暗灰色、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	8
72	R30140	r3260 r3105	b3・4層 b1層	DT47 SS115	瓦器	椀	底部	全面磨滅。暗灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	8
73	R30092	r3236	b3・4層	DR46	瓦器	椀	底部	全面磨滅。外面黒色、内・断面淡黄色。微細な石英・長石多く含む。	8
74	R30146	r3266	b3・4層	DU46	瓦器	椀	底部	図49-32(Ⅱ-2-⑤層)と同一個体の可能性あり。全面磨滅、内面暗文。外面灰白色、内面暗灰色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	8
75	R30155	r3268 r3048 r3132	b3・4層 b1層 b1層	DU47 DW46 SS127	瓦器	椀	底部	68と同一個体の可能性あり。高台周辺横ナデ、外面指オサエ、内面ミガキか。外面黒褐色、内面褐灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	8
76	R30141	r3260	b3・4層	DT47	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。内外面施釉・灰白色。微細な黒色粒わずかに含む。	8
77	R30157	r3269	b3・4層	DU47	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。内外面施釉・灰白色。微細な黒色粒まばらに含む。空隙まばらにあり。	8
78	R30147	r3266	b3・4層	DU46	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。内外面施釉・灰白色。微細な黒色粒まばらに含む。空隙わずかにあり。	8
79	R30195	r3295	b3・4層	DX47	白磁	碗	体部	内外面施釉・灰白色、外面下半露胎・灰白色。微細な黒色粒わずかに含む。やや空隙あり。	8
80	R30134	r3258 r3086	b3・4層 b1層	DT46 SS107	白磁	碗	底部	削出高台。内外面施釉・灰白色、外面下半は露胎・灰白色。微細な黒色粒まばらに含む。やや空隙あり。	8
81	R30177	r3280	b3・4層	DV48	青磁	碗	体部	龍泉窯系。外面横方向の直線文2条、内面2条1単位の縦方向のヘラ描文。内外面施釉・灰オリーブ、素胎灰白色。わずかに空隙あり。	8
82	R30149	r3266	b3・4層	DU46	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。外面暗灰色、内面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
83	R30128	r3255	b3・4層	DS49	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
84	R30204	r3315	b3・4・c1・2層	DR50	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。外底面ヘラ切り離し痕。灰色。外面に火襷か。微細な石英・長石まばらに含む。	8
85	R30200	r3303	b3・4層	DY47	須恵器	鉢	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰色、断面褐灰色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	8
86	R30206	r3315	b3・4・c1・2層	DR50	須恵器	壺	高台部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒と炭化物まばらに含む。	8
87	R30212	r3325	b3・4・c1・2層	DW50畦	須恵器	甕	口縁部	内外面回転ナデ。外面褐灰色、内面灰色。石英・長石の砂粒多く含む。	8
88	R30215	r3328	b3・4・c1・2層	DY46畦	須恵器	甕	口縁部	外面、波状文の下方に1条の沈線文。内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
89	R30085	r3231	b3・4層	DQ48	土師器	高坏	脚部	脚断面は多角形状。全面磨滅、内面にシボリ痕。橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	8
90	R30188	r3286	b3・4層	DW47	須恵質陶器	こね鉢	口縁部	全面磨滅、内外面回転ナデ。外面灰白色、内面灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
91	R30180	r3283	b3・4層	DW46	須恵質陶器	こね鉢	底部	全面磨滅、外底面ヘラ切り。焼成は軟質で灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	8
92	R30161	r3275	b3・4層	DU49	土師器	甕	口縁部	口縁端部付近横ナデ。口縁部外面縦ハケ目後ナデ、胴部との境に指頭痕残る。口縁部内面横ナデ、胴部内面横ナデ。小片のため不確実だが、口縁部径は50～60cm程と推定される。内外面浅黄橙色、断面黄灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒～細礫、赤色粒多く含む。器表に現れているのは赤色に変色。	8
93	R30121	r3253	b3・4層	DS48	土師器	甕	胴部	傾き・天地は任意。外面横方向の平行タタキ、内面磨滅。外面橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	8
94	R30197	r3300	b3・4層	DY46	弥生土器	ジョッキ形？	把手	全面磨滅。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒と赤色粒非常に多く含む。	8

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
種別	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
95	R30097	r3237	b3・4層	DX46	石器	砥石		砂岩製。現重量825g。4面とも使用して使用。側面は敲打の後砥面に。裏面には敲打痕が明瞭に残る。一部欠損。	9
96	R30099	r3244	b3・4層	DX49	石器	石錘	全形	サヌカイト製。平基式。現重量12g。磨滅顕著。	9
97	R30082	r3229	b3・4層	DQ47	石器	剥片		サヌカイト。現重量30g。	9
98	R30084	r3229	b3・4層	DQ47	石器	剥片		サヌカイト。現重量26g。	9
99	R30119	r3250	b3・4層	DS47	石器	剥片		サヌカイト。現重量15g。	9
100	R30100	r3234	b3・4層	DQ49	石器	剥片		サヌカイト。現重量17g。	9
101	R30085	r3232	b3・4層	DQ48	石器	剥片		サヌカイト。現重量15g。	9
102	R30203	r3307	b3・4層	DY49	石器	石錘未製品？		赤色岩質。現重量25g。	9
103	R30079	r3227	b3・4層	DQ46	石器	剥片		赤色岩石。現重量8g。腹・背面の半央の表皮面は焼より黒化が進む。	9
104	R30126	r3253	b3・4層	DS48	鉄滓	鉄滓		現重量17g。	16

ジョッキ形か。

95～103は石器。95は砂岩製の砥石。擦痕は明瞭でないが、4面とも平滑で砥面としての使用が窺える。側面は敲打の後、砥面として使用している。表面には集中的な敲打の痕跡が残る。被熱のためか一部黒変しており、破面には光沢が認められる（図版15－1）。96はサヌカイト製石鏃。平基式で、比較的大きめの剥離で全体を調整しているが、磨滅が著しい（図版15－2）。97～101はサヌカイトの剥片。102は赤色頁岩製で、カット面及び剥片剥出痕から残核と考えているが、縁辺部に調整剥離が認められ、石鏃未製品の可能性もある。103は赤色頁岩の剥片である。

104は鉄滓で、7.0ｇを量る。

(3) 小結

まず、出土水田遺構自体、Ⅱ－2-②層（上層水田）ほどの遺存が18次調査とはなく、一部掘りすぎた部分もあるが、一連の水田の広がりと認められる。

その水田耕作時期であるが、底部に回転糸切りを残す土師器坏が安定的に認められること、土師器埦底部の高台が細く高いものを含むこと、さらには白磁埦Ⅳ類などから、12世紀を遡ることはない。そして、瓦器が畦部・耕作土とも一定認められ、その形態はむしろ12世紀後半以降のものが多い。とりわけ、13世紀に降る可能性が高い、かなり矮小化した高台をもつ個体が、畦畔部でも耕作土においても認められる（図42－5・図44－75、図版14－5）。また、12世紀末葉から13世紀前葉に位置づけられる瓦泉窯系Ⅰ－4類青磁埦も、白磁埦Ⅳ類とともに耕作土から出土している（図44－81、図版14－8）。したがって、中層水田の時期は、12世紀末葉から13世紀前半まで降る可能性もある。なお、Ⅱ－2-③層として掘りすぎた中にも、これ以降の遺物はみられない。

7　Ⅱ－2-④層とⅡ－2-⑤層の間の遺構と出土遺物

Ⅱ－2-⑥層上面の水田遺構を検出中に、その水田面を切り込む遺構を一部検出し、その後の断面精査により、Ⅱ－2-④層より下位で、Ⅱ－2-⑤層内で掘り込まれた遺構であることが明らかになった。なお、調査区東部では、Ⅱ－2-④層中にさらに水田面とみられる層界が一部認められ、この面が、調査区西部でⅡ－2-④層とⅡ－2-⑤層の間の遺構に対応する可能性もある。

(1) 遺構

検出した遺構は溝SD-150である（図46、図版5－3）。DX・DY47区において検出され、東側は壁塁とみられる攪乱で切られ、攪乱以東では検出できなかった。西側は、調査区外へと延び、確認した長さは、東西約8.5m。南北幅は80～100cm、深さは12cm前後である。方向は、わずかながら東側で南に振れ、18次調査で同様の層序で出土したSD-208・SD-209とほぼ平行する。下層水田以降の耕作等により削平されてしまった、一連の水田遺構の一端を形成したものとみられる。なお、その水田遺構に一部該当する可能性のある面を、調査区東壁ではみられた。

埋土は、調査区西壁と、さらにもう2箇所で確認している。土層観察畦では、上部に、径1㎜の白色砂粒を多く含み、小指先大の円礫も含む黄褐色砂質シルト（①層）が広く堆積する。西側ではその下部に、さらに径1～2㎜前後の砂礫を多く含むオリーブ褐色砂質

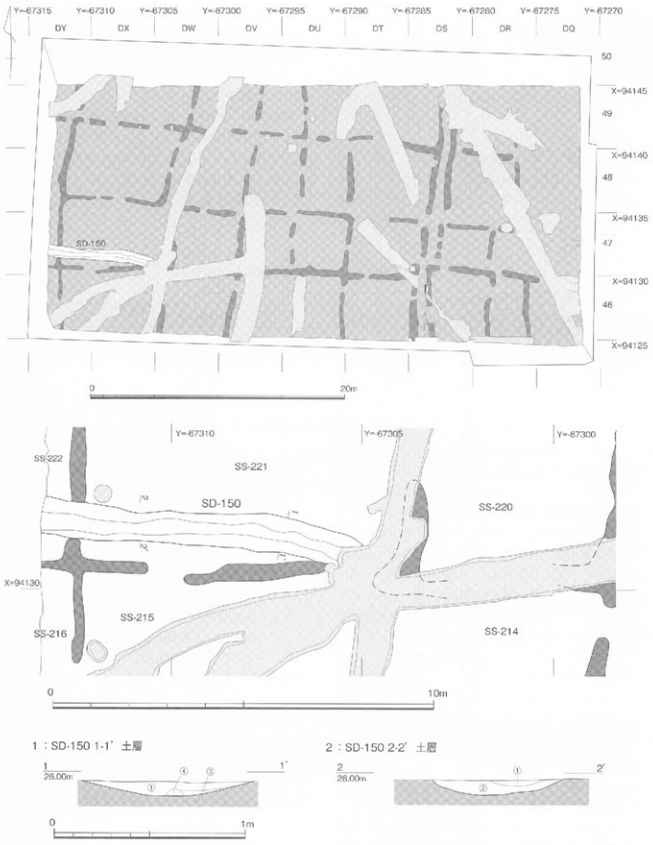


図46　Ⅱ－2－④層とⅡ－2－⑤層の間の遺構　（縮尺1/300、1/100、1/20）

図47　Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑤層の間の遺構出土遺物
（縮尺1/3）

シルト（②層）が厚い。調査区西壁では、①層と②層を一括して、径1～3㎜の砂粒・砂礫を多く含む暗灰黄色砂質土とした。東側では、最下部に目だった砂礫を含まないオリーブ褐色砂質シルトの③層と、やや粘性強く砂礫はほとんど含まない黄褐色砂質シルトの④層が堆積している。

(2)　出土遺物

SD-150からは黒色土器、土師器、須恵器、弥生土器などの細片が出土しているが、直接SD-150の時期を示す遺物はない。図化できたのは黒色土器1点のみ（図47、表7）。内黒の黒色土器塊底部で、断面三角形の高台を貼り付ける。

表7　Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑤層の間の遺構出土遺物観察表

図47　Ⅱ-2-①層とⅡ-2-⑤層の間の遺構出土遺物

遺物番号			出土位置			遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	写真番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区		種別	器種	部位		
1	P32217	c5154 c5329	c1層 h3・4・c1・2層	SD150 (DX47) DY47層		黒色土器(内)	塊	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面暗灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	10

8　Ⅱ-2-⑤層（下層水田覆土）と出土遺物

調査時にc1層としたⅡ-2-⑤層は、下層水田の覆土層である。Ⅱ-2-④層の下部の、径1㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルトで、鉄分の沈着により明黄褐色を呈する。出土遺物には、中世の土師器、瓦器、陶磁器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、弥生土器や、石器、鉄器がある。これらは、Ⅱ-2-①・③層同様、上部は城北国地区割にしたがい5m区画で遺物を取り上げ、水田畦畔検出後には水田区画単位で遺物を取り上げた。前者をⅡ-2-⑤層上部、後者をⅡ-2-⑤層下部とし、石器・鉄器については、上部と下部を一括して報告する（表8）。なお調査区北東部では、Ⅱ-2-⑤層下でSR-301-②層となり、同層出土遺物が取り上げ時に混じった可能性がある。

(1)　Ⅱ-2-⑤層上部出土遺物

Ⅱ-2-⑤層上部出土土器からは15点を図化した（図48、図版15－3～5）。11・12以外は土師器である。

1～10は土師器の坏・塊類（図版15－3）。1は端部を内面に丸く巻き込み、体部外面に横方向のミガキを施す塊口縁部。2は底部からそのまま内湾気味に立ち上がる平底の坏。底部には板目状圧痕が残る。3・4は円盤状に厚い坏底部。5は小型の坏底部。6は口縁部と底部が直接接合しないが、胎土と焼成から同一個体と判断した塊。口縁端部内面には微弱ながら稜線があり、底部は三角形状の貼付高台を有する。7～10は塊底部。7は断面三角形、8は方形状、9は横ナデによりやや高く細くなった三角形状の貼付高台をもつ。10は丸みを帯びて薄い三角形状の貼付高台で、ゆがみもある。形態的には瓦器とみられるが、胎土は粗く、内面橙色で、土師器とした（図版15－4）。

11は内黒の黒色土器塊底部。高台部分を欠失するが、貼り付け面に接合のための沈線が認められる。12は瓦器塊底部。オサエによる体部の凹凸が著しく、脆弱な貼付高台を有する（図版15－5）。

13～15は土師器甕。13は口縁部で、直線的にのびて端部は面をなす。14・15は胴部で、傾きは任意。14は外面に不定方向のハケ目で胎土が粗い。15は外面に横方向の平行タタキ、内面に縦ハケ目を施す。

(2)　Ⅱ-2-⑤層下部出土遺物

Ⅱ-2-⑤層下部出土土器からは38点を図化した（図49、図版15－6）。先記したように、このうち

SX-207・209・210上部には、SR-301-②層の遺物が紛れ込んでいる可能性がある。

1～21は土師器。1は体部外面にはオサエ痕が残り、口縁端部が外反し、器壁が薄いなど、瓦器に類似した形態・調整の埦口縁部。ただし、浅黄橙色の胎土に橙色の塗彩を内外面に施す。2・3も埦口縁部で、2は横ナデのため口縁端部付近がわずかに外反する。3は口縁端部をわずかに外方に屈曲させる。4は内外面に横方向のミガキを施す埦体部。中位に微弱ながら稜線があり、内面は薄いながらやや黒みもあり、内黒の黒色土器の可能性もある。5～8は平底の坏。5は底部付近の横ナデにより、底部からわずかに立ち上がり、反転して直線的に外傾する体部にいたる。底面は回転ヘラ切り離し。6は底部からそのまま内湾気味に立ち上がる。7・8は灰白色の胎土に橙色の塗彩を施す。9～12は円盤状高台の坏底部。9は外面に薄く橙色の胎土を用いている。13・14は小皿で、底部回転糸切り離し。14は口縁部内面に、にぶい橙色の塗彩が残る。15～21は貼付高台を有する埦底部。15は断面三角形状、16～18はやや丸みを帯びた台形状、19は長く細い台形状、20・21は細長い三角形状の高台である。なお、21は灰白色の胎土を外面側に、赤橙色の胎土を内面側に用いている。

22～27は内黒の黒色土器の埦。22・23は口縁部。横ナデにより、22は明瞭に、23はわずかに口縁端部が外反する。24～27は、いずれもやや丸みを帯びた三角形状の貼付高台をもつ底部。28・29は内外面に黒色処理を施した両黒の黒色土器。28は口縁部を横ナデにより大きく外反させる。29は底部。

30～32は瓦器。30は横ナデにより口縁部外面が凹み、端部を丸く収める埦口縁部。31は端部を尖り気味に収める埦口縁部で、横ナデによりわずかに外反し、指オサエにより外面下半が凹む。32は埦底部で、高台端部を欠損しているが、残存部から断面方形状とみられる。胎土は精良で、内面には一定方向の散発的なミガキが2条1単位で施されている。

33は土師器甕口縁部。口縁部で短く屈曲外反する。

34～37は須恵器。34は坏口縁部で、端部をやや外方に屈曲させて尖り気味に収める。35・36は平底の坏底部。35の器壁は4㎜程度と薄い。36の底面は回転ヘラ切り。37は大型の底部で、底部から緩やかに湾曲して体部へいたる。盤の底部片とみられる。

38は須恵質陶器の甕胴部片。煤き・天地は任意。外面に平行タタキで、内面は青海波文をナデ消す。

(3) Ⅱ－2－⑤層出土石器

Ⅱ－2－⑤層出土の石器からは3点を図化した（図50）。1・3が上部、2は下部出土。1は白く風化し

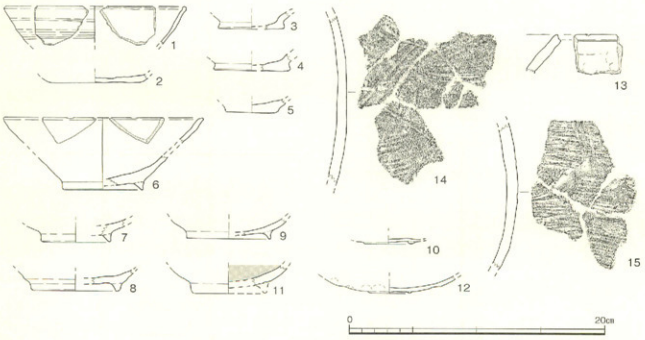


図48　Ⅱ－2－⑤層（c1層）上部出土遺物　（縮尺1/3）

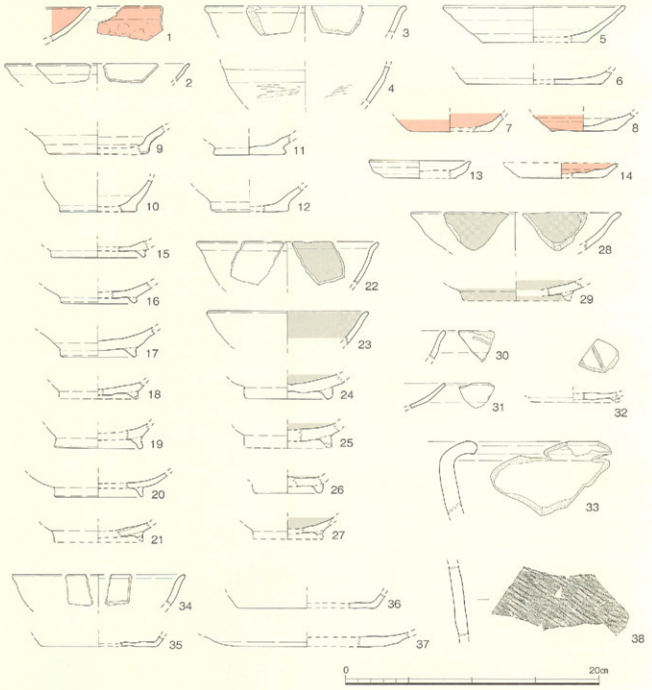


図49　Ⅱ・2・⑤層（c1層）下部出土遺物　（縮尺1/3）

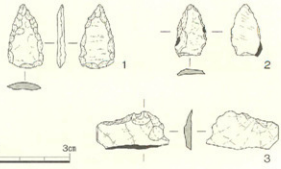


図50　Ⅱ・2・⑤層（c1層）出土遺物－石器－　（縮尺2/3）

た安山岩質の石鏃。剥離は縁辺部にとどまり素材面を大きく残しているが、磨滅のため素材面の剥離等は観察できない。平基式（図版15－７）。２は石鏃未製品と考えられる。サヌカイト製。横長剥片を用い、腹面右側は細かい剥離により刃部を作り出しているが、左側は刃部を形成していない部分があり、背面はほとんど調整されていない。３はサヌカイトの剥片。

⑷　小結

Ⅱ-２-⑤層からは、白磁などの貿易陶磁は出土しておらず、回転糸切りは土師器小皿に１点みられるのみ。土師器埦や内黒黒色土器埦の高台形状からしても、12世紀前半頃までに収まるとみられる。ところが、上部でも下部でも、比較的安定して出土する瓦器埦については、Ⅱ-２-④層で指摘したと同様に、むしろ新しい様相が認められる。とりわけ、上部出土の瓦器埦（図48－12）は高台が微弱で、身の開きが大きく、13世紀に降る可能性が高い。瓦器様の土師器埦（図48－10）も同様である。下層水田の埋没は、13世紀代まで降る可能性も考えられる。

表８　Ⅱ-２-⑤層出土遺物観察表

図48　Ⅱ-２-⑤層（c1層）上部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R40007	r4048	c1層	DT48	土師器	埦	口縁部	内外面回転ナデ、外面一部横方向ミガキ。内外面灰白色。微細な石英・長石と赤色粒わずかに含む。	11
2	R40021	r4100	c1層	DX49	土師器	坏	底部	全面磨滅。外底面板状圧痕。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	11
3	R40016	r4091	c1層	DX45	土師器	坏	底部	円盤状高台。全面磨滅、外面回転ナデか。橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	11
4	R40001	r4015	c1層	DR47	土師器	坏	底部	円盤状高台。全面磨滅。内面指オサエ、ナデ。内外面にぶい黄橙色、外底面灰黄褐色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	11
5	R40039	r4059	c1層	DU48	土師器	坏	底部	小型。全面磨滅、内面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	11
6	R40012	r4069	c1層	DV47	土師器	埦	口縁部	全面磨滅。内外面にぶい黄橙色。口縁部内面一部橙色。微細な石英・長石まばらに含む。	11
	R40011	r4062	c1層	DU49			底部		
7	R40017	r4094	c1層	DX47	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。内外面褐灰色、断面灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	11
8	R40018	r4097	c1層	DX48	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	11
9	R40014	r4080	c1層	DW47	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面浅黄橙色、内面黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	11
10	R40073	r4209	c1層	DW・DX 48・49杭	土師器	埦	底部	炭素の吸着はなく、ゆがみあり。全面磨滅。外面黄灰色、内面橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	11
11	R40010	r4060	c1層	DU48	黒色土器(内)	埦	底部	高台欠損。全面磨滅、外面ナデ。外面灰黄褐色、内面黒褐色。石英・長石の砂粒多く含む。	11
12	R40020	r4098	c1層	DX48	瓦器	埦	底部	全面磨滅。外面指オサエ。外面黒褐色、断面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	11
13	R40005	r4030	c1層	DS47	土師器	甕	口縁部	内外面横ナデ、口縁部外面指頭痕。明赤褐色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	11
14	R30122	r4049	c1層	DT49	土師器	甕	胴部	傾き・天地は任意。外面不定方向のハケ目調整、内面ナデ。外面明赤褐色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	11
		r4073	c1層	DV48					
		r3253	b3・4層	DS48					
		r3255	b3・4層	DS49					
		r3263	b3・4層	DT48					
15	R40006	r4045	c1層	DT48	土師器	甕	胴部	傾き・天地は任意。外面横方向の平行タタキ、内面縦方向のハケ目。にぶい黄橙色（一部煤付着）。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	11
		r4058	c1層	DU48					
		r3265	b3・4層	DT49					

図49　Ⅱ-２-⑤層（c1層）下部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R40053	r4152	c1層	SS221	土師器(赤彩)	埦	口縁部	口縁部横ナデ、体部外面指オサエ、体部内面磨滅。内外面橙色（赤彩）、断面浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	12
		r4154	c1層	SS221					
		r4172	c1層	SS226					
2	R40046	r4143	c1層	SS218	土師器	埦	口縁部	内外面磨滅、口縁部横ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	12
3	R40029	r4129	c1層	SX210	土師器	埦	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰色、内面にぶい橙色、断面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
4	R40044	r4140	c1層	SS217	土師器	埦	体部	外面横ナデ後横方向ミガキ、内面横方向ミガキ。外面灰白色、内面灰黄褐色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
5	R40024	r4115	c1層	SS204	土師器	坏	全形	内外面回転ナデ、外底面回転ヘラ切り離し痕。内外面浅黄橙色、断面明赤褐色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	12
6	R40033	r4130	c1層	SX210	土師器	坏	底部	全面磨滅。橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	12
7	R40027	r4126	c1層	SX209	土師器(赤彩)	坏	底部	全面磨滅。内外面橙色（赤彩）、断面灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	12
8	R40026	r4120	c1層	SX207	土師器(赤彩)	坏	底部	全面磨滅、内外面回転ナデ。外面灰白色、内面浅黄橙色、断面黒色。底面～外面下半橙色（赤彩残存）。微細な石英・長石まばらに含む。	12
9	R40025	r4116	c1層	SS205	土師器	坏	底部	内外面磨滅、外面回転ナデ、内面ナデか。外面橙色、内・断面灰黄褐色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
10	R40065	r4183	c1層	SS229	土師器	坏	底部	円盤状高台。全面磨滅。褐灰色。微細な石英・長石多く、赤色粒わずかに含む。	12
11	R40034	r4131	c1層	SS212	土師器	坏	底部	円盤状高台。全面磨滅。外面灰白色、内面浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	12
12	R40066	r4183	c1層	SS229	土師器	坏	底部	円盤状高台。全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	12
13	R40062	r4168	c1層	SS225	土師器	小皿	全形	内外面磨滅、外底面回転糸切り離し痕。灰黄褐色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	12
14	R40049	r4147	c1層	SS219	土師器(赤彩)	小皿	全形	内外面磨滅、体部横ナデ。外底面ヘラ切り離し痕か。外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色（赤彩）。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	12
15	R40036	r4133	c1層	SS213	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面灰黄褐色、内面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
16	R40052	r4149	c1層	SS220	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
17	R40050	r4148	c1層	SS220	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。灰黄褐色。微細な石英・長石多く含む。	12
18	R40051	r4148	c1層	SS220	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	12
19	R40048	r4146	c1層	SS219	土師器	埦	底部	高台周辺横ナデ、内面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
	R40071	r4194	c1層	SS224-225間水口（DU48-4）					
20	R40064	r4154	c1層	SS221	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	12
21	R40015	r4084	c1層	DW48	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面橙色（赤彩）、内面赤橙色（赤彩？）、断面灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	12
	R40063	r4171	c1層	SS226					
22	R40039	r4138	c1層	SS215	黒色土器(内)	埦	口縁部	全面磨滅。口唇部外面横ナデか。外面褐灰色・淡赤橙色。内面褐灰色。微細な石英・長石多く含む。	12
23	R40060	r4165	c1層	SS224	黒色土器(内)	埦	口縁部	全面磨滅、外面横ナデ。外面灰黄褐色、内面暗灰色。微細な石英・長石多く含む。	12
24	R40055	r4155	c1層	SS221	黒色土器(内)	埦	底部	内外面磨滅、高台周辺横ナデ。外面褐灰色、内面黒色、断面橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	12
25	R40040	r4138	c1層	SS215	黒色土器(内)	埦	底部	内外面磨滅。外面横ナデ、内面ミガキか。外面にぶい黄橙色、内面暗灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒多く含む。	12
26	R40072	r4198	c1層	SS227-233間水口（DY49-11）	黒色土器(内)	埦	底部	全面磨滅。外面灰黄褐色、内面暗灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒多く含む。	12
27	R40067	r4183	c1層	SS229	黒色土器(内)	埦	底部	全面磨滅。外面にぶい橙色、内面黒色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	12
28	R40059	r4162	c1層	SS223	黒色土器(両)	埦	口縁部	外面横ナデ、内面磨滅。外面褐灰色、一部黒色。内面褐灰色。石英・長石の砂粒、微細な雲母多く、赤色粒わずかに含む。	12
29	R40037	r4136	c1層	SS214	黒色土器(両)	埦	底部	内外面磨滅、外面横ナデか。内外面暗灰色、断面黄灰色。微細な石英・長石多く含む。	12
30	R40070	r4186	c1層	SS231	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅。内外面灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	12
31	R40061	r4165	c1層	SS224	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅。外面灰白色、内面浅黄色、断面暗灰色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	12
32	R40047	r4145	c1層	SS219	瓦器	埦	底部	高台欠損。図44-74（Ⅱ-2-④層）と同一個体の可能性あり。全面磨滅、内面暗文。内外面暗灰色、断面灰白色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	12
33	R40008	r4153	c1層	SS221	土師器	甕	口縁部	内外面ナデ、胴部内面磨滅。外面褐灰色（煤付着）、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	12
		r4051	c1層	DU46					
		r3267	b3・4層	DU46					
		r3321	b3・4・c1・2層	DU46南壁					
34	R40064	r4183	c1層	SS229	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	12
35	R40068	r4186	c1層	SS231	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	12
36	R40028	r4127	c1層	SX209	須恵器	坏	底部	全面磨滅、外底面ヘラ切り離し痕か。灰白色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	12
37	R40058	r4162	c1層	SS223	須恵器	鉢	底部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	12
38	R40035	r4131	c1層	SS212	須恵質陶器	甕	胴部	傾き・天地は任意。外面左上がり平行タタキ。内面青海波文あて具痕ナデ消し。内外面灰色、断面にぶい赤褐色。微細な石英・長石まばらに含む。	12
		r3258	b3・4層	DT46					
		r3267	b3・4層	DU46					

図50 Ⅱ-2-⑤層（c1層）出土遺物－石器－

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R40019	r4097	c1層	DX48	石器	石鏃	全形	安山岩製か。風化が著しく、灰白色。現重量1.1g。平基式。	12
2	R40041	r4138	c1層	SS215	石器	石鏃未製品？		サヌカイト。現重量0.6g。	12
3	R40004	r4022	c1層	DS46	石器	剥片		サヌカイト。現重量1.1g。	12

9　Ⅱ-2-⑥層（下層水田）の遺構と出土遺物

Ⅱ-2-⑥層は、にぶい黄色から黄褐色シルトで、径1～20㎜前後の円礫を少量含む。上部のⅡ-2-⑤層に比べて、砂粒・砂礫の割合は少なく、調査段階での区分は比較的行いやすかった。ただし、以下のSR-301-①層とは、調査段階では、攪拌を受けた上部10cm前後をⅡ-2-⑥層、以下の顕著な攪拌のみられない土層をSR-301-①層として掘り分けを行ったが、土層図ではSR-301-①層と一括してしまっている。また、東部のⅡ-2-⑥層は、1㎜前後の砂粒層を斑状に含み、径5～20㎜前後の砂礫を多く含み、より砂質が強い。そして、DQ48・49、DR49区を中心とした調査区北東部では、Ⅱ-2-⑥層が存在せず、Ⅱ-2-⑤層下でSR-301-②層が出土する。

(1)　遺構

Ⅱ-2-⑤層掘り下げながら、畦畔で区画された水田遺構を検出した。概ね方形の水田区画が整然と並ぶ。大きくは、SD-211を挟んで東西に分かれ、東側をSS-201～210、西側でSS-212～234とした。ただし、調査区東端部ではⅡ-2-⑥層自体砂質が強いこと、そして当初予想していた畦畔が最終的には認められなかったことから、水田面ではないと判断した。SD-211の東側で水田面は東西1～3列となり、水田面と予測していたSS-207・209・210は、番号と該当地区名を残して、SX-207・209・210とした。結果、検出した遺構は水田30面と溝1条、それとSX-207・209・210である（図48・49、巻頭図版2、図版6～8）。

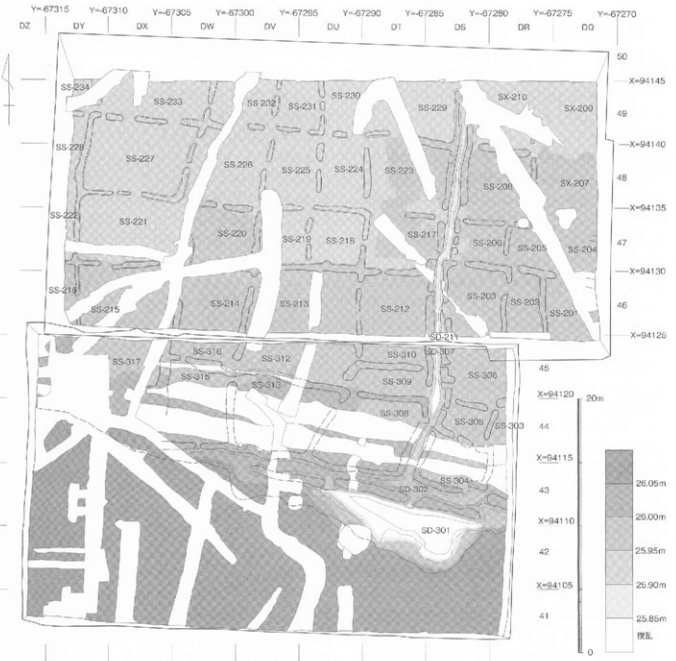


図51　25次調査・18次調査のⅡ－2－⑥層（下層水田）出土遺構配置図　（縮尺1/300）

① 水田ほか

Ⅱ－2－⑥層上面で認めた水田は30枚。SD-211を挟んで東西に2分されている。南東から北西方向へと傾斜するが、比高差は最大10cm程度に過ぎない。

[SS-201]

調査区南東隅部のDQ46区に位置する。検出時にはSS-201としたが、調査進行に伴い一度はSX-201とした。しかし、東壁土層において、X=94129.2m前後の位置で畦畔とみられる盛り上がりがみられ、それが西側のSS-202・205間の東西方向畦の延長にほぼ位置することから、再度水田面として認識することとした。それでも、耕作土自体、かなり砂質が強い。

東半分は塹壕とみられる攪乱等が残り、水田面の残存範囲は三角形状。西側はSS-202との間に幅60cm前後、比高差2cm程度の畦畔により画され、東側と南側は調査区外に広がる。北側は西隅部で一部畦畔が認めら

れ、東西４ｍ以上・南北５ｍ以上の大きさとなる。水田面は標高25.98ｍ前後。ただし、南壁土層ではⅡ-２-⑥層が高く、掘り下げすぎた可能性が高い。

SS-204との間の畦畔が東側で切れており、幅50cm以上の水口がある。ほとんど比高差はないが、SS-201からSS-204へと配水したとみられる。

[SS-202]

SS-201の西隣、DR46区に位置する。南側は調査区外へと広がり、東西約2.5ｍ・南北4.5ｍ以上を測る。東側SS-202との間は幅60cm前後、高さ３cm程度の畦畔、西側SS-203とは幅45cm前後、高さ２cm程度の畦畔、北側SS-205と幅60cm前後、高さ３cm程度の畦畔で、それぞれ画されている。水田面は標高25.95ｍ前後。

西側SS-203との間の畦畔には、幅約60cmの水口が開くが傾斜はほとんどない。また、北西隅部には、SS-205との間に水口が認められ、これもほとんど傾斜がない。幅約35cm。埋土は基本的にⅡ-２-⑤層に等しく、暗灰黄色の砂質土。径１㎜の砂粒を少量、砂質土をラミナ状に含み、やや粘性も伴う（図53－１）。

[SS-203]

SS-202の西、DR・DS46区に位置する。18次調査下層水田SS-306と同一の水田とみられ、東西約４ｍ・南北10ｍを測ることになる。25次調査区内では、東側SS-202とは幅45cm前後、高さ２cm程度の畦畔、西側SD-211との間に幅40cm前後、高さ２cm程度の畦畔、北側SS-206との間に幅60cm前後、高さ２cm程度の畦畔が設けられている。水田面は標高25.95ｍ前後。

東・西・北各畦畔に水口を確認している。東畦畔の水口は、先にSS-202で述べた。西側SD-211との間には、幅約120cmの水口がある。SD-211側に傾斜し、埋土は基本的にⅡ-２-⑤層に等しく、オリーブ褐色砂質土。径１～２㎜の砂粒をやや含み、ラミナ状に砂質土を多く含み、砂質が強い。SD-211への排水が考えられる（図53－２）。北側SS-206との間の畦畔西寄りにも、幅約50cmの水口が設けられる。わずかにSS-206側に傾斜し、SS-203から SS-206への配水が考えられる。埋土は基本的にⅡ-２-⑤層に等しく、オリーブ褐色砂質土。径１～２㎜の砂粒をやや含み、砂質土がラミナ状に混じり、しまりがややある（図53－３）。

[SS-204]

DQ47区に位置する。検出時にSS-204としながら、調査段階では、耕作土層の砂質が強く、畦畔による区画も認められなかったため、SX-204としていた。しかし、東壁土層において、X=94132.6ｍ付近で畦畔とみられる盛り上がりがみられ、それが西側のSS-205・208間の東西方向畦畔の延長にほぼ一致することから、再度水田面とした。ただし、西側SS-205との間は整壌による攪乱が及び、南側も攪乱が大きい。そのため、この整壌以東の南北３ｍ前後の広がりを復元できるに過ぎない。

[SS-205]

SS-204の西隣のDR47区に位置する。上述したように、SS-204との間には攪乱を挟み、畦畔等の詳細不明。SS-204と同じ水田面の可能性もある。西側SS-206との間に幅40cm前後、高さ２cm前後の畦畔があり、南側は幅60cm前後、高さ３cm程度の畦畔、北側も幅50cm前後、高さ３cm前後の畦畔で画され、東西推定約４ｍ、南北約３ｍを測る。水田面の標高は25.95ｍ前後。

西畦畔は南端が切れ、SS-206との間に水口が設けられている。SS-205側が高く、SS-205からSS-206への配水が窺える。埋土は基本的にⅡ-２-⑤層に等しく、暗灰黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒を少量含み、砂質土がラミナ状に混じる。やや粘性がある（図53－４）。また、残存する北畦畔の両側が水口とみられる。このうち東側は狭い範囲で詳細不明。西側は隅部に位置し、SS-208との水口部である。傾斜から、SS-205からSS-208への配水と考えられる。埋土は基本的にⅡ-２-⑤層に等しく、暗灰黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒を含み、砂質土がわずかに混じり、シルト質がやや強く、しまりがある（図53－５）。

[SS-206]

DR・DS47区に位置する、東西約3.5ｍ・南北約３ｍの水田。東側は幅40cm前後、高さ２～３cmの畦畔でSS-205と画され、西側は幅35～45cm、高さ２～３cmの断続的な畦畔がSD-211との間にあり、北側は幅50cm、高さ２～３cmの畦畔により、SS-208と区画されている。水田面の標高は、25.95ｍ前後。

東側畦畔は南端で水口となるが、これについてはSS-206で既に述べた。西側は、畦畔が３箇所で途切れている。南から南水口、中水口、北水口とする。南水口は幅約45cmで、SD-211側に傾斜し、SS-206からSD-211への排水部とみられる。中水口は幅約15cmと狭く、傾斜はあまりない。北水口は幅約25cmで、やはりあまり傾斜はみられない。埋土はいずれも、Ⅱ-２-⑤層に等しく、オリーブ褐色砂質土。径１～２㎜の砂粒を少し含み、砂質土がラミナ状に混じり、砂質がや

図52　Ⅱ・2・⑥層（下層水田）出土遺構配置図（縮尺1/100）

や強い（図53－6～8）。

北側畦畔は、両側でSS-208との水口部となっている。ともにSS-208側に傾斜し、SS-206からSS-208への配水が窺える。東水口は北東隅部に位置する。埋土はⅡ－2－⑤層に等しく、暗灰黄色砂質土。径1～3㎜の砂粒・砂礫を少し含み、砂質土がラミナ状に混じる。シルト質もやや混じる。西水口は幅20cm弱。埋土はⅡ－2－⑤層に等しい暗灰黄色砂質土。径1㎜の砂粒を少し含み、砂質土がラミナ状に少し混じるが、シルト質がやや強い（図53－9・10）。

[SX-207]

当初、SS-208の西側に水田面を想定してSS-207としていたが、耕作土自体砂質が強く保水性が低く、北側に畦畔が確認できない。南側は、SS-204との間に畦畔の存在が復元され、西側はSS-208との間に幅約50cm、高さ3cm前後の畦畔があり、この畦畔南端には水口部が想定されるが、詳細は不明。以上からSS-208の東隣部分は水田外と判断し、およそDQ・DR48区をSX-207として、呼称を残すこととした。

[SS-208]

DR・DS47区を中心に位置する。東西5m弱、南北約5.5mを測る。東側は幅約50cm、高さ3cm前後の畦畔でSX-208と、西側は幅50cm前後、高さ3cm前後の畦畔でSD-211と画されている。南北も、南側は幅50cm、高さ3cmの畦畔によりSS-205・206と画され、北側幅60cm前後、高さ3cm前後の畦畔でSX-210と画されている。水田面の標高は25.95m前後。

SS-207との水口部は詳細不明。SD-211とは西側畦畔

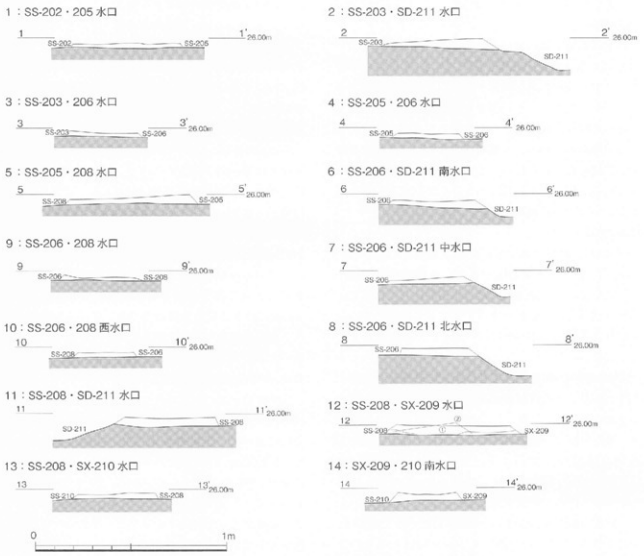


図53　Ⅱ－2－⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図(1)（縮尺1/20）

の南端が途切れ、水口部となる。幅約80cmで、底面が若干凹むが、水田面との傾斜はほとんどない。埋土はⅡ-2-⑤層に等しく、オリーブ褐色砂質土。径1～2㎜の砂粒を含み、砂質土をラミナ状に多く含み、砂質が強い。鉄・マンガン分の沈着がある（図53－11）。北東隅部は、SX-209との水口部となる。傾斜はほとんどない。埋土はⅡ-2-⑤層に等しいが、上下に分かれ、上部の①層が中央部で深い。暗灰黄色砂質土で、径1～2㎜の砂粒をやや含み、砂質土をラミナ状に多く含む。シルト質土も少し含み、粘性がややある。下部の②層は暗灰黄色砂質土。①層に比べてシルト質土の混じりが少ない（図53－12）。さらに、北畦畔の西端が約40cm途切れ、SX-210との水口部となる。傾斜はSX-210側である。埋土はⅡ-2-⑥層に等しい暗灰黄色砂質シルト。径1～3㎜の砂粒・砂礫を含み、しまりがややある（図53－13）。

[SX-209]

調査区北東隅部に水田面を想定してSS-209としていた。しかし、東壁・北壁土層でⅡ-2-⑥層自体が認められず、当初南畦を画すとしていた畦畔も確認できなかった。西側も、平面調査では幅約50cm、高さ3～5cmの畦畔が存在するとしたものの、北壁土層でのⅡ-2-⑥層の不在から、下部のしまりのある砂質土を畦畔と誤認したとみられる。またそのため、掘り下げすぎている。以上から、SS-209とした範囲は水田外と判断し、SX-209の呼称を残すこととした。

[SS-210]

DR49区を中心に水田SS-210を当初想定していた。しかし、Ⅱ-2-⑥層が広がらず、東側畦畔も誤認の可能性が高いことは上述した。水田面とした標高も、25.94m前後と低く、掘り下げすぎている。以上から、水田外と判断し、範囲の呼称としてSX-210を残すこととした。

南側は幅60cm前後、高さ4cm前後の畦畔がSS-308との間にあり、東西両側が水口として開く。詳細は既にSS-208で述べた。東側は、北側畦畔は誤認としたものの、撹乱南側で一部畦畔を認め、水口も開く。幅約50cmで、SX-210側に傾斜する。埋土はⅡ-2-⑤層に等しく、オリーブ褐色砂質土。径1～3㎜の砂粒・砂礫をやや多く含み、砂質土がラミナ状に多く混じる。シルト質土の混じりは少ない（図53－14）。そして西側は、畦畔を挟んでSD-211を控えるが、SD-211との水口は残らない。SX-210からSD-211へと通水する水口が撹乱部に存在した可能性が高い。

[SS-212]

SD-211の西、DT46区に位置する。18次調査下層水田SS-310と同一の水田で、東西約5m・南北7mを測ることになる。25次調査区内では、東側SD-211とは幅50～70cm、高さ1cm程度の畦畔、西側SD-213との間は幅40cm前後、高さ2cm前後の畦畔、北側SS-217との間に幅60cm前後、高さ1cm程度の畦畔が設けられている。水田面は標高25.98m前後。

水口は各辺にある。東畦畔は北端付近で幅約20cmの水口を設け、SD-211側に傾斜する。埋土は暗灰黄色の砂質土で、径1㎜の砂粒をやや含み、砂質土がラミナ状に混じる。しまりと粘性がややある（図54－15）。西畦畔は北端付近で途切れ、幅約45cmの水口とする。わずかながらもSS-213側に低い。埋土は暗灰黄色砂質土で、径1㎜前後の砂粒を少量含み、細かい砂質土がラミナ状に混じる。上層からの鉄・マンガン分の沈着が斑状にみられ、やや粘性を伴う（図54－16）。そして、北畦畔もやや西寄りに幅20cm程の水口があり、ここでは3cm以上の段差でSS-217が低くなっている。埋土は、西畦畔水口部に同じ暗灰黄色砂質土（図54－17）。

[SS-213]

SS-212の西隣、DU・DV46区に位置する。18次調査下層水田SS-312と同一の水田で、東西約8m・南北9mを測る、やや歪な平行四辺形である。東側SS-212とは幅40cm前後、高さ2cm前後の畦畔、西側SS-214との間は幅50cm前後、高さ3cm前後の畦畔、北側SS-218・219との間は幅60cm前後、高さ1cm程度の畦畔で区画されている。中央部に南北方向の撹乱が残り、これ以北では、同じ幅が東西2枚の水田面に分割されており、SS-213も2枚の水田面を一括している可能性が残る。水田面標高も、18次調査では撹乱を挟んで同じであったが、25次調査区では、撹乱東側が標高25.98m前後、西側が25.97m前後と、1cm程度の差がみられる。

北畦畔には水口がみられないが、東西には水口が設けられている。東畦畔の水口については、SS-212の項で既に述べた。西畦畔の水口は、畦畔北端部に位置し、幅約70cm。中央部がわずかに盛り上がるが、全体にSS-213側に傾斜している。埋土は上下に2分できる。①層はⅡ-2-⑤層に等しく、黄褐色砂質シルトで、径1㎜前後の白色砂礫を少量含む。下部の②層は黄褐色シルトで、部分的に撹乱再堆積したⅡ-2-⑥層とみられる（図54－18）。

[SS-214]

SS-213の西隣、DV・DW46区に位置する。18次調査下層水田SS-316に対応し、東西約4.5m・南北7mの平行四辺形となる。東側SS-213とは幅50cm前後、高さ3cm前後の畦畔、西側SS-215との間は幅55cm前後、高さ1cm前後の畦畔で画され、塹壕とみられる攪乱で幅不明ながら、北側にも高さ3cm前後の畦畔が存在したとみられる。水田面は標高27.98m前後。

東畦畔の水口については、既に述べた。西畦畔も中央部で水口が設けられているが、塹壕による攪乱で幅・堰土の詳細不明。北畦畔の水口も不明。

[SS-215]

SS-214の西側、DX・DY46区に位置する。18次調査下層水田SS-317に対応し、東西約7m・南北約9mを測ることになる。東側SS-214とは幅55cm前後、高さ1cm前後の畦畔、西側SS-216との間は幅45cm前後、高さ4cm前後の畦畔で画され、北側SS-221とは幅50cm前後、高さ3cm前後の畦畔で、それぞれ区画されている。水田面は標高27.96～97m。

東畦畔の水口は先述したが、西側と北側にそれぞれ水口が開く。西畦畔の水口は、塹壕際で幅30cm程度が確認できるだけで、堰土等詳細は確認していない。北畦畔の水口はやや西寄りにあり、幅約80cm。西側で少し北にずれ、やや段違い状である。断面はSS-221側に傾斜する。堰土はⅡ－2－⑤層に等しい、径1mm前後の小指先大の円礫を含む黄褐色砂質シルト（①層）で、下部に攪乱再堆積したⅡ－2－⑥層にあたるにぶい黄色シルトが部分的にみられる（図54－19）。

[SS-216]

調査区南西端、DY46区で出土した。25次調査下層水田SS-215の西側にあたるが、検出した畦畔の延長に塹壕等による攪乱が及んでいたため、18次調査ではSS-317に含まれていない。検出したのは、東西幅0.75m、南北9.75m程の範囲で、東側を幅45cm前後、高さ4cm前後の畦畔で、北側を幅約40cm、高さ4cm前後の畦畔で区画されている。水田面の標高は、27.96m前後。

[SS-217]

SS-212の北、DT47区に位置する。東側のSD-211との間には幅50～65cm、高さ4cm程度の畦畔、西側のSS-218とは幅50cm前後、高さ3cm程度の畦畔があり、南側もSS-212との間に、幅60cm前後、高さ4cm程度の畦畔、北側SS-223とは幅40～50cm、高さ約5cmの畦畔で区画されている。SS-217南東隅部でSD-211がクランク状に東側に流れを移動させるため、SS-217は南東隅部が凹んだ格好で、東西約5.5m、南北約4mを測る。水田面の標高は、約25.95m。なお、南畦畔から西畦畔際がL字状にわずかながら低くなっており、通水状況を反映したとみられる。

水口は各辺に認められる。南畦畔の水口については、既にSS-212で述べた。東畦畔は、南端付近に幅約50cmの水口が開き、SD-211側に傾斜して、SS-217からSD-211への排水が窺える。この水口の埋土は暗灰黄色砂質土で、径1～2mmの砂粒をやや含み、砂質土がラミナ状に少量混じる。ややシルト質が強い（図54－20）。西畦畔は中央部が約35cm開き、傾斜はわずかながらSS-218側が低い。埋土は暗灰黄色砂質土で、径1mmの砂粒を少量含み、砂質土がラミナ状に混じるが、粘性が高い（図54－21）。

北畦畔は、北東隅部が途切れ、SD-211とSS-217へと連なる。西半は畦畔を検出できず、SS-223との間が大きく開いた状況である。ともに、SS-223との関係について土層観察を行った。北東隅部は、ほとんど傾斜がなく、むしろ畦畔の高まりの滑り込みにより、途中が馬の背状に高まる。SS-217・223間の配水より、ともにSD-211との通水を意図した水口と理解できる。埋土は、オリーブ褐色砂質土で、径1～5mmの砂粒・砂礫を含み、砂質土がラミナ状に少量混じり、砂質が強い。また鉄・マンガン分の沈着が見られる（図54－22）。西側は、約2.5mに渡って畦畔がない。ただし、SS-223側への傾斜がみられ、SS-217からSS-223への配水が窺える。この部分の埋土は暗灰黄色砂質土で、径1～2mmの砂粒を少し含み、砂質土がラミナ状に少し混じり、砂質が強く、しまりがある（図54－23）。

[SS-218]

SS-218はDU47区に位置する。南側は幅60cm前後、高さ3cm程度の畦畔があり、北側はSS-224との間に、幅50cm弱、高さ4cm前後の畦畔で画され、ともに水口が開かない。東側は中央部に水口があるものの、以外は南北畦畔からL字状に連続して、幅50cm前後、高さ3cm程度の畦畔で明確に区画されている。これらに対し残る西側は、南北畦畔から離れ、しかも2単位に分かれる。ともに幅50cm弱、高さ約4cmである。結果、やや歪ながら約8m四方の平面形となる。水田面標高は約25.94m。

東西と南北の畦畔の差は、これ以南が西隣の水田面まで1面としていたのに対し、SS-218・219以北で2

面に東西に分割したために生じたと考えられる。

東畦畔水口については先述した。西畦畔は南北３箇所に水口が開く。南側は幅約25cm、中央部は75cm、北部は約50cmである。中央部水口ではSS-219側に傾斜し、SS-218からSS-219への配水が窺える。埋土は暗灰黄色砂質シルトで、径１～２mmの砂粒をやや多く含み、砂質土がラミナ状にやや多く混じる。ただし粘性も伴う（図54－24）。

[SS-219]

DU・DV47区に位置する。南側は幅60cm前後、高さ１cm程度の畦畔でSS-213と区画され、東側は先述したように、断続的ながら幅50cm弱、高さ約４cmの畦畔でSS-218と画される。西側は幅約60cm、高さ４cm前後の畦畔があり、北側も幅約50cm、高さ４～５cmの畦畔で画され、水田面は東西約3.5m、南北約４m、水田面標高25.94mを測る。

東畦畔の水口については既に述べた。南畦畔については、西端が撹乱で不明であるが、ここに水口が存在した可能性は高い。北畦畔は東端が明確に水口となるが、西端の詳細は、撹乱で不明なところが多い。ただし、対する畦畔の隅部が途切れ、SS-219・220・225・226が水口で連なっていた状況が想定できる。北畦畔東水口部は推定幅約70cm。わずかながら、SS-225側に傾斜する。埋土は、オリーブ褐色砂質シルトで、径１～２mmの砂粒を少量含み、砂質土がラミナ状に少し混じるが、シルト質がやや強い（図54－25）。

[SS-220]

SS-219の西隣、DV・DW47区に位置する。南側は南東隅の畦畔が一部残るのみで詳細不明。X=94130のライン付近に存在したと推測される。東側は幅約60cm、高さ３cm前後の畦畔でSS-219と区画される。西側は北半が撹乱で不明ながら、南半に幅50cm以上、高さ約

図54　Ⅱ－2－⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図2）（縮尺1/20）

4㎝の畦畔が存在する。そして、北側は幅50～60㎝、高さ約3㎝の畦畔がSS-226との間にある。水田面は、東西約4.5m、南北約4.5mを測り、標高25.95mである。

SS-220が東西のSS-219・221に比べて水田面が高いことから、南畦畔には SS-214からの配水用の水口が存在したはずである。また、西畦畔は北半が攪乱で不明ながら、その残存端部が水口の一端であるとみられる。北畦畔には、東端と中央部の2箇所の水口が認められる。前者は幅約50㎝。SS-225側への明瞭な傾斜が認められる。埋土はⅡ－2－⑤層に等しく、黄褐色砂質シルトで、径1㎜前後の砂粒を少量含み、斑状に黄褐色を呈する（図54－26）。後者は幅約35㎝。やはりSS-226側へ傾斜する。埋土はⅡ－2－⑤層に等しい黄褐色砂質シルトで、径1㎜の砂粒を少量含む（①層）。その下部SS-220側に、にぶい黄色シルトの②層が部分的に認められる（図54－27）。

[SS-221]

DX・DY47区を中心に広がる。南部にSD-150の撹乱が残り、東側も撹乱で畦畔の大半が不明。南側はSS-215との間に、幅50㎝前後、高さ5㎝前後の畦畔があり、東側でも南半には幅50㎝以上、高さ約5㎝の畦畔が残る。そして、西側は幅50㎝前後、高さ約4㎝の、北側は幅約55㎝、高さ2㎝前後の畦畔で画され、水田面の広がりは、東西約8m、南北約5mとなる。水田面標高は25.95m弱。

南側畦畔のやや西寄りに水口が開くが、これは既にSS-215で述べた。東側は北端が開き、SS-221からSS-226への配水が窺える。西側は水口が認められない。そして、北辺は2箇所の水口が確認できた。東側は幅約75㎝。この西側約1mの畦畔を挟んで、西側の水口となる。幅約30㎝。ともに、傾斜はほとんどない。埋土も、ともに①層と②層に分かれる。①層はオリーブ褐色砂質シルトで、径1㎜前後の砂粒を含む。②層は、SS-221側に堆積するとともに、一部SS-227側の下部にもみられる。オリーブ褐色シルトで、径1㎜前後の砂粒を含む（図54－28・29）。

[SS-222]

SS-222は調査区西端部で検出した。東側のSS-221とは幅50㎝前後、高さ約5㎝の畦畔で明確に区画されるが、その西側で水田面が確認できたのは、東西幅50㎝前後。その幅でも、南側は幅約40㎝、高さ4㎝前後の畦畔が認められたのに対し、北側は確認できなかった。しかし、水口部分に相当する可能性が高いと判断して、SS-221・227間畦畔の西側延長部分で、南北に水田面を分割することとした。水田面の標高は25.94mを測る。

[SS-223]

SS-223はSS-217～222の並びの北側列、SD-211に接する最東部の水田。DS・DT48区に位置する。南側東半は幅40～50㎝、高さ約5㎝の畦畔でSS-217と区画され、東側SD-211との間に幅50～60㎝、高さ2～3㎝の畦畔がある。また、西側は幅60㎝前後、高さ約3㎝の畦畔でSS-224と、北側は幅50㎝前後、高さ2～3㎝の畦畔でSS-229と区画されている。結果、水田面は東西5.5～6.0m、南北約5.5mを測り、標高は25.95m前後。

SS-217との水口部は、既に述べた。SD-211とは南東端部で、SS-217とも共有する幅約90㎝の水口がある。SD-211側に傾斜があり、SS-217・223からSD-211への排水が主に窺える。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径1～2㎜の砂粒を含み、砂質土がラミナ状に混じり、砂質が強い。また、鉄・マンガン分の沈着がある（図55－30）。西畦畔は南北がそれぞれ途切れ水口となる。南は幅約70㎝、北は幅約80㎝で、いずれも傾斜は、SS-224側である。北側畦畔は、盤壕による撹乱が残り全容を残さないが、中央部が途切れ、幅80㎝以上の水口となる。現状でSS-229側に傾斜し、SS-223から229への配水となる。埋土は、オリーブ褐色砂質土で、径1～3㎜の砂粒・砂礫を多く含み、砂質土がラミナ状に混じり、砂質が強い。鉄・マンガン分の沈着もみられる（図55－31）。

[SS-224]

SS-223の西隣、DU48区に位置する。南側は幅40～50㎝、高さ約5㎝の畦畔でSS-218と画され、東側は幅60㎝前後、高さ約3㎝の畦畔でSS-223と画される。また、西側SS-225との間には、幅40㎝前後、高さ約2㎝の畦畔があり、北側SS-230との間には幅50㎝前後、高さ約4㎝の畦畔がある。水田面は、東西3.5m弱、南北約5.5m、標高28.94m前後を測る。

南側SS-218との間の畦畔には水口が開かない。東側畦畔水口は先に述べた。西側は、畦畔が2単位となり、水口が3箇所に開いた格好である。南側水口は幅100㎝弱、中央部水口と北水口は幅約50㎝。いずれもSS-225側に低いが、北側ほどその差は小さい。埋土は、南と中水口部が、オリーブ褐色から暗灰黄色の砂質シルトで、径1～2㎜の砂粒を多く含み、砂質土がラミナ状に少し混じり、ややシルト質も強い。また、南側

では、鉄・マンガン分の沈着が縞状に認められる（図55－32・33）。北水口部埋土は、南および中水口よりややシルト質の増した、径１㎜前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルト（①層）が土部にあり、SS-224側下部に、黄褐色砂質シルト（②層）がある（図55－34）。北側畦畔も部分的で、東西両側に水口が開く。特に東側は幅約130cmと広く、西側は幅約60cm。いずれもSS-230側に傾斜し、SS-224から230への配水である。埋土は東西いずれも、SS-230側土部に、１㎜前後の砂粒を含んだ暗灰黄色砂質シルト（①層）があり、SS-224側下部には、１㎜前後の砂粒を少量含んだ黄褐色砂質シルト（②層）が堆積する。径１㎜前後の砂粒を少量含む（図55－35・36）。

[SS-225]

SS-224の西隣、DU・DV48区に位置する。南側は幅約50cm、高さ約５cmの畦畔でSS-219と、東側は幅40cm前後、高さ約２cmの畦畔でSS-224と、西側は幅40～50cm、高さ約２cmの畦畔でSS-226と、北側は幅40cm弱、高さ約２cmの畦畔でSS-231と、それぞれ画されている。水田面の広さは、東西3.5～4.0m、南北約5.5m、標高28.94m弱である。

南畦畔は東西両側が途切れ、東畦畔は２単位の畦畔で水口は３箇所に開く。いずれも、既にSS-219あるいはSS-224で述べた。西畦畔も、やはり南北２単位に別れ、水口は３箇所に開く。南水口は、SS-219・220・225・226が共有し、南北幅約80cm。わずかながらSS-226から225に傾斜するようである。これは、南側SS-220がその東側SS-219より水田面が高いことを引き継いでいることによる。中央部水口は幅約50cm、北水口は幅約80cm。やはりわずかながらSS-225側に低い。埋土はいずれも、SS-225側土部に、径１㎜前後の砂粒を少量含む黄褐色砂質シルト（①層）があり、下部SS-226側に、径１㎜前後の砂粒を含み、上部よりやや粘性の弱いオリーブ褐色砂質シルト（②層）がある（図55－37・38）。北畦畔は中央部で水口が開くとともに、北西隅部が途切れる。中央部水口は幅約55cm。埋土は上部が褐色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒を含む。下部は、上部より粘性のあるオリーブ褐色砂質シルト（②層）である（図55－39）。

[SS-226]

DV・DW48区に位置し、北側49区にも広がる。南側は幅50～60cm、高さ約３cmの畦畔がSS-220との間に、東側は幅40～50cm、高さ約２cmの畦畔がSS-225との間に、西側は幅50～70cm、高さ３～４cmの畦畔がSS-227との間に、北側は幅約50cm、高さ約３cmの畦畔がSS-232との間にそれぞれ存在する。これらにより、水田面は東西約5.5m、南北約5.5mで、標高28.93～94mである。

水口は各辺にあり、東畦畔と南畦畔はともに３箇所が開くが、詳細は既に述べた。西畦畔は、中央部とやや北寄りの２箇所に水口が開く。ともに幅約25cmで、南側はSS-226から227側へ、北側はSS-227から226側へ傾く。埋土はいずれも、上部に径１㎜前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルト（①層）があり、SS-227側下部に、やや粘性のあるオリーブ褐色砂質シルト（②層）が堆積する（図55－40・41）。北畦畔は、北東隅部と中央部が水口である。前者は上部埋土が径１㎜前後の白色砂粒を多く含む暗灰黄色砂質シルト（①層）で、下部は暗灰黄色砂質シルト（②層）である（図55－42）。後者は幅約80cmで、わずかながらSS-232側に傾斜する。埋土は、上部が暗灰黄色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒を含む。下部はオリーブ褐色の砂質シルト（②層）である（図55－43）。

[SS-227]

SS-227は、DX48を中心にDW48・49区、DX49区、DY48・49区に広がる。南側は幅約55cm、高さ約２cmの畦畔でSS-221と、東側は幅50～70cm、高さ３～４cmの畦畔でSS-226と、西側は幅60cm前後、高さ約４cmの畦畔でSS-228と、そして北側を幅50cm前後、高さ約２cmの畦畔でSS-233とそれぞれ区画されている。水田面の広がりは、東西約7.5m、南北約5.5mと広く、水田面標高28.92～93mである。

水口は、東畦畔と南畦畔にそれぞれ２箇所あるが、これらは既に述べた。西畦畔は閉じた状態である。そして、北畦畔は、３箇所に水口が開く。東側水口は、幅約100cm、中央部畦畔は幅約80cm、西側水口は幅約25cmで、いずれもSS-233側に傾斜し、SS-227から233への配水が窺える。埋土は、いずれも上部に径１㎜前後の砂粒を含む暗灰黄色砂質シルトがあり、西側ほど砂質が強くなる（①層）。対して下部は、東水口では、SS-227側に暗灰黄色砂質シルト（②層）が堆積し、中央部水口では、①層より粘性のあるオリーブ褐色砂質シルト（②層）が部分的にあり、西側水口部では、SS-227側に、１㎜前後の砂粒を含んだオリーブ褐色砂質シルト（②層）がみられる（図55－44～46）。

30：SD-211・SS-223 水口

31：SS-223・229 水口

32：SS-224・225 南水口

33：SS-224・225 中水口

34：SS-224・225 北水口

35：SS-224・230 東水口

36：SS-224・230 西水口

37：SS-225・226 中水口

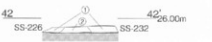
38：SS-225・226 北水口

39：SS-225・231 水口

40：SS-226・227 南水口

41：SS-226・227 北水口

42：SS-226・232 東水口



43：SS-226・232 西水口

44：SS-227・233 東水口

45：SS-227・233 中水口

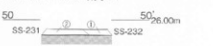
46：SS-227・233 西水口

47：SS-228・234 水口

48：SS-230・231 南水口

49：SS-230・231 北水口

50：SS-231・232 南水口



51：SS-231・232 北水口

図55　Ⅱ－2－⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図(3)　（縮尺1/20）

[SS-228]

SS-228は、調査区西端、DY48・49区に所在する。検出できたのは、東西幅１m以下ながら、南北は約5.5mと推定できる。水田面標高は、28.93m前後。東側のSS-227とは、幅60cm前後、高さ約３～４cmの畦畔で区画され、水口は開かない。南側は畦畔が認められないが、水口部にあたる可能性の高いことを既に述べた。北側は、幅50cm前後、高さ約２cmの畦畔がSS-234との間にあり、東端では水口部となる。中央部が凹み、狭い範囲で配水方向は不明。埋土は、SS-234側上部に径１mm前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルト（①層）があり、SS-228側下部に、オリーブ褐色砂質シルト（②層）がある（図55－47）。

[SS-229]

SS-229はSS-223～228の並びの北側列、調査区内では検出した最北部列の、最東部の水田。中央部に盛壌による攪乱が大きく残る。南側は幅50cm前後、高さ２～３cmの畦畔がSS-223との間にあり、東側は幅40cm前後、高さ３cm前後の畦畔がSD-211との間にある。西側に畦畔は残らないが、南側の水田並びから推して、Y=-67290付近に本来は畦畔が存在したとして、攪乱以東をSS-229、以西をSS-230とした。水田面は東西約6.5m、南北4.0m以上、標高は28.94m前後となる。ただし、調査区北壁ではDS区のⅡ-2-⑥層・SR-301-①層が薄く、SR-301-②層が露出し、北東部を中心に水田外の範囲が含まれる可能性がある。それでも、DT区以外ではⅡ-2-⑥・SR-301-①層が安定することから、水田としている。

[SS-230]

SS-230はSS-229の西隣、攪乱以西にあたり、DU49区に位置する。北側はやはり調査区外へと延びる。南側は幅50cm前後、高さ約４cmの畦畔でSS-224と画され、西側は幅40～50cm、高さ約３cmの畦畔でSS-231と区画されている。確認できた水田面は、東西幅約３m、南北４m以上で、標高は28.93～94m。

南側の水口については既に述べた。西畦畔では、確認した範囲で２箇所に水口が開く。南側は幅約30cm、北側は幅約25cm、ともに中央部が凹むが、SS-231側に傾斜する。埋土は、ともに上部に、径１mm前後の砂粒を含む黄褐色砂質シルト（①層）がある。南側では下部の広くに、上部よりやや粘性のあるオリーブ褐色砂質シルト（②層）が堆積する（図55－48）。対して、北側は、下部に上部よりやや粘性のある黄褐色砂質シルトが部分的に堆積する（図55－49）。

[SS-231]

SS-231はSS-230の西隣、DU・DV49区に位置し、北部は調査区外へと延びる。南側は幅40cm弱、高さ約３cm前後の畦畔がSS-225との間に、東側は幅40～50cm、高さ約３cmの畦畔がSS-230との間に、そして西側は幅50cm前後、高さ約３cm前後の畦畔がSS-232との間にある。これらで区画された水田面は、東西３m前後、南北3.5m以上で、標高は28.93mを測る。

南と東畦畔の水口については既に述べた。西側は南端と中央部の２箇所に水口がみられる。南端は幅約60cm、中央部は幅約35cm。いずれも、わずかながらSS-232側に傾斜する。埋土は、いずれも上部に、径１mm前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルト（①層）がある。南端のSS-231側下部には暗灰黄色砂質シルト（②層）が、中央部の下部には、上部よりやや粘性の強いオリーブ褐色砂質シルト（②層）が部分的に堆積する（図55－50・51）。

[SS-232]

SS-232はSS-231の西隣、DV・DW49区に位置し、北部は調査区外へとのび、中央部に戦前の演習用塹壕とみられる攪乱が残る。南側は幅約50cm、高さ３～４cmの畦畔によりSS-226と、東側は幅50cm前後、高さ約３cm前後の畦畔でSS-231と、そして西側は幅50cm前後、高さ３cm前後の畦畔でSS-233と区画されている。その水田面の広がりは、東西約4.5m、南北3.5m以上、標高は28.93m前後である。南と東畦畔の水口については既に述べた。西畦畔では、中央部に１箇所水口がある。幅約20cm。

[SS-233]

SS-233は、SS-232の西側、DW・DX49区に位置し、北部は調査区外へとのびる。南側は幅50cm前後、高さ２～３cmの畦畔でSS-227と、東側は幅50cm前後、高さ３cm前後の畦畔でSS-232と、そして西側は幅80cm前後、高さ約３cmの畦畔でSS-234と区画されている。その広がりは、東西約８m、南北5.5m以上で、標高28.93m前後。南と東畦畔の水口については既に述べた。西畦畔にも、南端に水口がある。幅約40cm。攪乱際で詳細は不明。

[SS-234]

調査区北西隅、DY49区の水田である。塹壕と見られる攪乱が大きく及び、検出した範囲は狭い。南側SS-228との間には幅50cm前後、高さ約３cmの畦畔があ

り、東側SS-233との間にも、幅80cm前後、高さ約3cmの畦畔を確認しているが、西と北はいずれも調査区外に及び、確認できた水田面の広がりは、東西約1.5m、南北2.5m程度に過ぎず、さらに大きく攪乱が残っている。水田面の標高は28.92～93m。

② 溝

最初に述べたように、調査区内の水田を東西に分かつように、溝1条が南北に走る。SD-211である（図版8－2）。

[SD-211]

SD-211は下層水田に伴う水路で、DS46～49区に及び、18次調査のSD-307の北延長部分にあたる。両側の水田面とは畦畔で区画され、調査区南端では二段状にやや幅を広げる一方、北部では幅を小さくし、50～100cmと変化があるものの、平均約70cm幅である。深さは両側の水田面から10cm前後で推移しているが、最深部はSS-206・217・208・223の交点付近で、北側では浅くなる。また、SD-211はまっすぐではなく、DS47区のSS-203・212・206・217の交点部分でクランク状になり、畦畔一幅分東側へ移動した格好である。これらから、SD-211は南側から導水してSS-206・217・208・223に配水するとともに、北側からの配水機能も一部有していたと考えられる。なおその際、SD-211最深部の南北に両側からの流れを制御するための堰等が想定されるが、見いだせていない。

SD-211の埋土最上部の①層は、基本的にⅡ－2－⑤層であり、オリーブ褐色砂質土。径1～3㎜の砂粒・砂礫を含み、砂質土がラミナ状に混じり、砂質が強い。また、上部からの鉄・マンガン分の沈着が認められる。その下部には、まず下流部の北部では②層の暗灰黄色砂質土がある。1～3㎜の砂粒・砂礫を多く含み、砂質土がラミナ状に多く混じり、砂質の強い土層である。そして、全域の最下部層として、暗灰黄色砂質土の③層が堆積する。2㎜前後の砂粒・砂礫をやや含み、砂質土・シルト質土がラミナ状に混じり、北部では砂質が強い（図56）。

SD-211から出土した遺物は、c1層として取り上げてしまったが、その中には水田廃絶時以前の溝埋土内包含遺物も含んでいる。ところが、出土遺物は土師器・須恵器の細片ばかりで、SD-211の機能した時期を特定できるようなものはなかった。

(2) 出土遺物

出土遺物の取り上げは、畦畔部分（c2層）と耕作土層（c3・4層）に大別される。また本来なら、後者は水田面単位あるいは畦畔単位で区別されるべきであるが、城北団地区側単位での取り上げとしており、一括して報告する（表9）。

① 畦畔部（c2層）出土の遺物

畦畔部出土遺物は多くない。その中から図化できたのは3点（図57）。1は土師器塊底部で、しっかりした断面三角形の貼付高台を有する。SS-219・225間の畦畔部出土である。2は内黒の黒色土器の塊体部下半。やや幅広のしっかりした高台を貼り付け、内外面にミガキ調整が残る。SS-220・SS-221間の畦畔部出土と、DW45区の調査区南側畔のⅡ－2－⑥層耕作土出土が接合した。3は須恵器坏身。小型で受部も小さい。SS-225・231間の畦畔部（DV49-1区）出土である。

なお、図化できなかったが、SS-217・218の間畦畔部から、瓦器口縁小片が出土している。

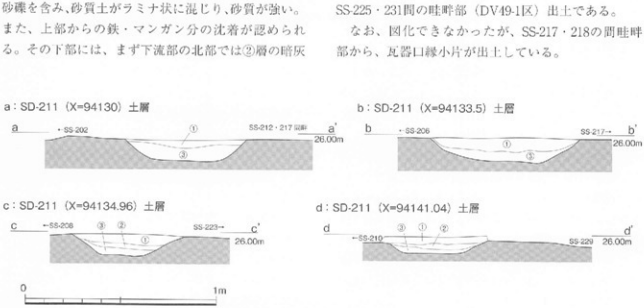


図56　Ⅱ－2－⑥層（下層水田）に伴う溝土層図　（縮尺1/20）

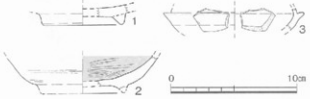


図57　Ⅱ-2-⑥層畦畔部（c2層）出土遺物（縮尺1/3）

② 耕作土（c3・4層）出土の遺物

調査時には、c3・4層として取り上げたⅡ-2-⑥層出土遺物には、中世の土師器、黒色土器、土師質土器、陶器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、緑釉陶器、弥生土器や、石器、鉄器がある。他、近現代の陶磁器・瓦が西壁畦から出土しているが、掘乱を残したまま、最終段階で掘り下げたため、紛れ込んだと判断した。同様に、北壁畦部出土の、龍泉窯系青磁片、底部に回転糸切り痕をもつ土師器小皿、瓦質土器鍋も混入と判断した。一方、調査区北東部で水田外と判断した範囲にありながら、下層水田耕作土として取り上げた遺物には、本来SR-301-②層に含まれる遺物が紛れている可能性がある。DQ47～50区・DR49区・DS49区のC3・4・（d）層として取り上げたもので、図示した遺物のうち、5・17・20・24・26・29・30・35・37・43・45・46が該当する。これらも含めて、61点を提示する（図58～61、図版16）。

1～20は土師器（図版16－1）。口縁部は1と2のみ。1は端部を外反させる塊口縁部。2は小型の坏口縁部。3～7は坏底部。3～5は平底で、3は底部から大きく開く。6・7は円盤状高台の底部で、いずれも外底面に回転ヘラ切りの痕跡を残す。6は一度まっすぐ立ち上がってから外反し、7は厚い底部から体部が立ち上がる。8～16は貼付高台を有する塊底部。高台の断面形状は、8・9がしっかりした三角形、10が台形で外端部が横ナデでやや突出気味。11は丸みをもった台形で、12はやや細長く高くなった台形。13～15は端部が丸く、細長くなった三角形。16は細長くなった高台が、外に向かって広がり、見込みも深さをやや増す。17・18は皿でいずれも赤彩。17は灰白色の胎土に橙色の塗彩を、18は、にぶい黄橙色の胎土に明赤褐色の塗彩を施す。19・20は小皿。20は浅黄橙色の胎土ににぶい橙色の塗彩を施す。

21・22は内黒の黒色土器塊。いずれも、幅広のしっかりした断面三角形の高台を貼り付ける。21の内外面にはミガキがよく残り、剥落した高台接合部に、接合用の沈線が認められる（図版16－2）。

23は、胎土はやや粗いが、内面にわずかに炭素の吸着が認められ、形態的にも瓦器と判断した。高台断面は丸みをもった低平な三角形。DX49区Ⅱ-2-⑥層出土と、Ⅱ-2-③層下部出土が接合したものである（図版16－1）。この他にも、隣のDW49区から瓦器小片が出土するとともに、DW・DX49区では下層のSR-301-①層でも瓦器片が出土し、上部からの攪乱を掘り残していた可能性がある。

24は緑釉陶器碗底部。緑釉は残っていない。胎土は黄色みがかった灰白色で焼き上がりは硬質だが、一部浅黄橙色を呈する軟質部がある。底部は削り出しによる蛇ノ目高台。外面は回転ヘラ削りの痕跡が残り、内面は丁寧にミガキ仕上げされている（図版16－3）。

25～37は須恵器。25は坏身の口縁部で、端部内面に明瞭な段をもつ。口径は小さい。26～29は坏口縁部。26・27は直線的な体部から、口縁端部が横ナデにより わずかに外反する。28は深みのある体部をもち、口縁端部の外反もやや大きい。29は口縁端部をやや内湾させて尖り気味に収める。30・31は高台付坏の底部。30の高台は断面方形で、接地面が凹み、内側に踏ん張る。31はやや焼成が良くない。32は小型で細身の高坏脚部。坏部に歪みがある。33は台付塊の脚台部。34は鉢の口縁部。やや内傾し、端部は面をなす。35は広口壺口縁部。端部付近で短く水平に屈曲し、上方へつまみ上げる。36は壺の肩部片である。外面にカキ目を施し、内面は回転ナデ調整。37は内外面回転ナデ調整の甕頸部。

38・39は須恵質陶器。38はこね鉢口縁部。端部をやや拡張させている。39は甕の胴部片。外面に格子目状タタキ調整を施し、内面にハケ目調整と不定方向のナデ調整を施す。出土が調査区西畦であり、混入の可能性も残る。

40・41は土師質土器鍋。40は口縁部で、端部は面をなす。41は胴部から頸部にかけての屈曲部。内外面ナデ仕上げ。

42は丸瓦で、内外面に炭素を吸着させている。

43は、古墳時代前期の二重口縁壺の二次口縁部。一次口縁部上の外面に竹管文を施す（図版16－4）。

44～49は弥生土器。44・45は、拡張した口縁端部に数条の凹線文を施す壺口縁部。中期後葉。46は後期の甕口縁部。赤みのある焼き上がりで、胎土に雲母細粒

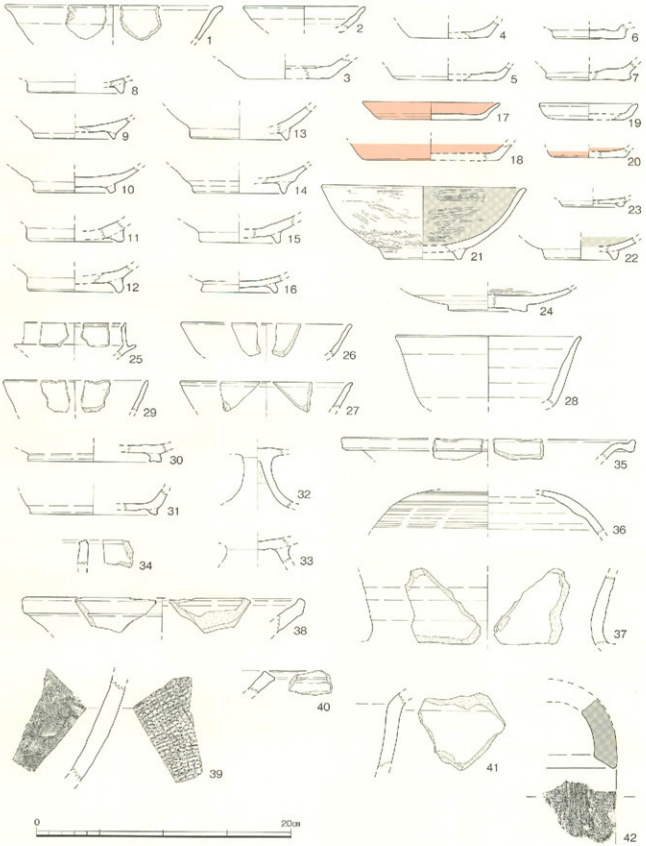


図58　Ⅱ－2－⑥層耕作土（c3・4層）出土遺物(1)（縮尺1/3）

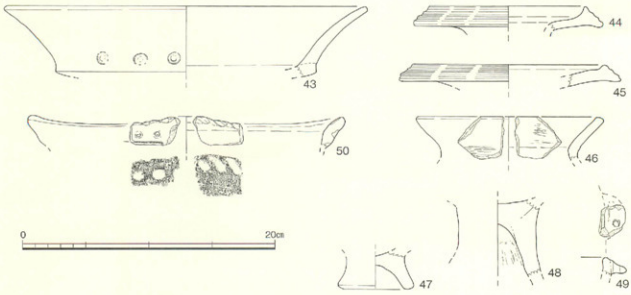


図59　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3・4層）出土遺物(2)（縮尺1/3）

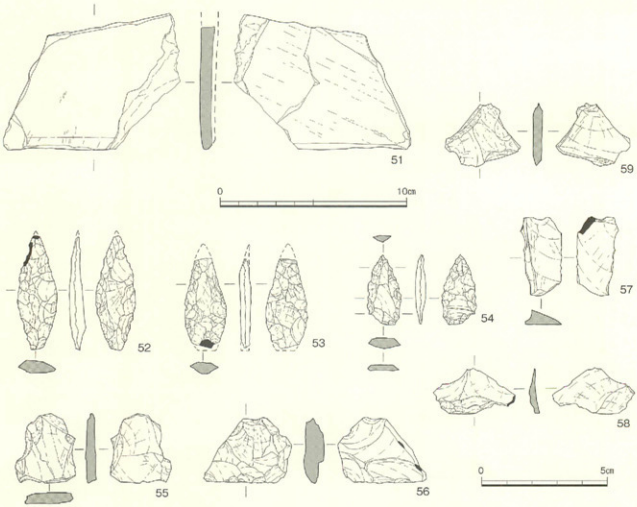


図60　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3・4層）出土遺物(3)　－石器－　（縮尺1/2・2/3）

を多く含み、搬入土器とみられる。47は甕の脚台部。48は器厚が厚く、大型の高坏脚部。円盤充填を行っている。49は鉢の口縁部か。端部外面に２つの小円孔を有する半円形の耳部を貼り付け、蓋との紐掛かりとしている。

50は縄文土器。深鉢の波状口縁部片と考えられる。外面は円形刺突文の下方に断続的な沈線、口縁端部内面には斜め方向の刻み目文を施す。いずれの文様もほぼ同じ幅で、同一工具によるとみられる。縄文後期。

51～58は石器。51は片岩製。磨滅と剥落が著しいが、刃部の形成が認められる。石庖丁、あるいは大きさから大形石庖丁の可能性がある（図版16－５）。52～54は打製石鏃（図版16－６～８）。52がサヌカイト製で凸基式。横長剥片を素材とし、背面左側は先端から基部へ規則的に剥離している。重量4.0ｇと大型である。53・54は赤色頁岩製。53は縦長剥片、54は横長剥片を素材としている。いずれも凸基式で、基部から先端へ向けた剥離により、基部を薄く作り出す。55～58はサヌカイト剥片である。55は形状から石鏃未製品の可能性もある。59は赤色頁岩の剥片。

60は鉄器。断面は扁平な方形で、環状または鉤状と

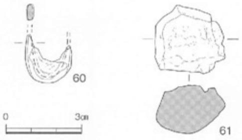


図61　Ⅱ・2-⑥層耕作土（c3・4層）出土遺物(4)
－鉄器－（縮尺2/3）

推定される。外側に一部赤色を呈する箇所がある。61は鉄滓。21.1ｇと見た目より軽い。

(3)　小結

Ⅱ-2-⑥層からは、回転糸切り痕を残す土師器坏底部や貿易陶磁は出土していないものの、12世紀後半の瓦器が少数出土しており、若干新しい須恵質陶器もある。これらを紛れ込みとみると、高台端部を丸く収めた土師器埦が最新相を示し、下層水田の耕作時期は、11世紀後半まで遡ることになる。

表９　Ⅱ-2-⑥層出土遺物観察表

図57　Ⅱ-2-⑥層畦畔部（c2層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R40074	r4238	c2層	SS219-225間畔（DY47）	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒、微細な雲母多く含む。	13
2	R40108	r4240	c2層	SS220-221間畔（DW47·9）	黒色土器(内)	埦	底部	外面横ナデ後ミガキ、内面ミガキ。外面にぶい黄橙色、内面黒色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	13
		r4300	c3・4層	DW45畔					
3	R40076	r4252	c2層	SS225-231間畔（DV49-1）	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石まばらに含む。	13

図58～61　Ⅱ-2-⑥層耕作土（c3・4層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R40096	r4287	c3・4層	DU47	土師器	埦	口縁部	口縁部内外面横ナデ、内面ミガキか。外面褐灰色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	14
2	R40109	r4301	c3・4層	DW46	土師器	坏	口縁部	全面磨滅、内外面回転ナデか。浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	14
3	R40113	r4303	c3・4層	DW48	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面灰白色、内・断面褐灰黄色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
4	R40079	r4261	c3層	DS48	土師器	坏	底部	全面磨滅。浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
5	R40135	r4330	c3・4層・(d)層	DQ49	土師器	坏	底部	内外面磨滅、外底面ヘラ切り離し痕か。浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。	14
6	R40099	r4290	c3・4層	DU49	土師器	坏	底部	全面磨滅、内外面横ナデか。外底面ヘラ切り離し痕。にぶい橙色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	14
7	R40091	r4279	c3・4層	DT47	土師器	坏	底部	外面磨滅、横ナデか。内面横ナデ、外底面ヘラ切り離し痕か。外面橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫、微細な雲母・赤色粒まばらに含む。	14
8	R40121	r4312	c3・4層	DX48	土師器	埦	底部	内外面磨滅。外面にぶい橙色、内・断面灰色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
	R40130	r4327		DY50西畔					
9	R40107	r4300	c3・4層	DW45畔	土師器	埦	底部	内外面磨滅、高台周辺横ナデか。浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
10	R40105	r4297	c3・4層	DV49	土師器	埦	底部	高台周辺横ナデ、内面磨滅。外底面は糸切り離し後ナデか。灰白色。断面黄灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	14
11	R40093	r4282	c3・4層	DT48	土師器	埦	底部	内外面磨滅、横ナデか。内外面褐灰色、橙色。微細な石英・長石、赤色粒多く含む。	14
12	R40097	r4288	c3・4層	DU48	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。内外面灰白色、断面黄灰色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
13	R40125	r4320	c3・4層	DY47	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面黄灰色。微細な石英・長石、赤色粒多く含む。	14
14	R40116	r4306	c3・4層	DW50北畔	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面灰黄褐色、内面灰黄色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	14
15	R40118	r4310	c3・4層	DX47	土師器	埦	底部	内外面磨滅、横ナデか。灰白色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。	14

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
16	R40110	r4302	c3・4層	DW47	土師器	碗	底部	全面磨滅、高台端部横ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒～細礫、赤色粒まばらに含む。	14
17	R40134	r4328	c3・4層・(d)層	DQ47	土師器(赤彩)	皿	全形	内外面磨滅。回転ナデか？内外面橙色（赤彩残存）、断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
18	R40092	r4280	c3・4層	DT47	土師器(赤彩)	皿	底部	内外面回転ナデ。内外面明赤褐色（赤彩残存）、断面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
19	R40127	r4325	c3・4層	DY49畔	土師器	小皿	全形	外面横ナデ、内面磨滅、外底面糸切り離しの可能性あり。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
20	R40144	r4333	c3・4層・(d)層	DS49	土師器(赤彩)	小皿	底部	内外面磨滅。内外面にぶい橙色（赤彩残存）、断面浅黄橙色。石英・長石の砂粒ごくわずかに含む。	14
21	R40081	r4262	c3層	DU48	黒色土器(内)	碗	全形	内外面ミガキ調整。外面左上がり、内面横方向、内底面は不定方向。外面にぶい黄橙色、内面黒色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
22	R40106	r4297	c3・4層	DV49	黒色土器(内)	碗	底部	内外面磨滅。外面黄灰色、内面暗灰色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。外面の炭素吸着薄い。	14
23	R40123 R30024	r4315 r3085	c3・4層 b1層	DX49 SS106	瓦器	碗	底部	全面磨滅。外面灰黄色、内面一部灰色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
24	R40149	r4332	c3・4層・(d)層	DS49	緑釉陶器	碗	底部	蛇ノ目高台。外面回転ヘラケズリ。内面にミガキ仕上げ。内外面やや黄色がかった灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
25	R40077	r4261	c3層	DS48	須恵器	杯身	口縁部	端部内面に段。内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石まばら含む。	14
26	R40140	r4332	c3・4層・(d)層	DS49	須恵器	杯	口縁部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
27	R40117	r4309	c3・4層	DX46	須恵器	杯	口縁部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
28	R40078	r4261	c3層	DS48	須恵器	杯	上半部	内外面回転ナデ。外面灰色、内面灰白色。微細な石英・長石多く含む。	14
29	R40133	r4328	c3・4層・(d)層	DQ47	須恵器	杯	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰色、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
30	R40142	r4333	c3・4層・(d)層	DS49	須恵器	杯	底部	内外面回転ナデ。外面灰色、内面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	14
31	R40080	r4261	c3層	DS48	須恵器	杯	底部	全面磨滅。焼成軟質で灰白色。石英・長石の砂粒をまばらに含む。	14
32	R40102	r4294	c3・4層	DV47	須恵器	高杯	脚部	内外面磨滅、回転ナデ。脚部内面上部絞り痕。内外面灰白色、断面赤灰色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
33	R40120	r4312	c3・4層	DX48	須恵器	台付碗	脚台部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
34	R40087	r4270	c3・4層	DS45畔	須恵器	鉢	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰色、断面褐灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	14
35	R40138	r4331	c3・4層・(d)層	DR49	須恵器	広口壺	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰白色、内面灰オリーブ色（自然釉）。石英・長石の砂粒まばらに含む。	14
36	R40146	r4334	c3・4層・(d)層	DT50	須恵器	壺	肩部	外面カキ目、内面回転ナデ。外面灰色（自然釉）、内面灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。	14
37	R40143	r4333	c3・4層・(d)層	DS49	須恵器	甕	頸部	内外面回転ナデ。外面、内面上半オリーブ黒色（自然釉）、内面灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	14
38	R40085	r4268	c3・4層	DR46	須恵質陶器	こね鉢	口縁部	全面磨滅。灰白色、断面一部灰黄色。石英・長石の砂粒、炭化物多く含む。	14
39	R40131	r4327	c3・4層	DY50西畔	須恵質陶器	甕	胴部	外面格子目状タタキ、内面不定方向ナデ、一部ハケ目。外面灰色、内面灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。十瓶山窯産か。	14
40	R40100	r4290	c3・4層	DU49	土師質土器	鍋	口縁部	内外面磨滅、ハケ目後横ナデか。外面煤付着。外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	14
41	R40101	r4293 r4136	c3・4層 c1層	DV46 SS214	土師質土器	鍋	胴上部	内外面不定方向ナデ。外面下部煤付着。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	14
42	R40132	r4327	c3・4層	DY50西畔	瓦	丸瓦	胴部	内外面炭素吸着、暗灰色。断面灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	14
43	R40136	r4331	c3・4層・(d)層	DR49	土師器	壺	口縁部	二重口縁壺の二次口縁部。下半に竹管文。内外面磨滅。内外面浅黄橙色、断面暗灰色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、赤色粒まばらに含む。	15
44	R40086	r4270	c3・4層	DS45畔	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部に凹線文。全面磨滅。石英・長石の砂粒～細礫多く含み、赤色頁岩粒をごくわずかに含む。	15
45	R40139	r4332	c3・4層・(d)層	DS49	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部に凹線文。内外面磨滅。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	15
46	R40148	r4334	c3・4層・(d)層	DT50	弥生土器	甕	口縁部	内外面ハケ目後ナデ。外面にぶい褐色・一部暗赤褐色、内面橙色。石英・長石の砂粒多く、微細な雲母まばらに含む。	15
47	R40129	r4327	c3・4層	DY50西畔	弥生土器	甕	脚台部	内外面磨滅。橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	15
48	R40126	r4324	c3・4層	DY49	弥生土器	高杯	脚部	全面磨滅。褐色。石英・長石の砂粒～中礫非常に多く含む。	15
49	R40119	r4310	c3・4層	DX47	弥生土器	鉢	口縁部	内外面磨滅。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒、雲母多く含む。	15
50	R40082	r4266	c3・4層	DR45	縄文土器	深鉢	口縁部	波状口縁。外面刺突文・沈線、口縁端部内面に刻目文。全面磨滅。外面橙色、内面にぶい黄橙色、断面黒色。石英・長石の砂粒～中礫、雲母非常に多く含む。	15
51	R40089	r4270	c3・4層	DS45畔	石器	石庖丁？	全形	結晶片岩。現重量75.9g。一方の面にミガキ。	15
52	R40095	r4286	c3・4層	DU46	石器	石鏃	全形	サヌカイト製。現重量4.0g。横長剥片を使用。全面磨滅。	15
53	R40122	r4314	c3・4層	DX49	石器	石鏃	全形	赤色頁岩製。先端一部欠損。現重量3.0g。	15
54	R40090	r4278	c3・4層	DT46	石器	石鏃	全形	赤色頁岩製。現重量1.5g。素材は横長剥片か。脚部は他部分より薄い。	15
55	R40111	r4302	c3・4層	DW47	石器	剥片		サヌカイト。現重量4.1g。石鏃未製品の可能性も。	15
56	R40098	r4288	c3・4層	DU48	石器	剥片		サヌカイト。現重量7.9g。	15
57	R40114	r4305	c3・4層	DW49	石器	剥片		サヌカイト。現重量3.4g。	15
58	R40124	r4315	c3・4層	DX49	石器	剥片		サヌカイト。現重量1.6g。	15
59	R40112	r4302	c3・4層	DW47	石器	剥片		赤色頁岩。現重量2.5g。	15
60	R40103	r4295	c3・4層	DV48	鉄器	不明		現重量3.2g。断面扁平な方形。	16
61	R40104	r4296	c3・4層	DV48	鉄器	鉄滓		現重量21.1g。	16

10　Ⅱ層下の遺構と出土遺物

古代から中世に遡る水田関連土層であるⅡ-2層の下は、調査区全面において、流路内堆積となった。調査段階では、d層およびe層とした堆積土層名のみで把握していたが、1条の自然流路内の堆積であり、この自然流路をSR-301として報告する。なお、工事掘削深度である現地表下300cmまで掘り下げたが、SR-301の最深部を完掘してはいない（図59・60、図版9～12）。

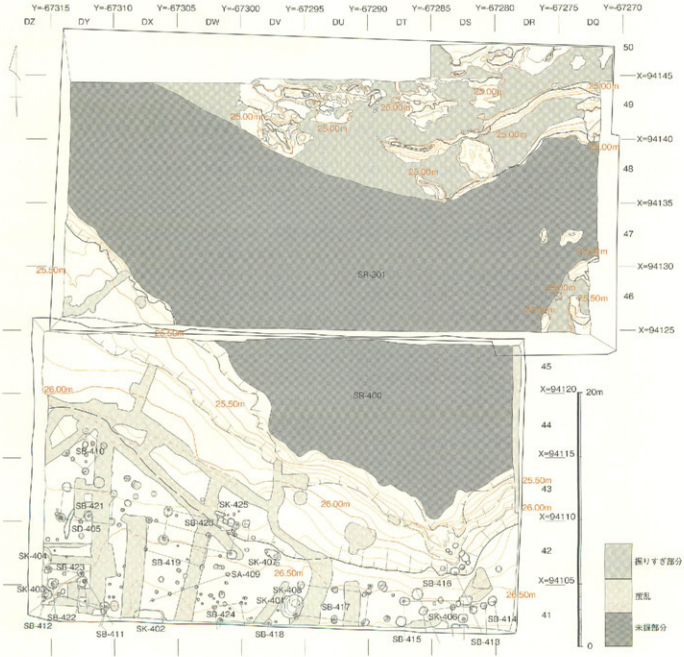


図62　文京遺跡25次調査・18次調査の自然流路と微高地上出土遺構配置図　（縮尺1/300）

(1) 遺構

出土遺構である自然流路SR-301は、掘り下げ範囲内で検出した岸斜面により、流路の方向と幅がおよそ復元可能である。南岸面は、調査区の東西でそれぞれ出土した。東側では調査区南東隅部でやや砂質の強いⅣ層が現れる。ちょうど隅部で標高約25.80mの最高所を測り、東壁でX=94135.5付近、南壁でY=－67275付近で、掘り下げ深度25.00mまで確認できた。南壁では同じ深さで一部Ⅳ層が現れており、付近では底面まであまり深さはないと予想される。西側でも、調査区南西隅部で、後述するSR-301-④層（e3層）の下で、城北団地基本層序Ⅴ層の砂礫層が出土している。上面に攪乱がなお残るが、最高所は標高25.60m弱。南壁でY=－67305、西壁でX=64135の範囲である。一方、北岸面も調査区北部の標高25.30m以下で確認できる。断続的にⅣ層が検出されているのである。Ⅳ層自体砂質がやや強く、上部流水による凹凸が激しいとともに、Ⅳ層下の堆積も流路内堆積に近似する場合があり、掘りすぎた部分も少なくない。それでも、東壁でX=94140から、X=94135・Y=－67285、そして北壁でY=－67300を結んだ範囲において、北岸を断続的に追うことができる。

SR-301は、南側の18次調査A区出土のSR-400にあたる。18次調査SR-400は、南東から北西への流路の南岸を検出したが、25次調査SR-301と併せると、北東から南西方向に流入し、DS・DT区辺りで屈曲して南東から北西に転じることがよくわかる。この屈曲部の最南部は、X=94105辺りまで及んでいるが、流路のこの部分を利用して、下層水田造営時の基幹水路にあたるSD-301が、堰を設置して水溜状の機能を発揮したとみられる。なお、18次調査A区北東部でみられたSR-400-③層の砂礫層による中洲状の高まりは、25次調査では SR-301-③層の上面にあたる。

以上から、25次調査SR-301（18次調査SR-400）は、流路の中心（最深部）を、25次調査東壁のX=94135付近から南壁のY=－67285、そこで屈曲して25次調査北西隅部に到ると復元でき、幅は40m以上に達することになる。

既に触れているが、SR-301の埋土は、①～④層に大別できる。すなわち、①層は調査段階にd層として遺物取り上げを行った土層で、下層水田の耕作土と一連のシルト。攪拌された痕跡がなく、流路がほぼ埋没した段階で窪地状の所に溜まっていた堆積で、最上部は下層水田の床土部にあたる。北東部を除いた調査区全面に広がり、10～40cmの厚さを有し、流路の中央部ほど厚い。にぶい黄色から黄褐色シルトで、砂粒・砂礫の混合は少なく、径1～20mm前後の円礫を少量含む。ただし、東部では径1mm前後の砂粒層を薄状に含み、径5～20mm前後の砂礫を多く含む、より砂質の強い層となる。18次調査SR-400-①層にあたる。

SR-301-①層の下は、漂水性のない砂・砂礫・塊石層となり、調査時点ではe層として大別した。最上部には、塊石を含まず粒度の細かい砂・砂礫層があり、調査段階ではe1層とした、SR-301-②層である。18次調査SR-400-②層にあたる。SR-301-②層は、SR-301-①層同様、流路中央部で厚くなる傾向があり、とりわけ調査区西部で厚い。逆に、SR-301の岸面が出土するような高位では、SR-301-②層を欠き、SR-301-①層の直下でSR-301-③層となる地点もある。SR-301-③層が形成した中洲状の高まり間を埋める堆積である。SR-301-③層は、調査段階でe2層とした、砂・砂礫に人頭大前後の塊石を多く含む砂礫層である。18次調査SR-400-③層にあたる。遺物を大量に含み、100cmに達する層厚の地点もあり、流路中央部では、現地表下300cmの標高25.00m以下に、なお未掘部分を残している。SR-301-④層は、調査区南西隅部で出土した、城北団地基本層序Ⅴ層からなるSR-301南岸面の上位に堆積する土層で、人頭大前後の塊石間に、再堆積した城北団地基本層序のⅢ・Ⅳ層のブロックが混在する。調査段階ではe3層としている。

(2) 出土遺物

出土遺物は、上記した土層と、DX50等の5m四方を単位とした城北団地区割に基づき、取り上げを行った。25次調査出土遺物の8割以上がSR-301出土であり、しかもSR-301-③層出土遺物が、大半を占める。以下出土層毎に報告する。

① SR-301-①層（d層）の出土遺物

SR-301-①層（取り上げ時にはd層）出土遺物には、古代以降の土師器供膳具（赤彩含む）、黒色土器、古墳時代から古代の須恵器、灰釉陶器、奈良二彩、瓦、古墳時代の土師器、弥生土器、石器を含む。黒色土器が一定量出土し、回転糸切り痕を残す底部が見られない点から、11世紀代までの堆積と考えられる。

それ以降の遺物も、d層取り上げ遺物の中には、数点が存在する。まず、DW49区とDX49区で各1点瓦

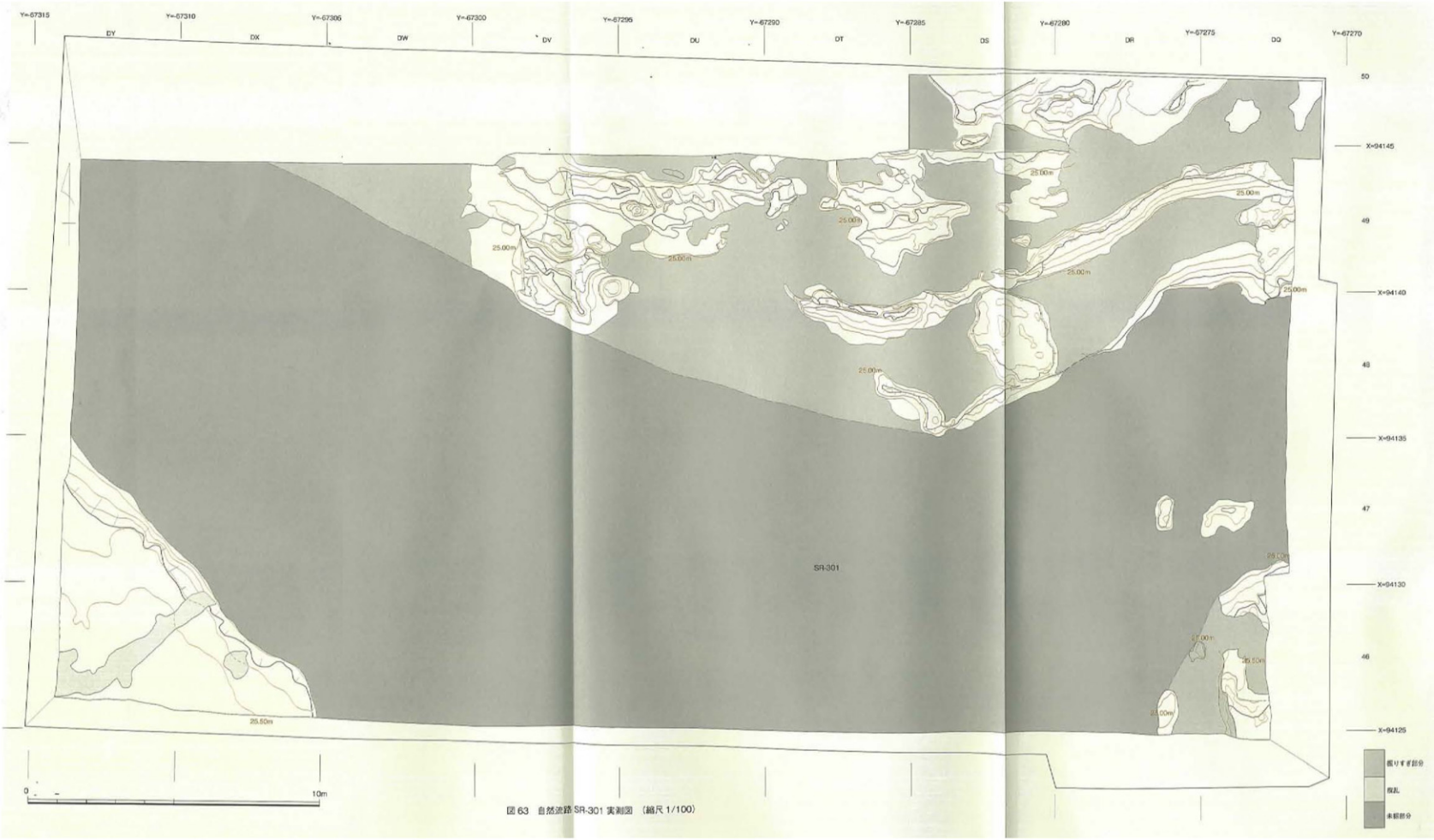


図 63　自然流路 SR-301 実測図（縮尺 1/100）

器の小片が出土しているが、ともに攪乱が下層水田面以下に及び、北側に土層観察用畦を控えることから、混入と判断した。また、須恵質陶器のすり鉢1点がDX50区畦から、近現代陶磁器の小片2点がDY47区畦とDY49区畦から各1点出土している。いずれも調査区端の畦部分から出土で、上層部分の撹り残しからの出土の可能性が高いと判断し、報告からは除いた。

結果、SR-301-①層出土遺物として、150点を提示する（図64～72、図版17、表10）。ただしその中には、本来SR301-②層に含まれていた可能性のある、DQ49・50区、DR49・50区のd層出土として取り上げた遺物（58・64・71・114・119・136）を含む。

[古代の土師器・黒色土器]

1～40は古代の土師器供膳具（図版17－1）。口縁部は少ない。1は坏口縁部。回転ナデ調整により、外面にいくつかの浅い段が残る。灰白色の胎土に橙色の塗彩を内外面に施す。2は全形復元可能な坏。底面は回転ヘラ切りか。3はかすかに端部が外反し、端部内

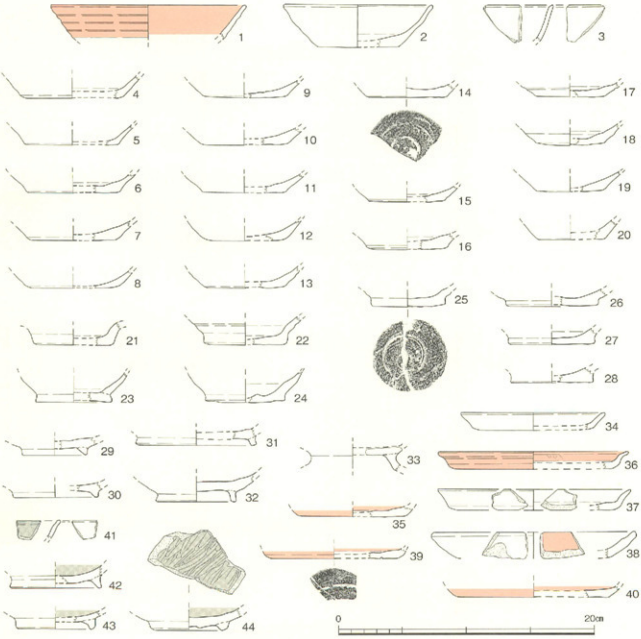


図64　SR-301-①層出土遺物(1)　－古代土師器－　（縮尺1/3）

面に段をもつ。埦口縁部とみられる。

4～28は坏底部。1～20は、基本的に平らな底部から内湾してそのまま体部に立ち上がる。また底部は回転ヘラ切り。8は外面側に浅黄橙色の胎土を用い、内面側に橙色の胎土を使い分けている。21～28の底部は円盤高台状。21・22は見込みが深い。また、25の底面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残る。

29～32は貼付高台をもつ埦底部。高台は、29が断面三角形、30は端部がやや丸い三角形、31・32は台形で外端部が横ナデによりやや突出する。33は平らな底部に、外に大きく開く高台がつき、足高高台の埦底部とみられる。

34～40は皿。34・35は底径9㎝前後で、他は12㎝前後。34は口縁端部がわずかに外反する。35は浅黄橙色の胎土に橙色の塗彩を施す。36は口縁部を一度外方に屈曲させた後、端部をわずかにつまみ上げる。内面下半はミガキ仕上げ。浅黄橙色の胎土に内外面橙色の塗彩を施す。37は底部から直線的に外反し、口縁部は尖り気味に収める。38は、にぶい橙色の胎土に橙色の塗彩を施す。39は浅黄橙色の胎土に橙色の塗彩を施し、

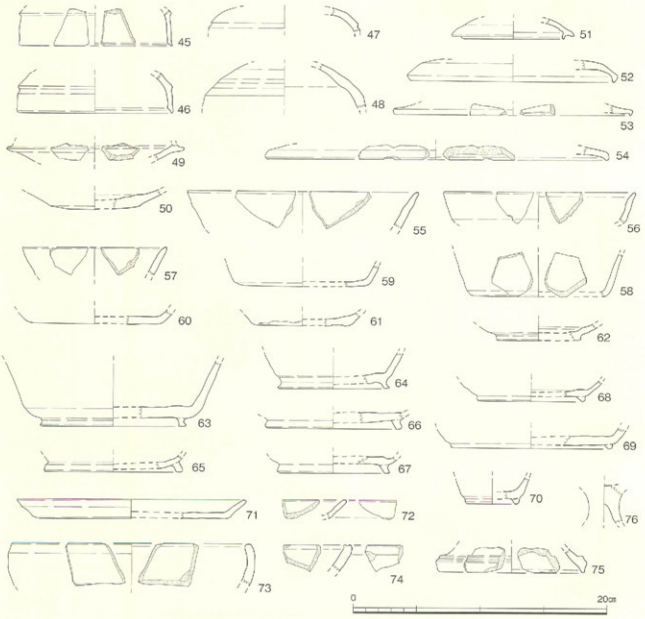


図65　SR-301-①層出土遺物(2)　－須恵器①－　(縮尺1/3)

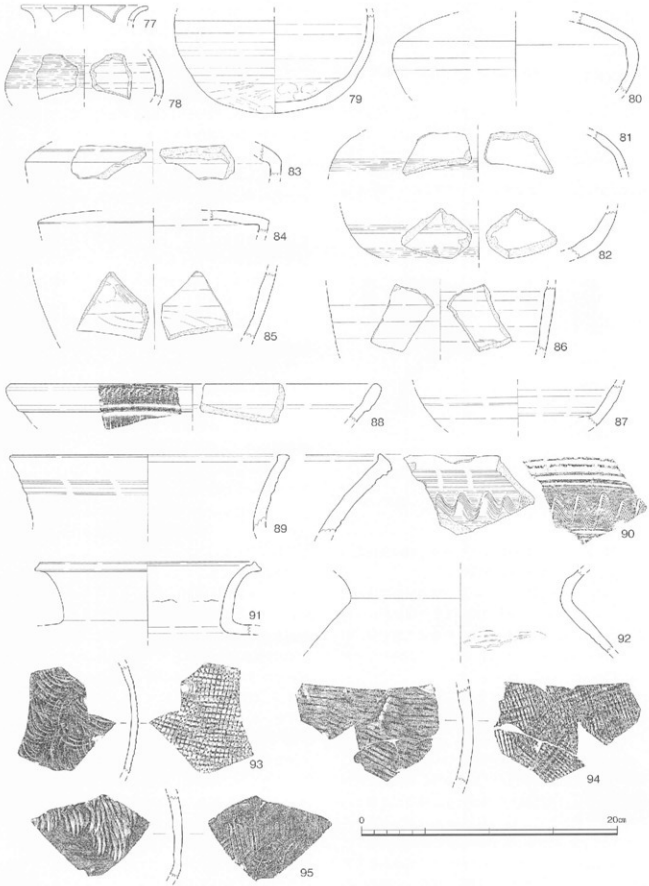


図66　SR-301-①層出土遺物(3)　－須恵器②－　(縮尺1/3)

図67　SR-301-①層出土遺物(4)－灰釉陶器－（縮尺1/3）

図68　SR-301-①層出土遺物(5)　－奈良二彩－（縮尺1/3）

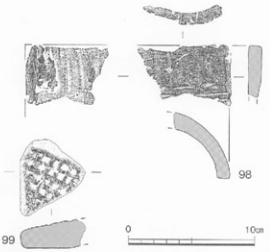


図69　SR-301-①層出土遺物(6)　－瓦－　（縮尺1/3）

底部に回転ヘラ切りの痕跡がよく残る。40は灰白色の胎土に、にぶい橙色の塗彩を施す。

41～44は内黒の黒色土器。41は口縁内端部に浅い凹線をもつ小片。42～44は貼付高台をもつ碗底部。高台断面形状は、42・43が細長く丸みのある三角形で、44は丸みのある台形。44の内面には、一定方向のミガキが密に施されている（図版17－1）。

[須恵器]

45～95は須恵器（図版17－2）。古墳時代から古代に及ぶが、一括して解説する。

45～48は古墳時代後期の坏蓋。45・46は天井部と口縁部の境及び口縁端部内面に段をもつ。45は口縁部が直立し、46は口縁部がやや内傾する。47は天井部と口縁部の境に凹線がめぐる。48は天井部に丸みがあり、天井部と口縁部の境はあまり明瞭でない段がつく。49・50は古墳時代後期の坏身。49の受け部はあまり突出しない。50は底部が厚く、回転ヘラ切り未調整の底部とみられる。

51～54は蓋。54は内面に口縁端部より突出するかえりをもち、他はいずれもかえりをもたず、端部を下方に屈曲させる。52は比較的深みがある体部で、54は径が大きく、口縁部と天井部の境が鋭くない。

55～70は坏。55～57は口縁部で、55・57は直線的な口縁部で、56は回転ナデによりわずかに外反する。58～60は貼付高台のない坏下半部で、底部から体部に急角度で立ち上がり、直線的にのびる。61は底部から体部が緩やかに外傾してのび、62は円盤高台状に一度立ち上がってから外方へ開く。63～70は貼付高台をもつ底部。63の高台は外にしっかり踏ん張った台形状の断面で、64は横ナデにより細く高い。65～67は丸みをもった台形状で、68・69は丸みのある三角形状。70はかなり小型。断面隅丸方形状の貼付高台である。

71・72は皿。71は口縁端部が上方で面をなし、ナデによりわずかに凹む。

73・74は鉢の口縁部。73は口縁部が内湾する鉄鉢形。74は口縁上端部が面をなし、端部に凹みをもつ。

75・76は高坏。75は脚裾部で、端部は肥厚し、段を有する。外面カキ目調整。古墳時代後期。76は低脚の脚柱部。

77～87は壺類。77は壺の口縁部。直線的にのびる頸部から緩やかに外反し、口縁部は水平気味にのびる。78は孔は残存しないが、大きさと調整から短の体部と判断した。やや下膨れの体部で、外面カキ目調整、内面回転ナデ調整。79は壺の底部で、底部は内面から押し出され、丸底を呈する。80は壺胴部で、肩部で強く屈曲し、体部は玉葱形を呈するとみられる。81・82は球形をなす体部で、前者が上胴部、後者が下胴部。両者とも部分的にカキ目を施す。83～87は古代の長頸壺。83・84は屈曲部で、84は肩部に1条の凹線をめぐらし、肩部がほぼ水平方向にのびる。85・86は直線的な体部下半で、87は底部付近。いずれも内外面に回転ナデを施すが、85の外面には左上がりのハケ目が残る。

88～95は甕。88～91は口縁部。88は口縁端部付近の外面を幅広に肥厚させるもので、肥厚部分に列点文、それより下方に列線文を施す。89はあまり開かず、直線的にのびる口縁部で、口縁端部は面を上に向ける。外面に2条の沈線を施す。90は口縁端部を内面側につまみ出す。外面はカキ目調整の後、口縁端部直下に突帯及び凹線、破片下端近くに凹線、その間に9本1単位のクシ描き波状文を施す。91は無文で、口縁端部を

外方へつまみ出し、内面に段を有する。92は肩部で、焼成不良のため赤焼け。内面に青海波文のあて具痕を残す。93～95は胴部片。いずれもタタキ目が外面に、あて具痕が内面に残る。タタキ目は、93は擬格子目状、94は格子目状、95は平行。内面のあて具痕は94のみ平行線状で、他は青海波文。

[灰釉陶器]

96は灰釉陶器の皿。口縁部は小さく外反し、端部を丸く収める。灰白色の胎土で焼成硬質。内外面に薄い緑色の釉がわずかに認められる（図版17－3）。9世紀後半。

[奈良二彩]

97は壺類の高台部。磨滅のため剥落が目立つが、外面、及び高台内面に緑色と白色の２種の釉が残り、奈良二彩とみられる。胎土は淡黄色で、石英・長石・チャートの砂粒をわずかに含む。焼成は軟質。8世紀後半（巻頭図版４－１）。

[瓦]

98･99は瓦。98は丸瓦で、凸面を横方向に板ナデし、凹面には細かな布目を残す。側端面は凸面側をわずかに面取りする。焼成は須恵質で灰白色。99は平瓦で、凸面にやや深めの格子状タタキを残す。焼成は軟質で浅黄橙色を呈する。

[古墳時代の土師器]

100～108は古墳時代の土師器。100は高坏脚部。脚柱が脚から屈曲して大きく広がるとみられる。内面にはシボリ痕が残る。101は壺肩部。頸部は直線的で、肩部はあまり張らないなで肩。102～104は甕の口縁部。105は甑または甕の把手部と考えられる。106は甑の底部片か。現存で３つの小円孔を三角形状に配置している。器台の可能性も考えられたが、円孔の位置が不規則で、破片の上下左右に湾曲が見られることから、甑底部と判断した。107は外面縦ハケ目、内面は横ハケ目で、ハケ目は粗い。108は外面粗い縦ハケ目、内面ナデ。自重により端部はややつぶれ、内面調整がやや粗いことから底部とした。対して107は端部が丁寧に仕上げられ、やや凹む。口縁部側とみられる。このような特徴から、移動式竈の可能性が高い。ただし、被熱はあまりみられない（図版17－4）。

[弥生土器]

109～142は弥生土器。

109～122は壺で、109～112は口縁部。109は口唇部内側に連続した刻み目を施す。110はやや開きの狭い口縁部で、端部を丸く収める。111はやや拡張した口縁端部の端面が横ナデによりやや凹む。伊予中部Ⅴ－１様式か。112はやや拡張した端部に１条の凹線文を施す。113～117は頸部。113は内面に突帯をもち、114は頸部にヘラ描きの多条沈線を施す。ともに伊予中部Ⅰ－４様式。115は頸胴部境に断面三角形状の突帯を、116は幅広の刻目突帯を貼り付ける。117は口頸部と肩部の境に上下２段に粘土帯を貼り付ける。まず上方に粘土帯を貼り付けた後、連続して刻み目を施す。その

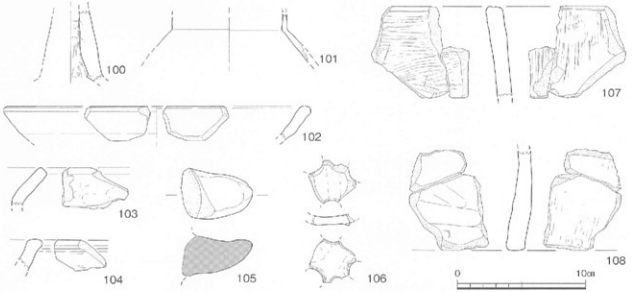


図70　SR-301-①層出土遺物(7)　－古墳時代土師器－　（縮尺1/3）

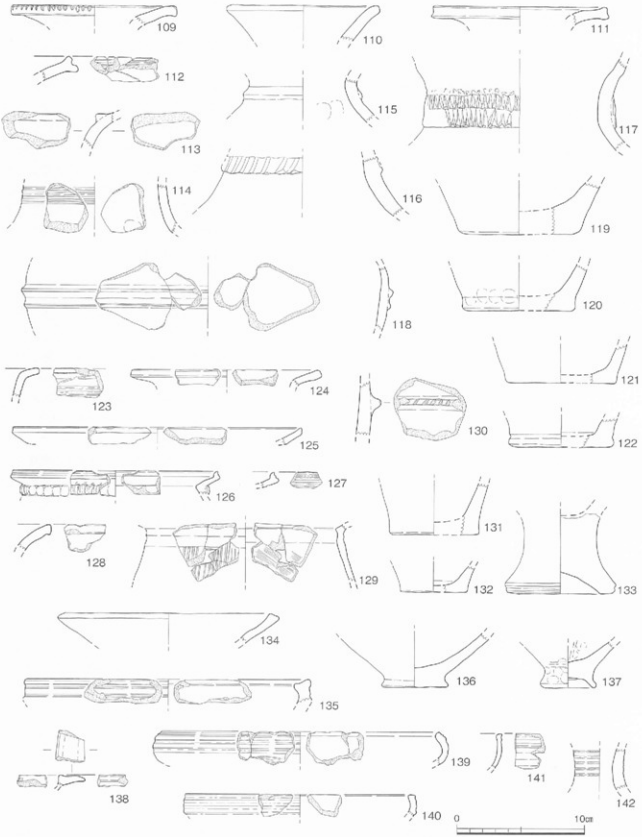


図71　SR-301-①層出土遺物(8)　－弥生土器－　(縮尺1/3)

後、上方の粘土帯に接するように下方の粘土帯を貼り付けて連続した刻み目を施し、下方の粘土帯の上部を軽く横ナデする。伊予中部Ⅳ様式。118は胴部最大径に断面三角形状の突帯を２条貼り付けM字状。119～122は底部。119はやや大型で厚い。他はやや立ち上がりが急ながら、底部径から壺の底部と考えた。

123～133は甕。123～128は口縁部。123は折り曲げ口縁で、胴部外面に多条沈線を施す。伊予中部Ⅰ-4様式。124は口縁端部が面をなす口縁部。伊予中部Ⅲ様式。125はやや内湾する口縁部。伊予中部Ⅳ様式か。126・127は口縁端部をつまみ上げ、拡張した端部に１～２条の凹線文を施す口縁部。126は頸部に押圧突帯を貼り付ける。伊予中部Ⅳ様式。128は外反する口縁部で、端面は横ナデにより面をなし、やや下方に巻き込み気味。伊予中部Ⅴ様式。129は肩部である。口縁部は「く」の字状と推定され、境には突帯を貼り付けない。伊予中部Ⅳ～Ⅴ-１様式。130は口縁部直下と考えられる胴部片で、１条の刻目突帯を巡らす。伊予中部Ⅰ-4～Ⅱ様式。131～133は底部。131・132いずれも平底。133は中実の脚台部で上げ底。端部に凹線状の凹みが１条巡る。胎土も雲母を多く含み、南九州地域山ノ口式土器の搬入品である（図版17－５）。中期後半。

134・135は鉢口縁部。135は口縁上端部が面をなし、外面が凹線状に凹む。台付きの可能性が高い。136・137は底部。ともに体部は大きく開き、前者は円盤高台状、後者は上げ底状を呈する。

138～142は高坏。138は端部を外方水平に拡張し、内端部はわずかに上方に突出する。伊予中部Ⅲ様式。

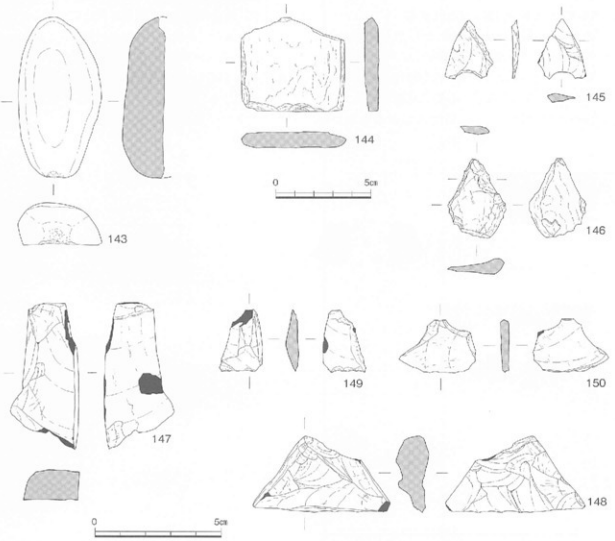


図72　SR-301-①層出土遺物(9)　－石器－　（縮尺1/2・2/3）

139～141は内湾から直立する端部に数条の凹線文を施す口縁部。141は器壁が薄く、凹線も浅い。142は脚柱部で、外面に数条の沈線文を施す。いずれも伊予中部Ⅳ様式。

[石器]

143～150は石器。143は敲石で、砂岩の円礫が素材である。縦方向に半切されているが、端部に敲き痕が残る。144は結晶片岩の未製品。扁平な方形に整形され、扁平片刃石斧未製品の可能性がある（図版17－6）。145・146は石鏃未製品。145はサヌカイト製で、基部にわずかな調整剥離が認められるが、刃部加工はまだ施されていない。146は赤色頁岩製で、縦長剥片を素材とし、刃部を含めて3方を調整剥離するが、基部加工はされてなく、厚みがある。磨滅が著しい（図版17－7）。147・148はサヌカイトの石核（図版17－8・9）、149・150はサヌカイトの剥片である。

② SR-301-②層（e1層）の出土遺物

SR-301-②層（取り上げ時にはe1層）出土遺物には、古代以降の土師器供膳具（赤彩含む）、黒色土器、古墳時代から古代の須恵器、瓦、古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器、土製品、石器、鉄器がある。

SR-301-①層に比べて、古墳時代以前の遺物が増え、最新相の遺物としては、黒色土器が数点存在する程度となる。その黒色土器も、下層のSR-301-③層ではみられなくなり、SR-301-②層出土の黒色土器も、SR-301-①層の黒色土器に比べて、やや古相を示す。

この他、SR-301-②層出土遺物とした中に、時期の下がる遺物が若干ある。まず、DQ49区の調査区東壁から近現代陶器片が、DU50区の調査区北壁からは、龍泉窯系の可能性のある青磁片といぶし瓦が出土している。これらは、上部層の掘り残し出土の可能性が高い。一方で、調査区周囲の土層観察用畦以外からも、時期の下がる遺物が出土している。DR49区からの、口縁から下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける土師質土器羽釜口縁部であり、DU49区の亀山焼体部片である。いずれも、圧倒的多数の黒色土器以前の出土遺物に対し、かなり時間差がある。これまで指摘してきた調査区周辺の土層観察用畦の掘り残しとは異なるが、練兵場時代の整地等の攪乱が一部なりとも及んでいる地点であり、これらも紛れ込みと判断した。

以上のようなSR-301-②層出土遺物から、140点を報告する（図73～82、図版18、表11）。

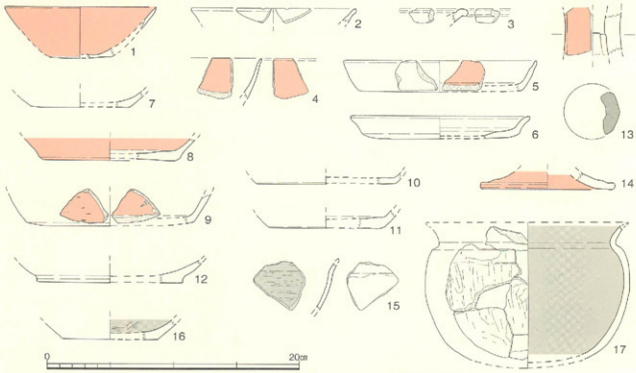


図73 SR-301-②層出土遺物(1) －古代土師器－ （縮尺1/3）

表10　SR-301-①層出土遺物観察表

図64～72　SR-301-①層出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R50146 R50152	r5067 r5069	d層	DW46 DW47	土師器(赤彩)	坏	口縁部	内外面回転ナデ。内外面橙色(赤彩)、断面灰白色。微細な石英・長石、赤色粒ごくわずかに含む。	17
2	R50010	r5003	d層	DQ46東畔	土師器	坏	全形	内外面磨滅、横ナデか。外底面ヘラ切り離しか。橙色。微細な石英・長石をずかに含む。	17
3	R50023	r5013	d層	DR46	土師器	坏 or 埦	口縁部	内外面磨滅。明赤褐色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
4	R50114	r5051	d層	DU49	土師器	坏	底部	内外面磨滅、回転ナデか。浅黄橙色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	17
5	R50042	r5020	d層	DS46	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面浅黄橙色、内面灰白色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
6	R50065	r5032	d層	DT45畔	土師器	坏	底部	内外面回転ナデ、外底面ヘラ切り離し痕か。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒ごくわずかに含む。	17
7	R50107	r5048	d層	DU48	土師器	坏	底部	内外面磨滅、外面横ナデか。外面灰白色、内・断面橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
8	R50121	r5055	d層	DV46	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面橙色(赤彩)、内面橙色、断面浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
9	R50177	r5091	d層	DX50北畔	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面にぶい橙色、内面浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。	17
10	R50029	r5015	d層	DR47	土師器	坏	底部	内外面磨滅。外面浅黄橙色、内面橙色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	17
11	R50073	r5034	d層	DT46	土師器	坏	底部	外面回転ナデ、内面磨滅・回転ナデか。外底面回転ヘラ切り離し痕。外面橙色、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
12	R50139	r5061	d層	DV49	土師器	坏	底部	全面磨滅。橙色。微細な石英・長石、赤色粒ごくわずかに含む。	17
13	R50072	r5034	d層	DT46	土師器	坏	底部	内外面磨滅、回転ナデか。外底面回転ヘラ切り離し痕。外面灰白色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒ごくわずかに含む。	17
14	R50021	r5011	d層	DR46	土師器	坏	底部	内外面磨滅、回転ナデか。外底面回転ヘラ切り離し痕。外面にぶい黄橙色、内面灰白色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
15	R50179	r5092	d層	DY45畔	土師器	坏	底部	外面横ナデ、内面磨滅、外底面ヘラ切り離し痕か。外面灰黄褐色、内面浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
16	R50178	r5091	d層	DX50北畔	土師器	坏	底部	全面磨滅。外底面回転ヘラ切り離し痕。にぶい黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒まばらに、微細な雲母を多く含む。	17
17	R50140	r5061	d層	DV49	土師器	坏	底部	内外面磨滅、横ナデか。外底面板目状圧痕か。灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	17
18	R50052	r5023	d層	DS47	土師器	坏	底部	全面磨滅、内外面回転ナデ。浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
19	R50134	r5060	d層	DV48	土師器	坏	底部	内外面磨滅、外面横ナデか。外底面ヘラ切り離しか。灰白色。胎土精良。	17
20	R50013	r5004	d層	DQ47	土師器	坏	底部	外面回転ナデ、内面磨滅、外底面ヘラ切り離しか。外面橙色、内面浅黄橙色。石英・長石の砂粒と赤色粒わずかに含む。	17
21	R50063	r5031	d層	DT45畔	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面にぶい黄橙色、内面橙色。微細な石英・長石ごくわずか、微細な雲母を多く含む。	17
22	R50145 R50147	r5065 r5067	d層 d層	DW45畔 DW46	土師器	坏	底部	内外面回転ナデ。外底面回転ヘラ切り離し痕。内外面橙色、断面浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	17
23	R50161	r5075	d層	DW49	土師器	坏	底部	全面磨滅。淡黄色。石英・長石の砂粒と赤色粒まばらに含む。	17
24	R50118	r5054	d層	DV46	土師器	坏	底部	全面磨滅。内外面回転ナデ、外底面ヘラ切り離し痕。灰白色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	17
25	R50184	r5097	d層	DY47	土師器	坏	底部	内外面回転ナデ、外底面回転ヘラ切り離し痕。浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	17
26	R50025	r5014	d層	DR47	土師器	坏	底部	外面横ナデ、内面横ナデか。内外面橙色(塗彩残存)、断面にぶい橙色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	17
27	R50168	r5085	d層	DX48	土師器	坏	底部	全面磨滅。焼成やや軟質。灰白色。石英・長石の砂粒～細礫わずかに含む。	17
28	R50047	r5021	d層	DS46	土師器	坏	底部	外面回転ナデ、内面ナデか、外底面ヘラ切り離しか。外面浅黄橙色、内面灰白色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
29	R50187	r5106	d層	DY49畔	土師器	埦	底部	外面回転ナデ、内面ナデか。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
30	R50078	r5038	d層	DT48	土師器	埦	底部	全面磨滅。浅黄橙色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	17
31	R50022	r5012	d層	DR46	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。にぶい黄橙色。胎土精良。	17
32	R50173	r5087	d層	DX49	土師器	埦	底部	外面回転ナデ、内面磨滅。外面～内面上半灰黄褐色(煤付着)、内面下半灰白色、断面灰色、高台部橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
33	R50131	r5058	d層	DV47	土師器	埦	底部	足高高台か。全面磨滅。浅黄橙色。石英・長石の砂粒をわずかに含み、赤色粒多く含む。	17
34	R50014	r5004	d層	DQ47	土師器	皿	全形	全面磨滅。内外面にぶい橙色(赤彩)、断面灰白色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	17
35	R50122	r5055	d層	DV46	土師器(赤彩)	皿	底部	内外面回転ナデ。内外面橙色(赤彩)、断面浅黄橙色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	17
36	R50075	r5036	d層	DT47	土師器(赤彩)	皿	全形	内外面回転ナデ、内面下半ミガキか。内外面橙色(塗彩)、断面浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
37	R50048	r5021	d層	DS46	土師器	皿	全形	内外面横ナデ。黄灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	17
38	R50046	r5021	d層	DS46	土師器(赤彩)	皿	口縁部	外面磨滅、内面回転ナデ。外面・断面にぶい橙色、内面橙色(赤彩残存)。微細な石英・長石わずかに含む。	17
39	R50068	r5033	d層	DT46	土師器(赤彩)	皿	底部	内外面回転ナデ、外底面回転ヘラ切り離し痕。内外面橙色(赤彩)、断面浅黄橙色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
40	R50095	r5046	d層	DU47	土師器(赤彩)	皿	底部	全面磨滅。内外面にぶい橙色(赤彩残存)、断面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	17
41	R50132	r5059	d層	DV48	黒色土器(内)	埦	口縁部	内外面磨滅、口縁端部横ナデ。外面灰白色、内面黒色。微細な石英・長石、赤色粒わずかに含む。	17
42	R50159	r5071	d層	DW48	黒色土器(内)	埦	底部	全面磨滅。外面横ナデ、内面ミガキか。外面浅黄橙色、内面黒色。石英・長石の砂粒～細礫、赤色粒まばらに含む。	17
43	R50167	r5083	d層	DX47	黒色土器(内)	埦	底部	全面磨滅、外面横ナデか。外面淡橙色、内面灰色。石英・長石の砂粒多く含む。	17
44	R50186	r5103	d層	DY49	黒色土器(内)	埦	底部	外面横ナデ、内面ミガキ。外面灰白色、内面黒色。石英・長石の砂粒まばらに含む	17
45	R50102	r5048	d層	DU48	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。	18
46	R50128	r5058	d層	DV47	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰白色、内面灰色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
47	R50103	r5048	d層	DU48	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
48	R50030	r5016	d層	DR48	須恵器	坏蓋	天井部	内外面回転ナデ後、天井部外面回転ヘラケズリ。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
49	R50020	r5010	d層	DR45	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。外面灰色(自然釉)、内面灰色、断面灰褐色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
50	R50115	r5052	d層	DU50畔	須恵器	坏身	底部	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
51	R50136	r5061	d層	DV49	須恵器	壺	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石、炭化物まばらに含む。	18
52	R50077	r5038	d層	DT48	須恵器	壺	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石ごくわずかに含む。	18
53	R50055	r5024	d層	DS47	須恵器	壺	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
54	R50082	r5039	d層	DT48	須恵器	壺	口縁部	全面磨滅、内外面回転ナデか。灰白色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
55	R50113	r5051	d層	DU49	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
56	R50054	r5024	d層	DS47	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
57	R50160	r5072	d層	DW48	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
58	R50034	r5017	d層	DR49	須恵器	坏	体部	内外面回転ナデ。外面灰色（自然釉）、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
59	R50104	r5048	d層	DU48	須恵器	坏	底部	全面磨滅。焼成やや軟質。灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物わずかに含む。	18
60	R50090	r5045	d層	DU46	須恵器	坏	底部	外面回転ナデか、内面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	18
61	R50112	r5051	d層	DU49	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ、外底面ヘラ切り離し痕。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
62	R50105	r5018	d層	DU48	須恵器	坏	底部	円盤状高台状。内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。	18
63	R50129	r5058	d層	DV47	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒ごくわずかに含む。	18
		r5046	d層	DU47					
		r5047	d層	DU47					
		r5052	d層	DU50畔					
		r5060	d層	DV48					
64	R50036	r5018	d層	DR50	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。外面オリーブ黒色（自然釉）、内面灰色、断面灰褐色・灰白色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	18
65	R50056	r5024	d層	DS47	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。灰色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
66	R50097	r5047	d層	DU47	須恵器	坏	底部	赤焼け須恵器。内外面回転ナデ。外面にぶい橙色、内面灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。大きめの赤色粒含む。	18
67	R50091	r5045	d層	DU46	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、断面灰黄褐色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。	18
68	R50185	r5103	d層	DY49	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	18
69	R50098	r5047	d層	DU47	須恵器	坏	底部	全面磨滅、内外面回転ナデか。灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物多く含む。	18
70	R50027	r5015	d層	DR47	須恵器	坏？	底部	小型品。内外面回転ナデ。外面灰色（自然釉）、内面灰色、断面褐灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
71	R50035	r5018	d層	DR50	須恵器	皿	全形	内外面回転ナデ、外底面ヘラ切り離し後ナデか。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
72	R50057	r5025	d層	DS47	須恵器	皿	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
73	R50151	r5069	d層	DW47	須恵器	鉢	口縁部	内外面磨滅、回転ナデか？灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	18
74	R50137	r5061	d層	DV49	須恵器	鉢	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。内面自然釉。微細な石英・長石わずかに含む。	18
75	R50012	r5004	d層	DQ47	須恵器	高坏	脚裾部	内外面回転ナデ、外面カキ目。灰白色。石英・長石の砂粒をまばらに含む。	18
76	R50166	r5083	d層	DX47	須恵器	高坏	脚柱部	全面磨滅。焼成やや軟質。淡黄色。微細な石英・長石、炭化物まばらに含む。	18
77	R50188	r5107	d層	DY50畔	須恵器	壺	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
78	R50076	r5037	d層	DT48	須恵器	瓶	体部	内外面回転ナデ後、外面上半にカキ目調整。外面黒色（自然釉）、内面灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
79	R50008	r5003	d層	DQ46東畔	須恵器	壺	底部	胴部内外面回転ナデ、底部外面不定方向ケズリ・内面指頭痕。外面暗灰色（自然釉）、内面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	18
80	R50039	r5019	d層	DS45畔	須恵器	壺	肩部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。外面体部上半自然釉。断面灰褐色。微細な石英・長石わずかに含む。	18
81	R50031	r5016	d層	DR48	須恵器	壺	体部	赤焼け須恵器。内外面回転ナデ、外面一部カキ目。外面灰白色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒～細礫わずかに含む。	18
82	R50067	r5033	d層	DT46	須恵器	壺	体部	内外面回転ナデ後、外面部分的にカキ目。灰白色。石英・長石の砂粒、炭化物まばらに含む。	18
83	R50028	r5015	d層	DR47	須恵器	長頸壺	肩部	肩部外面凹線1条。外面磨滅、内面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	18
84	R50081	r5039	d層	DT48	須恵器	長頸壺	肩部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	18
85	R50040	r5019	d層	DS45畔	須恵器	長頸壺	体部	外面ハケ目後横ナデか、内面横ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
86	R50138	r5061	d層	DV49	須恵器	長頸壺	体部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石、炭化物ごくわずかに含む。	18
87	R50050	r5022	d層	DS46	須恵器	長頸壺	体部	内外面回転ナデ。外面回転ナデ、内面灰白色、断面灰赤色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
88	R50058	r5025	d層	DS47	須恵器	甕	口縁部	口縁部外面列点文・円弧文・粗い直線文。内外面回転ナデ。内外面暗灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒～細礫、炭化物わずかに含む。	18
89	R50074	r5036	d層	DT47	須恵器	甕	口縁部	内外面回転ナデ。内外面暗灰色、断面灰白色。微細な石英・長石、炭化物をまばらに含む。	18
90	R50006	r5002	d層	DQ46	須恵器	甕	口縁部	口縁端部直下に断面三角形状突帯。上下を凹線文で区画した中に波状文。外面カキ目、内面回転ナデ。灰色。石英・長石の砂粒をまばらに含む。	18
91	R50189	r5107	d層	DY50畔	須恵器	甕	口縁部	口縁部内外面回転ナデ。肩部外面磨滅、内面青海波文あて具痕。内外面灰色、断面灰黄色。微細な石英・長石の砂粒、赤色粒、炭化物わずかに含む。	18
92	R50085	r5040	d層	DT49	須恵器	甕	肩部	赤焼け須恵器。全面磨滅、内面青海波文あて具痕。浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。2㎜大チャート含む。	18
93	R50149	r5068	d層	DW47	須恵器	甕	胴部	外面擬格子目状タタキ、内面青海波文あて具痕。灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	18
		r5073	d層	DW48					
94	R50123	r5055	d層	DV46	須恵器	甕	胴部	外面不定方向の格子目状タタキ、内面平行条線のあて具痕。灰色。微細な石英・長石多く含む。	18
		r5036	d層	DT47					
95	R50086	r5041	d層	DU45畔	須恵器	甕	胴部	外面不定方向の平行タタキ、内面青海波文あて具痕。灰白色。微細な石英・長石、炭化物わずかに含む。	18
96	R50070	r5033	d層	DT46	灰釉陶器	皿	口縁部	内外面回転ナデ。内外面に薄い緑色の釉がわずかに認められる。断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	19
97	R50041	r5019	d層	DS45畔	奈良二彩	壺	脚台部	全面磨滅。内外面施釉（緑釉・白釉）、断面淡黄色。石英・長石・チャートの砂粒わずかに含む。	19
98	R50153	r5069	d層	DW47	瓦	丸瓦		凸面板ナデ、凹面布目痕。灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	19
99	R50088	r5044	d層	DU46	瓦	平瓦		全面磨滅。凸面格子目タタキ。浅黄橙色。の石英・長石の砂粒、炭化物粒、赤色粒まばらに含む。	19
100	R50002	r5001	d層	DQ45	土師器	高坏	脚部	全面磨滅、内面絞り痕。内外面明赤褐色、断面暗灰黄色（黒化層）。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	19
101	R50009	r5003	d層	DQ46東畔	土師器	壺	肩部	全面磨滅。外面橙色、内面赤橙色、断面灰白色。石英・長石・チャートの砂粒～中礫多く含む。	19
102	R50059	r5025	d層	DS47	土師器	甕	口縁部	内外面横ナデ。内外面橙色、断面灰黄色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	19
103	R50158	r5071	d層	DW48	土師器	甕	口縁部	外面指オサエ、内外面横ナデか。内外面黒褐色、断面褐色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	19
104	R50062	r5030	d層	DS50	土師器	甕	口縁部	外面ハケ目後ナデ、内面横ナデ。灰黄褐色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	19
105	R50045	r5021	d層	DS46	土師器	甑 or 甕	把手	全面磨滅。橙色・断面灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒、炭化物まばらに含む。	19
106	R50175	r5090	d層	DX50畔	土師器	甑	底部	小円孔3残存。外面指オサエ・ナデ、内面ナデ。外面灰黄褐色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	19
107	R50119	r5055	d層	DV46	土師器	竈？	口縁部	移動式竈。外面縦ハケ目、口縁端部～内面横方向ハケ目。外面にぶい黄橙色、内面黒褐色（煤付着？）、内面下部にぶい褐色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	19
		r5053	d層	DV45畔					
108	R50120	r5055	d層	DV46	土師器	竈？	底部	移動式竈。外面縦ハケ目、内面ナデ。内外面にぶい橙色、断面暗灰黄色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	19
109	R50116	r5053	d層	DV45畔	弥生土器	壺	口縁部	口唇部に連続刻目。内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～中礫多く、微細な赤色粒まばらに含む。	20

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
110	R50089	r5045	d層	DU46	弥生土器	壺	口縁部	内外面磨滅。内外面にぶい橙色、断面灰黄褐色。石英・長石の砂粒非常に多く、微細な赤色粒まばらに含む。	20
111	R50049	r5022	d層	DS46	弥生土器	壺	口縁部	内外面磨滅、外面板状工具小口痕。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫、雲母・赤色粒多く含む。	20
112	R50003	r5002	d層	DQ46	弥生土器	壺	口縁部	全面磨滅、端部横ナデ。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色、断面黒化層・黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く、微細な雲母まばらに含む。	20
113	R50133	r5060	d層	DV48	弥生土器	壺	口頸部	内面突帯1条。外面ナデ、内面突帯部分横ナデ。外面にぶい黄褐色、内面にぶい橙色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、4mm以下の雲母わずかに含む。	20
114	R50032	r5017	d層	DR49	弥生土器	壺	頸部	頸部外面に多条沈線。内外面磨滅。内外面にぶい黄橙色、断面黒褐色（黒化層）。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	20
115	R50100	r5048	d層	DU48	弥生土器	壺	頸部	頸部境に突帯1条。内外面磨滅、内面指オサエ。外・断面および黒変部は暗灰色。内面浅黄色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	20
116	R50060	r5027	d層	DS48	弥生土器	壺	頸部	口縁部・頸部境に刻目突帯。全面磨滅。内外面橙色、断面暗灰色。石英・長石の砂粒～中礫多く、赤色粒まばらに含む。	20
117	R50092	r5046	d層	DU47	弥生土器	壺	頸部	外面、頸部境に刻目を施しながら突帯を貼り付け。内外面磨滅。内外面にぶい黄橙色、断面明赤褐色。石英・長石の砂粒～細礫多く、赤色粒わずかに含む。	20
118	R50001	r5001	d層	DQ45	弥生土器	壺	胴部	胴中位にM字状貼付突帯。外面磨滅、内面横ナデ。外面にぶい橙色、内面黒褐色。石英・長石の砂粒～中礫、赤色粒多く含む。	20
119	R50017	r5008	d層	DQ50	弥生土器	壺	底部	全面磨滅。外面浅黄橙色、内面黒色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	20
120	R50111	r5051	d層	DU49	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、雲母わずかに含む。	20
121	R50071	r5034	d層	DT46	弥生土器	壺	底部	全面磨滅。外面橙色・灰褐色、内面浅黄橙色、断面黒化層。石英・長石の砂粒、黒色砂粒、赤色粒非常に多く含む。	20
122	R50164	r5083	d層	DX47	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色、断面橙色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、赤色頁岩・雲母ごくわずかに含む	20
123	R50165	r5083	d層	DX47	弥生土器	甕	口縁部	外面ヘラ描き多条沈線。内外面磨滅。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、雲母、赤色粒わずかに含む。	20
124	R50117	r5053	d層	DV45畔	弥生土器	甕	口縁部	内外面横ナデ。にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	20
125	R50181	r5093	d層	DY45畔	弥生土器	甕	口縁部	内外面横ナデ。明赤褐色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	20
126	R50018	r5010	d層	DR45	弥生土器	甕	口縁部	口縁部・胴部境に刻目突帯。口縁部にヘラ状工具痕。内外面横ナデ。にぶい橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	20
127	R50124	r5056	d層	DV46	弥生土器	甕	口縁部	口縁端部に刻目。内外面横ナデ。にぶい橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒ごくわずかに含む。	20
128	R50155	r5071	d層	DW48	弥生土器	甕	口縁部	内外面磨滅、横ナデか。内外面灰黄褐色。石英・長石の砂粒多く含む。	20
129	R50182	r5093	d層	DY45畔	弥生土器	甕	胴部	外面縦ハケ目、内面斜ハケ目。胴屈曲部内外面横ナデ。外面にぶい橙色、内面にぶい褐色。石英・長石の砂粒多く含む。	20
130	R50096	r5046	d層	DU47	弥生土器	甕	胴部	刻目突帯1条。内外面磨滅。外面にぶい黄橙色、内面明褐色、断面黒褐色。石英・長石の砂粒～細礫、雲母多く含む。	20
131	R50126	r5057	d層	DV47	弥生土器	甕	底部	全面磨滅。外面にぶい褐色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫、雲母、赤色粒非常に多く含む。	20
132	R50061	r5030	d層	DS50	弥生土器	甕	底部	全面磨滅。内外面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	20
133	R50183	r5095	d層	DY46畔	弥生土器	甕	脚台部	山ノ口式。脚台部は中実。端部に凹線状の凹み。全面磨滅。外面にぶい黄色。断面赤褐色。石英・長石の砂粒～細礫、雲母非常に多く含む。黒色の火山生成物？わずかに含む。	20
134	R50015	r5005	d層	DQ48	弥生土器	鉢	口縁部	全面磨滅。明赤褐色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	20
135	R50004	r5002	d層	DQ46	弥生土器	鉢	口縁部	端部・外面に凹線。内外面横ナデ。外面褐色、内面黒褐色。石英・長石の砂粒～細礫、雲母多く含む。	20
136	R50033	r5017	d層	DR49	弥生土器	鉢	底部	全面磨滅。内面にぶい橙色、断面灰黄褐色（黒化層）。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、雲母まばらに含む。	20
137	R50163	r5081	d層	DX46	弥生土器	鉢	底部	上げ底状。外面指オサエ後タタキか。内面指オサエ後ハケ目。内外面橙色、断面灰黄褐色（黒化層）。石英・長石の砂粒多く、赤色粒まばらに含む。	20
138	R50008	r5019	d層	DS45畔	弥生土器	高坏？	口縁部	内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面浅黄橙色、断面黒色（黒化層）。石英・長石の砂粒多く含む。	20
139	R50006	r5002	d層	DQ46	弥生土器	高坏	口縁部	外面凹線文。外面下半ミガキ、内面ナデ。外面橙色、内面にぶい橙色。外面下半黒色（黒斑？）。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	20
140	R50096	r5047	d層	DU47	弥生土器	高坏	口縁部	口縁部外面凹線文。内外面磨滅。内外面にぶい橙色。外面下半黒斑。石英・長石の砂粒多く含む。	20
141	R50156	r5071	d層	DW48	弥生土器	高坏	口縁部	口縁部外面凹線文。内外面磨滅。外面浅黄橙色、内面橙色、断面黒色（黒化層）石英・長石の砂粒わずかに含む。	20
142	R50019	r5010	d層	DR45	弥生土器	高坏	脚部	外面上半多条沈線。外面にぶい橙色、内面橙色、断面黄灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒多く含む。	20
143	R50171	r5085	d層	DX48	石器	敲石		砂岩。現重量108.2g。磨滅顕著。	20
144	R50044	r5020	d層	DS46	石器	素材		結晶片岩。現重量42.4g。3片を直線的に加工している可能性あり。全面磨滅。	20
145	R50162	r5080	d層	DX46	石器	石鏃未製品		サヌカイト。現重量1.1g。基部に調整剥離、刃部未加工。	20
146	R50174	r5087	d層	DX49	石器	石鏃未製品		赤色頁岩。現重量3.5g。刃部に調整剥離、基部未調整。	20
147	R50170	r5085	d層	DX48	石器	石核		サヌカイト。現重量24.6g。全面風化。	20
148	R50154	r5069	d層	DW47	石器	石核		サヌカイト。現重量16.2g。剥離の方向不規則。	20
149	R50144	r5064	d層	DW45畔	石器	剥片		サヌカイト。現重量1.9g。	20
150	R50109	r5048	d層	DU48	石器	剥片		サヌカイト。現重量2.3g。	20

［古代の土師器・黒色土器］

1～14は古代の土師器で、赤彩が多い。1は小型ながら深みのある坏。灰白色の胎土に明赤褐色の赤彩を行う。2・3は坏口縁部。3は小片ながら特徴的につまみ出した端部である。4は端反りの埦口縁部。やや黄色みを帯びた胎土に内外面に明赤褐色の赤彩を行う。5は浅い坏。胎土自体も赤みがあり、明赤褐色の赤彩が内面に残る。6は皿で、口縁端部が外反する。底部はヘラ切り未調整。8～13は底部。7・9・10・11は平底から直線的に立ち上がり、8・12は一度立ち上がってから外に開く。8は底部回転ヘラ切りで、灰白色の胎土に橙色の赤彩を行う。9は体部外面をケズリ後ナデ調整。やや黄色みを帯びた灰白色の胎土に明赤褐色の赤彩を行う。12の底部はヘラ切り未調整か。

13は面取りにより多角形状を呈する高坏脚部。灰白色の胎土に赤褐色の赤彩を行う。14は小型の高坏等の脚端部か。橙色の胎土に明赤褐色の赤彩を行う。

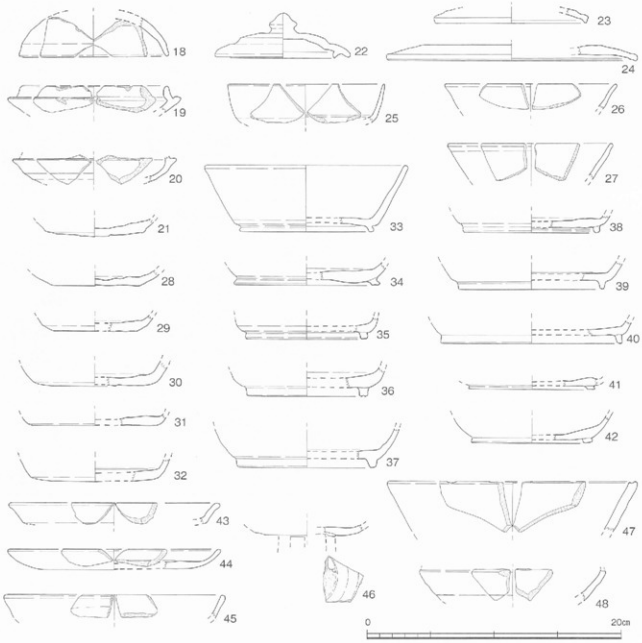


図74　SR-301-②層出土遺物(2)　－須恵器①－　(縮尺1/3)

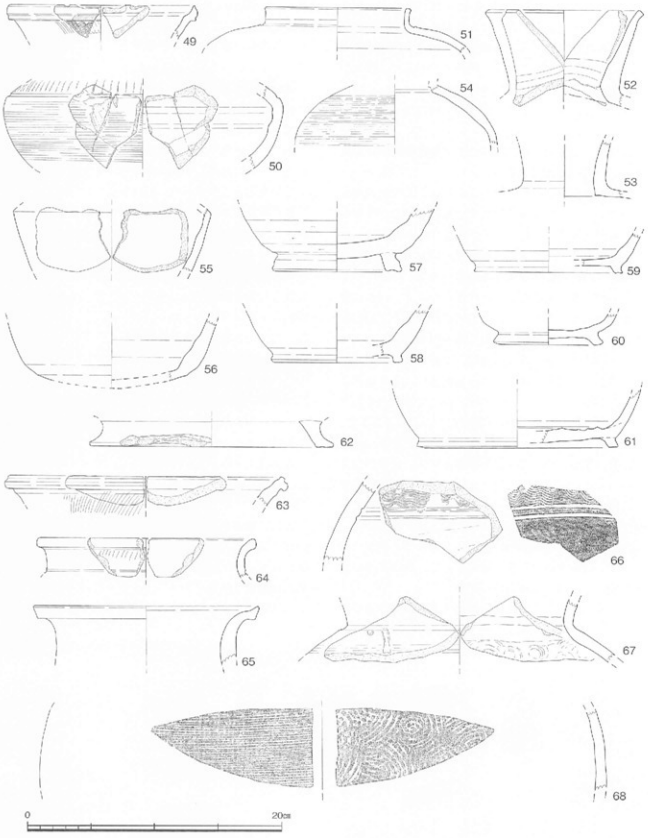


図75　SR-301-②層出土遺物(3)　－須恵器②－　(縮尺1/3)

15～17は内黒の黒色土器。15は端部が端反りする境口縁部。内面は横方向のミガキ仕上げをし、外面は口縁部が帯状に黒変する。16は平底ながら、内面黒色で丁寧にミガキを行っており、黒色土器とした。17は小型の甕。内面黒色処理がなされ、外面は体部にケズリを施し、頸部は横ナデ仕上げする（図版18－１）。

[須恵器]

18～68は須恵器（図版18－２）。古墳時代から古代まで、一括して報告する。

18は小型ながらやや天井の高い坏蓋。６世紀中頃から後半。19～21は坏身。19はやや厚い立ち上がりをもち、６世紀後半。20は立ち上がりを欠くが、回転ヘラケズリの範囲がやや広く、６世紀中頃まで遡る可能性が高い。21は回転ヘラ切り未調整の底部。

22～24は蓋。22は小型で、内面にかえり、頂部に高い擬宝珠つまみをもつ。23・24は口縁端部を下方に肥厚させるのみで、前者が小型、後者は大型。

25～42は坏。25～27は口縁部。25はわずかに内湾気味に直線的に立ち上がり、26は回転ナデにより端部の外反が明瞭。27はわずかに外反。28～32は高台をもたない底部で、回転ヘラ切り未調整か。31は外面黒色で、胎土は土師器に近い。32も軟質の焼き上がり。33～42は高台をもつ坏。33は全形が復元でき、直線的な深みのある坏。他は底部。33～35は高台断面が台形状で外に踏ん張る。36は方形で、接地部が凹線状に凹む。37～40は台形から長方形状に高くなるが、端部が丸い高台。41は低いながら外に踏ん張る高台で、焼きは良くない。42も薄い台形状で端部が丸い。外面黒色に炭素が吸着し、胎土は灰白色の瓦質。

43～45は皿。43は口縁部が外反する。44は体部が内湾し、外面黒色に炭素が吸着し、胎土は灰白色の瓦質。瓦器に近似する。底部外面はケズリ調整か。45はわずかに内湾し、端部が丸く肥厚する。口縁部外面は帯状に黒変する。

46は高坏坏部。長方形透の上端が一部残る。

47は直口の鉢。端部は凹線状に凹む。48は体部の屈曲部に浅い沈線をもつ。

49～62は壺類。49・50は頸。49は頸部にクシ描き波状文をもつ口縁部。50は体部中位にカキ目、肩部にクシ歯刺突文をもつ体部片。51は短頸壺口縁部で、肩部に蓋の重ね焼き痕がある。52は口縁部と頸部の調整が斜交し、大型の平瓶口縁部とみられる。53も壺口頸部。肩部は水平に近い。54は壺肩部で、外面カキ目調整、内面の頸部との接合部に段を残す。55はそろばん玉状に張る長頸壺体部。56は体部下半片で、丸底底部には回転ヘラケズリがみられる。57～61は高台を有する底部。62はより高さのある脚台部。

63～68は甕。63・64は外反する頸部に、やや肥厚する口縁部をもつもので、頸部に連続する刺突文状の凹凸がある。65は頸部がまっすぐ立ち上がり、口縁端部を上方につまみ上げる。66は大型の甕頸部で、クシ描き波状文をもつ。67は頸胴部で、外面にカキ目、内面に青海波文がみえる。68は体部片。やはり外面にカキ目、内面に青海波文である。

[瓦]

古代に遡る瓦として、４点を図化した。69は軒平瓦の瓦当接合部。凸面側に接合用の粘土を貼り足し、凹面には粗い布目が残る。内外面に炭素を吸着させ、胎土は瓦質で精良。70・71は、ともに隅部を残す平瓦で、凸面縄タタキ・凹面布目が見られる。72は凸面に

図76　SR-301-②層出土遺物(4)　－瓦－　（縮尺 1/3）

深い格子目タタキをもつ平瓦。

[古墳時代の土師器]

73は長く延びる壺口縁部。雲母をやや多く含み、鏡入品とみられる。74・75は、ともに小型丸底壺の頸部から体部上半。前者はやや縦長、後者は横長。76は小型鉢の口縁部。

77は大型甕の口縁部で、端部を強く横ナデし、内面側が段をなす。78は小型の布留系甕。口縁部は若干内湾し、端部を外側に軽くつまみ出す。79は小型甕。口縁部は内外面とも横ナデで内湾し、体部は粗いハケ目調整。80は長胴の甕。体部外面は粗いハケ目調整し、内面上半にオサエ痕をよく残す。口縁部は2段に横ナデし、内湾する。煮炊具として古墳時代に一括したが、古代に降るものである（図版18－3）。81は把手剥落部で、板片か。

82・83は高坏。いずれも坏底部に接合していた脚が剥落している。82は脚部上端が中実で、83は管状。

[弥生土器]

84～131は弥生土器で、84～102が壺類。

84は外反する口縁部に1条のヘラ描き沈線と刻み目を施す。85はやや直立気味に外反する口縁部で、端部に斜格子文。86は外反する口縁端部に、2条1単位の山形文を有する。87は口縁部内面に1条の貼付突帯、頸部に2条以上のヘラ描き沈線をもつ。88は幅広の削出突帯上にヘラ描沈線2条以上と刻みをもつ。89は1条のヘラ描き沈線が認められる上胴部片。90は円管刺突文をもつ体部片。91は幅広の突帯を貼り付け、それを3条突帯状に強く横ナデする頸部。以上が前期から中期中葉の範疇に収まる。

92～95は端部に凹線文をもつ口縁部で、中期後葉。92は内傾する頸部から短く外反する口縁部に4条の凹線文をもち、頸部縦ミガキの後、「ノ」字状刺突文を施す。93も同様の形態の口縁部で、3条の凹線文をもつ。94は大型。口縁部だけでなく頸部にも凹線文をも

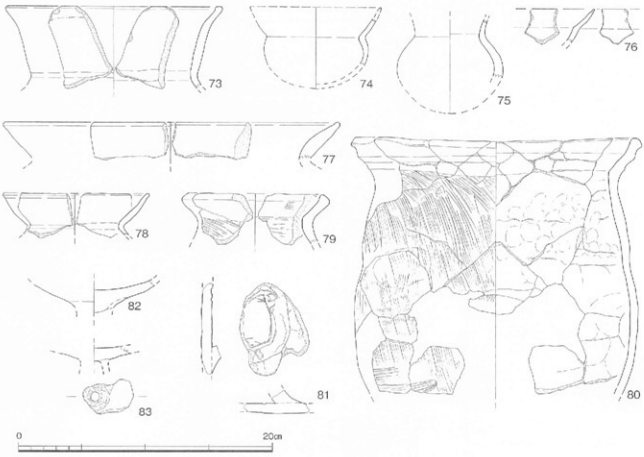


図77　SR-301-㋐層出土遺物(5)　－古墳時代土師器－　（縮尺1/3）

ち、内面にケズリが認められる（図版18－４）。やや大型の95は、４条の凹線文をもつ。

96は短く外反する口縁部で、端部に幅広の凹線をもつ。雲母を多く含み、撒入品の可能性が高い。97は内外面縦ハケ目調整を主とする体部上半。内面最大径部は横方向のケズリ痕が残る。

98～102は底部。98は３cm程の厚い底部。100には縦方向のミガキが外面に、内面にはケズリの痕跡がある。101は底部付近外面に横方向のミガキが残る。102は小さく厚い。

103～119は甕。103は如意形口縁で５条以上のヘラ描き沈線をもつ。前期末葉。104～106は「く」の字状口縁。104は内面に明確な稜があり、屈曲は直角に近い。口縁端部はやや丸く収める。105は屈曲が２段状で体部が張る。口縁端部は面をなす。106は体部があまり張らず、口縁部もやや立ち気味。胴下半内面に横方向

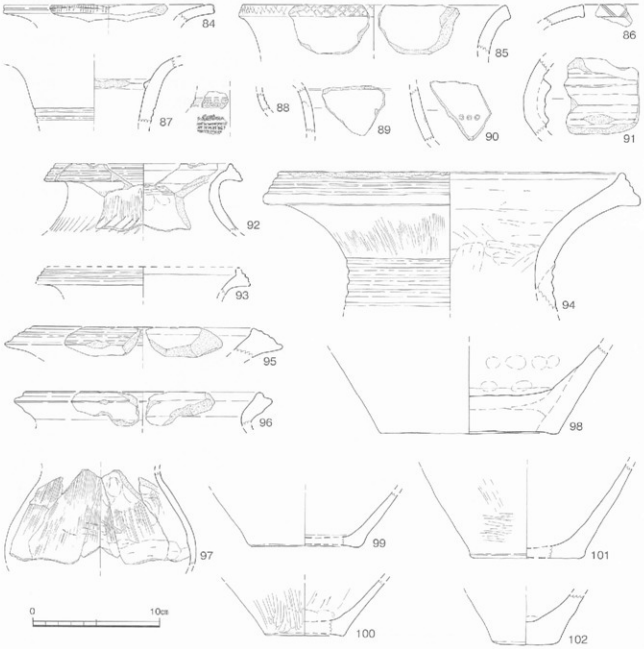


図78　SR-301-②層出土遺物⑥　－弥生土器①－　（縮尺1/3）

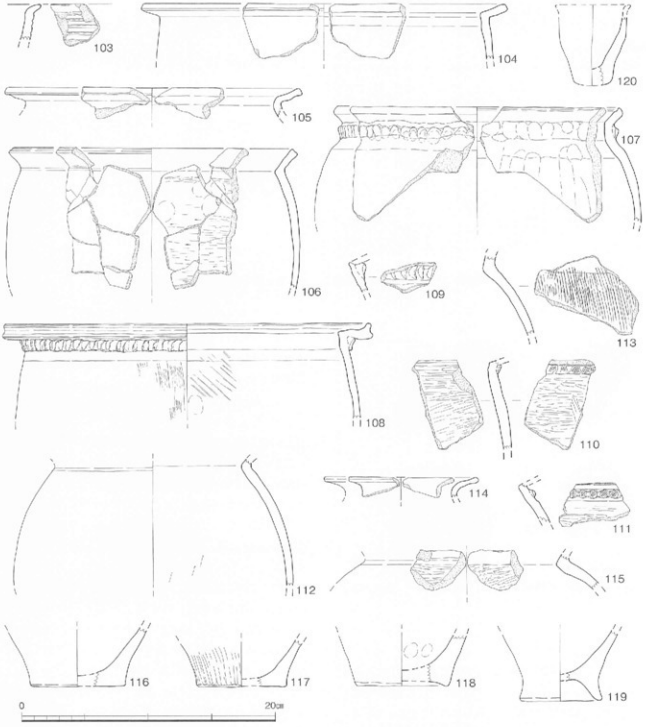


図79　SR-301-②層出土遺物(7)　－弥生土器②－　(縮尺1/3)

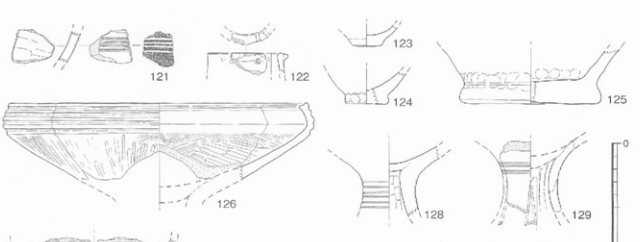


図80　SR-301-②層出土遺物(8)　－弥生土器③－　(縮尺1/3)

図81　SR-301-②層出土遺物(9)－縄文土器－　(縮尺1/3)

のケズリがなされている。

107～111は頸部の屈曲部に押圧突帯を貼り付ける。107はやや幅広の突帯で、これに対応して頸部内面も面をなす。口縁部は短く、体部はやや張る。108は、あまり張らない体部からほぼ直角に屈曲して水平方向に口縁部がのびる。端部を上方に拡張し、やや幅の広い凹線1条を施す。頸部の突帯は、板状工具により連続押圧が施されている。109は同様の突帯部片。110・111は布目押圧貼付突帯である。110は外面横方向のミガキ仕上げ、内面は縦方向のケズリ後、横方向のミガキ仕上げ。

112・113は張りのある体部上半で、頸部に突帯はもたない。112下部にはケズリ、113は外面に粗い縦ハケ目調整が残る。

114は曲線的に外反する口縁部で、径はやや小さい。

115は丸く張る肩部で、外面は横方向のミガキ仕上げ、内面はケズリ後横方向のミガキ仕上げである。

116～119は底部。116～118は平底で、117の外面には幅広の縦ミガキがみられる。119は高台状の上げ底。

120は如意形口縁鉢のミニチュアか。

121～125は鉢。121は体部に4条のヘラ描き沈線をもつ。前期末葉。122は直口の口縁部に耳状の突起を貼り足し、その下部に小孔を穿つ。123は凸状の底部で小型。124は高台状に突出する底部で、やはり小型。125は厚く外に張り出した底部。

126～131は高坏。126は口縁部に4条の凹線文をもつ坏部。外面ハケ目後、縦方向のミガキ仕上げ。内面はハケ目後、4方向の弧線状の横ミガキ(図版18－5)。127は小型の坏部で、外面立ち上がり部に凹線の一端が残る。内外面ミガキ仕上げ。128は脚部から坏下部。坏底部は円盤充填により、脚上部に6条のヘラ描き沈線がみられる。129は脚部で、上部に4条のヘラ描き沈線、下部に矢羽根状透の一端が残る。130は脚裾部。外面に3条、端部に1条の凹線文をもつ。131は小円孔を有する小片。高坏あるいは器台の脚部の可能性が高い。

[縄文土器]

132～135は縄文土器（図版18－6）。132は内傾する深鉢口縁部、内外面は条痕調整後ナデ。133は深鉢体部の屈曲部、内外面ナデ仕上げ。134は深鉢下部で、外面に粗い条痕を残し、破片上端部に縄文が認められる。135は椀状の浅鉢口縁部、細く鋭い口縁端部は横ナデし、内外面細かい条痕調整後、外面ナデ。

[土製品]

土製品として２点を示す。いずれも管状土錘。136はほぼ完形。長さ約5.5cm、最大幅1.6cmと、身の中位が太い。孔径は約0.5cm。137は半身で両端も欠く。復元孔径から、136より若干大型（図版18－7）。

[石器]

138は砂岩製砥石。断面五角形状を呈する（図版18－8）。139はサヌカイト剥片である。

[鉄器]

140は断面方柱状の鉄器で、釘とみられる。

③　SR-301-③層（e2層）の出土遺物

SR-301-③層（取り上げ時にはe2層）出土遺物は、本調査出土遺物の過半数を占め、出土時にはコンテナ30箱余を数えた。しかも、破片の大きなものを多く含む。内容的には、古代以降の土師器供膳具（赤彩含む）・煮炊具、古墳時代から古代の須恵器、瓦、古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器、土製品、石器、鉄器がある。特に弥生・古代の土器が多く、黒色土器が含まれないことから、古代後半までは降らない。

SR-301-③層出土遺物から、810点を以下に提示する（図83～126、図版19～24）。

[古代の土師器]

土師器のうち、供膳具を中心とした古代と考えられる土師器を提示する。点数は75点。このうち、供膳具が１～65の65点で、残り10点は土師器煮炊具でも古墳時代に遡らないと判断したものである。なお、供膳具には赤彩を施したものが少なくなく、これらは一括して図示した（図83～85、図版19－１～３）。

１～37は、古代土師器の供膳具でも、赤彩の確認で

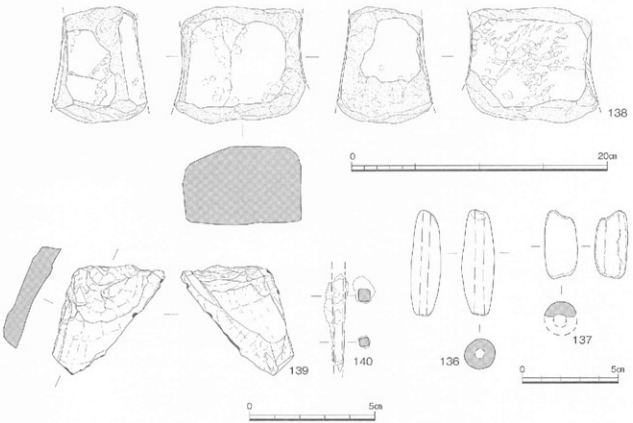


図82　SR-301-②層出土遺物(3)　－土製品・石器・鉄器－　（縮尺1/3・1/2・2/3）

表11　SR-301-②層出土遺物観察表

図73～82　SR-301-②層出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R61123	r6053	e1層	DW49	土師器(赤彩)	坏	全形	内外面回転ナデ，底部ナデ。赤彩明赤褐色。灰白色の胎土に1mm以下の石英・長石・雲母少し含む。	21
2	R61138	r6061	e1層	DX49	土師器	坏	口縁部	内外面橙色。石英・長石・赤色の微細粒含む。	21
3	R61141	r6065	e1層	DX50畔	土師器	坏	口縁部	内外面横ナデ。内外面橙色。赤色の微細粒含む。	21
4	R61114	r6045	e1層	DV49	土師器(赤彩)	碗	口縁部	内外面回転ナデ。赤彩明赤褐色。浅黄橙色の胎土に微細粒少し含む。	21
5	R61027	r6015	e1層	DQ49	土師器(赤彩)	坏	底部	内外面回転ナデ。断面橙色、赤彩明赤褐色。石英・長石・雲母の微細粒少し含む。	21
6	R61159	r6070 r6072	e1層 e1層	DY47 DY48	土師器	皿	全形	赤塗か。内外面回転ナデ、底部未調整。内外面浅黄橙色。石英・長石・赤色の微細粒わずかに含む。	21
7	R61134	r6059	e1層	DX47	土師器	坏	底部	内外面横ナデ。外面灰白色、内面明赤褐色。石英・長石・雲母の微細粒含む。	21
8	R61116	r6046	e1層	DV50	土師器(赤彩)	坏	底部	内外面回転ナデ,底部回転ヘラ切り。赤彩橙色。灰白色の胎土に石英・長石・赤色の細粒含む。	21
9	R61026	r6015	e1層	DQ49	土師器(赤彩)	坏	底部	外面横ケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ。断面灰白色、赤塗明赤褐色。石英・長石・赤色の微細粒少し含む。	21
10	R61161	r6070	e1層	DY47	土師器	坏	底部	赤塗か。外面磨滅、内面回転ナデ。内外面浅黄橙色。胎土精良。	21
11	R61122	r6053	e1層	DW49	土師器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面浅橙色。石英・長石・赤色の細粒含む。	21
12	R61068	r6028	e1層	DS48	土師器	坏	底部	外面横ナデ、底部ヘラ切り未調整か、内面磨滅。内外面灰白色。微細粒少し含む。	21
13	R61081	r6033	e1層	DT45畔	土師器(赤彩)	高坏	脚部	外面断面多角形状に面取り。外面浅黄橙色、赤彩赤褐色、内面・断面灰白色。石英・長石の微細粒わずかに含む。	21
14	R61068	r6029	e1層	DS49	土師器(赤彩)	高坏？	脚端部？	内外面磨滅。内外面橙色、赤彩明赤褐色。石英・長石・雲母の微細粒含む。	21
15	R61169	r6074	e1層	DY49	黒色土器(内)	椀	口縁部	内外面磨滅、内面横ミガキか。外面灰白色。1mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	21
16	R61069	r6028	e1層	DS48	黒色土器(内)	坏？	底部	外面磨滅、内面丁寧なミガキ。外面明褐灰色。微細粒わずかに含む。	21
17	R61133	r6058 r6062 r6070	e1層 e1層 e1層	DX47 DX48 DY47	黒色土器(内)	甕	全形	外面口縁部横ナデ,体部上半縦ケズリ,下半横～斜ケズリ後ナデ。内面磨滅。外面灰黄褐色、煤付着。1mm以下の石英・長石含む。	21
18	R61054	r6028	e1層	DS48	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰白色、内面明褐灰色、断面灰褐色。石英・長石の細粒含む。	22
19	R61031	r6018	e1層	DQ50東畔	須恵器	坏身	口縁部	内外面回転ナデ。内外面青灰色。3mm以下の石英・長石やや含む。	22
20	R61041	r6022	e1層	DR49	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ。内外面灰色。石英・長石の細粒少し含む。	22
21	R61128	r6056	e1層	DW50畔	須恵器	坏身	底部	内外面回転ナデ、底部ヘラ切り未調整。内外面灰色。1mm以下の石英・長石少し含む。	22
22	R61064	r6029	e1層	DS49	須恵器	坏蓋	全形	宝珠つまみ。内外面回転ナデ。外面天井部回転ケズリ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石少し含む。	22
23	R61065	r6029	e1層	DS49	須恵器	蓋	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石少し含む。焼けひずみあり。	22
24	R61113	r6045	e1層	DV49	須恵器	蓋	口縁部	口縁部内外面回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石・黒色粒やや含む。	22
25	R61096	r6035	e1層	DT47	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の細粒少し含む。	22
26	R61062	r6029	e1層	DS49	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰色。石英・長石の細粒少し含む。	22
27	R61022	r6015	e1層	DQ49	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の微細粒含む。	22
28	R61109	r6041	e1層	DU50	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ、底部回転ヘラ切り未調整。内外面灰色。1mm以下の石英・長石含む。	22
29	R61125	r6055	e1層	DW50畔	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ、底部未調整。内外面灰白色。石英・長石の細粒含む。	22
30	R61023	r6015	e1層	DQ49	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ、底部外面ヘラ切り未調整か。内外面灰白色。石英・長石の微細粒含む。	22
31	R61013	r6014	e1層	DQ48	須恵器	坏	底部	内外面磨滅。外面灰色、内面灰白色。微細粒を含む他精良、瓦質に近似。	22
32	R61024	r6015	e1層	DQ49	須恵器	坏	底部	内外面磨滅。内外面灰白色、わずかに赤塗残。石英・長石の微細粒含む。	22
33	R61029	r6017	e1層	DQ50	須恵器	坏	全形	内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の微細粒含む。	22
34	R61009	r6014	e1層	DQ48	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ。内外面灰白色。1mm前後の石英・長石少し含む。	22
35	R61100	r6035	e1層	DT47	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、断面灰黄褐色。1mm以下の石英・長石・赤色粒含む。	22
36	R61129	r6056	e1層	DW50畔	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石少し含む。	22
37	R61099	r6035	e1層	DT47	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石・黒色粒含む。	22
38	R61119	r6049	e1層	DW48	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ,底部回転ヘラ切り後高台貼付。内外面灰白色。石英・長石・黒色の細粒含む。	22
39	R61055	r6028	e1層	DS48	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰色、断面灰褐色。1mm以下の石英・長石少し含む。	22
40	R61146	r6066	e1層(Ⅲ・Ⅳ含)	DY46	須恵器	坏	底部	高台接合前に沈線。内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の細粒含む。	22
41	R61105	r6035	e1層	DT47	須恵器	坏	底部	内外面磨滅。内外面淡黄色。1mm以下の石英・長石・雲母やや含む。	22
42	R61040	r6021	e1層	DR48	須恵器	坏	底部	外面暗灰色、内面灰色、断面灰白色。胎土瓦質に近似。	22
43	R61107	r6036	e1層	DT48	須恵器	皿	全形	内外面回転ナデ。内外面灰色、断面灰褐色。石英・長石の細粒少し含む。	22
44	R61117	r6046 r6047	e1層 e1層	DV50 DV50	須恵器	皿	全形	外底面ヘラケズリ、内外面横ナデ。外面黒色、内面灰白色。石英・長石の細粒やや含む。瓦質に近似。	22
45	R61063	r6029	e1層	DS49	須恵器	皿	口縁部	内外面ナデ。内外面灰白色、口縁部外面帯状に黒変。微細粒少し含む他は精良で瓦質に近似。	22
46	R61120	r6049	e1層	DW48	須恵器	高坏	坏部	脚接合部に長方形透残る。内面回転ナデ、外面接合前に回転ヘラケズリ・回転ナデ。内外面灰色。石英・長石の細粒含む。	22
47	R61136	r6064	e1層	DX49	須恵器	鉢	口縁部	口縁端部凹線文。内外面回転ナデ。内外面灰白色,内面火襷有。1mm以下の石英・長石少し含む。	22
48	R61097	r6035	e1層	DT47	須恵器	鉢？	体部	内外面回転ナデ、外面底部回転ケズリ。内外面灰白色。石英・長石・黒色の細粒含む。	22
49	R61121	r6052	e1層	DW49	須恵器	𤭯	口縁部	頸部クシ描波状文。内外面灰色、断面灰褐色。石英・長石の細粒少し含む。	23
50	R61010	r6014	e1層	DQ48	須恵器	𤭯	体部	肩部クシ刺突文。体部下半カキ目、内面回転ナデ。内外面灰色。1mm前後の石英・長石やや含む。	23
51	R61075	r6030	e1層	DS49	須恵器	短頸壺	上半部	内外面回転ナデ。内外面灰白色,外面灰オリーブ色の自然釉一部付着,蓋重ね焼き痕。石英・長石の細粒少し含む。	23
52	R61137	r6064	e1層	DX49	須恵器	平瓶	口縁部	口縁部と頸部のナデ斜交。内外面回転ナデ。内外面灰白色、頸部灰オリーブ色の自然釉。石英・長石・黒色の細粒少し含む。	23
53	R61111	r6044	e1層	DV48	須恵器	壺	頸部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、頸部に灰オリーブ色の自然釉一部付着。石英・長石の細粒含み、3mm大の石英・長石少し含む。	23
54	R61102	r6035	e1層	DT47	須恵器	壺	肩部	頸部接合部で剥落。外面カキ目、内面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の細粒含む。	23
55	R61101	r6035	e1層	DT47	須恵器	長頸壺	体部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、肩部以上褐灰色の自然釉。1mm以下の石英・長石含む。	23
56	R61047	r6023	e1層	DR49	須恵器	壺	底部	内外面回転ナデ、底部外面回転ケズリ。内外面灰白色。1mm以下の石英・長石少し含む。	23
57	R61077	r6030	e1層	DS49	須恵器	壺	底部	外面下半回転ケズリ、底部外面回転ナデ、内面回転ナデ。内外面灰白色、底部内面にオリーブ灰色の自然釉。石英・長石の細粒少し含む。器壁に空隙多く焼膨れあり。	23
58	R61140	r6065	e1層	DX50畔	須恵器	壺	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の微細粒少し含む。	23

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
掲図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
59	R61110	r6041	e1層	DU50	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の細粒含む。	23
60	R61042	r6022	e1層	DR49	須恵器	坏	底部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、内外面点々と自然釉。石英・長石の細粒少し含む。	23
61	R61011	r6014	e1層	DQ48	須恵器	壺	底部	内外面回転ナデ、底部内面凹凸顕著、高台端面ケズリ。内外面灰白～灰色、外面灰色の自然釉。1㎜以下の石英・長石少し含む。焼成灰釉に近似。	23
62	R61056	r6028	e1層	DS48	須恵器	坏	脚台部	上端は剥落面。内外面回転ナデ。内外面灰白色。石英・長石の細粒少し含む。	23
63	R61025	r6015	e1層	DQ49	須恵器	甕	口縁部	内外面回転ナデ、頸部外面刺突文状。内外面灰白色、灰オリーブ色の自然釉。石英・長石の微細粒わずかに含む。	23
64	R61057	r6028	e1層	DS48	須恵器	甕	口縁部	胴部横ナデ、一部段状。内外面灰白色。胎土精良で、焼成軟質。	23
65	R61012	r6014	e1層	DQ48	須恵器	甕	口縁部	内外面回転ナデ。外面灰褐～褐灰色、内面灰褐色。1㎜以下の石英・長石少し含む。やや赤焼け。	23
66	R61005	r6010	e1層（Ⅲ・Ⅳ含）	DQ46	須恵器	甕	頸部	沈線2条の上にクシ描き波状文。内外面ナデ。内外面灰白色。2㎜以下の石英・長石含む。	23
67	R61112	r6044	e1層	DV48	須恵器	甕	頸部	頸部内外面回転ナデ、体部外面カキ目後ナデ、体部内面青海波文後ナデ。内外面灰白色。1㎜以下の石英・長石含み、3㎜大の石英・長石少し含む。	23
68	R61104	r6035	e1層	DT47	須恵器	甕	体部	外面タタキ後カキ目、内面青海波文後一部ナデ。内外面灰色。3㎜以下の石英・長石含む。	23
69	R61126	r6055	e1層	DW50畔	瓦	軒平瓦	接合部	凸面側に接合用粘土貼り足す。凹面粗い布目、凸面ナデ。表面灰色、断面灰白色。1㎜以下の石英・長石・黒色粒やや含む。	24
70	R61028	r6015	e1層	DQ49	瓦	平瓦	隅部	凸面縄タタキ、凹面布目。表面黄灰色、断面灰白色。石英・長石の微細粒含む。	24
71	R61016	r6014	e1層	DQ48	瓦	平瓦	隅部	凸面縄タタキ、凹面布目。表面暗灰色、断面灰白色。微細粒を含む鬼瓦質精良。	24
72	R61015	r6014	e1層	DQ48	瓦	平瓦	広部	凸面粗い格子タタキ、凹面ナデか。表面灰色、断面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・赤色粒含む。	24
73	R61037	r6021	e1層	DR48	土師器	壺	口縁部	内外面磨滅。内外面橙色、口縁端部黒変。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	24
74	R61066	r6029	e1層	DS49	土師器	小型丸底壺	体部	内外面磨滅。外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色。石英・長石・雲母の微細粒やや含む。	24
75	R61033	r6019	e1層	DR45	土師器	小型丸底壺	体部	内外面磨滅。外面橙色、内面黄橙色。2㎜以下の石英・長石やや多く含む。	24
76	R61050	r6023	e1層	DR49	土師器	小型鉢	口縁部	外面浅黄橙色、内面橙色。石英・長石の微細粒やや含む。	24
77	R61067	r6029	e1層	DS49	土師器	甕	口縁部	内外面磨滅、口縁端部横ナデ。外面橙色、内面にぶい黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母含む。	24
78	R61006	r6010	e1層（Ⅲ・Ⅳ含）	DQ46	土師器	甕	口縁部	内外面ナデ。内外浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	24
79	R61014	r6014	e1層	DQ48	土師器	甕	口縁部	内外面斜～横ハケ目、口縁部後横ナデ、内面後ナデ。外面黒褐色、煤付着、内面褐色。3㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	24
80	R61115	r6045 / r6278	e1層 / ラベルなし	DV49	土師器	甕	上半部	口縁部内外面横ナデ。体部外面上半下から上へのハケ目、下半一部後ハケ目。体部内面上半オサエ、下半ナデ。内外面明褐色、外面煤付着。5㎜以下の、2㎜前後を中心とした石英・長石・雲母多く含む。	25
81	R61106	r6035	e1層	DT47	土師器	甑？	接合部	接合部に刻目後貼付、尻部に粘土貼足。内外面橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。	24
82	R61142	r6065	e1層	DX50畔	土師器	高坏	坏部	内外面磨滅。坏底部に脚接合。内外面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母少し含む。	24
83	R61053	r6027	e1層	DS47	土師器	高坏	坏部	坏底部に脚接合痕。内外面橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	24
84	R61035	r6021	e1層	DR48	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部ヘラ描き沈線1条に刻目。内外面磨滅。内外面灰白色。1㎜前後の石英・長石・雲母やや多く含む。	26
85	R61020	r6015	e1層	DQ49	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部ヘラ描き斜格子文。内外面磨滅。内外面灰白色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒多く含む。	26
86	R61118	r6048	e1層	DW45畔	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部2条1単位の山形文。内外面ナデか。内外面明褐色。2㎜以下の石英・長石やや多く含む。	26
87	R61127	r6056	e1層	DW50畔	弥生土器	壺	頸部	口縁部内面貼付突帯、頸部ヘラ描き沈線2条。内外面磨滅。内外面明赤褐色。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	26
88	R61086	r6035	e1層	DT47	弥生土器	壺	頸部	頸部に幅広の貼付突帯、その上にヘラ描沈線2条以上と刻み。外面橙色、内面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	26
89	R61156	r6070	e1層	DY47	弥生土器	壺	上胴部	ヘラ描沈線1条。外面磨滅、内面オサエ・一部ハケ目。外面浅黄橙色、内面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	26
90	R61070	r6030	e1層	DS49	弥生土器	壺	頸部	円管刺突文。内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石・赤色粒やや多く含む。	26
91	R61008	r6014	e1層	DQ48	弥生土器	壺	頸部	幅広の貼付突帯を横ナデにより3条の突帯状。内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	26
92	R61131 / R61144	r6057 / r6066	e1層 / e1層（Ⅲ・Ⅳ再）	DX46 / DY46	弥生土器	壺	口縁部	口縁部4条の1条単位の貼瘤文、頸上部ノ字状押圧文。外面頸部縦ミガキ、口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ、頸部一部横ミガキ、体部オサエ。内外面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	26
93	R61151	r6068	e1層（Ⅲ・Ⅳ含）	DY46	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部凹線文3条。内外面磨滅。内外面明赤褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	26
94	R61002	r6009	e1層	DQ46	弥生土器	壺	口縁部	口縁部3条・頸部5条以上の貼瘤文。外面頸部縦ハケ目後ナデ、内面口縁部横ナデ、頸部ケズリ。外面橙色、内面浅黄橙色、有黒斑。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	26
95	R61069	r6030	e1層	DS49	弥生土器	壺	口縁部	口縁部凹線文4条。内外面磨滅。内外面橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	26
96	R61043	r6023	e1層	DR49	弥生土器	壺	口縁部	口縁部幅広の凹線文1条。頸部横ナデ。内外面橙色。1㎜以下の石英・長石・赤色粒やや多く、雲母を多く含む。	26
97	R61152	r6068	e1層（Ⅲ・Ⅳ再）	DY46	弥生土器	壺	胴部	外面胴部縦ハケ目、頸部横ナデ。内面最大径部以下横ケズリ、胴部オサエ後疎らな縦ハケ目。外面浅黄橙色、内面灰黄褐色。石英・長石・雲母・赤色粒の細粒含む。	26
98	R61088	r6035	e1層	DT47	弥生土器	壺	底部	外面磨滅、内面オサエ。外面浅黄色、有黒斑、内面橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母多く含む。	26
99	R61153	r6068	e1層（Ⅲ・Ⅳ再）	DY46	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面にぶい黄橙色、内面灰白色。3㎜以下の石英・長石・雲母多く含む。	26
100	R61154	r6068	e1層（Ⅲ・Ⅳ再）	DY46	弥生土器	壺	底部	外面縦ミガキ、内面縦ケズリ。内外面橙色、外面有黒斑。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	26
101	R61090	r6035	e1層	DT47	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅、外面一部横ミガキ残。内外面にぶい黄褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	26
102	R61044	r6023	e1層	DR49	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。内外面明黄褐～浅黄橙色。3㎜以下の石英・長石多く含む。	26
103	R61051	r6025	e1層	DS45畔	弥生土器	甕	口縁部	ヘラ描き沈線5条以上。内外面灰白色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	27
104	R61071	r6030	e1層	DS49	弥生土器	甕	口縁部	口縁部横ナデ。外面橙色、内面にぶい黄橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母多く含む。	27
105	R61092	r6035	e1層	DT47	弥生土器	甕	口縁部	内外面横ナデ。内外面橙色。石英・長石・雲母含む。	27
106	R61162	r6071	e1層（Ⅲ・Ⅳ含）	DY47畔	弥生土器	甕	上半部	外面磨滅、内面下半ケズリ状の横ハケ目、口縁部横ナデ。内外面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	27
107	R61091	r6035	e1層	DT47	弥生土器	甕	上半部	頸部押圧貼付突帯。口縁部横ナデ、外面磨滅、体部内面横方向のナデ。内外面橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	27
108	R50180	r6066 / r5093	e1層（Ⅲ・Ⅳ再） / d層	DY46 / DY45畔	弥生土器	甕	口縁部	頸部境に刻目突帯。口縁部内外面横ナデ、胴部外面縦ハケ、胴部内面斜ハケ。明赤褐色。径4㎜以下の石英・長石多く、径1㎜以下の赤色粒わずかに含む。	27

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
109	R61157	r6070	e1層	DY47	弥生土器	甕	頸部	頸部貼付押圧突帯。頸部内面上端横ナデ。内外面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	27
110	R61145	r6066	e1層 (Ⅲ・Ⅳ再)	DY46	弥生土器	甕	上胴部	頸部布目押圧貼付突帯。体部内外面横ミガキ、頸部内面横ナデ。内外面橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	27
111	R61148	r6067 r6067	e1層 e1層	DY46 DX46	弥生土器	甕	上胴部	頸部布目押圧貼付突帯。外面横ミガキ、内面オサエ。内外面橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。	27
112	R61004	r6010	e1層 (Ⅲ・Ⅳ含)	DQ46	弥生土器	甕	上胴部	外面磨滅、頸部横ナデ、内面ナデ、下半縦ケズリ。内外面橙色、外面有黒斑。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒多く含む。	27
113	R61003	r6009	e1層	DQ46	弥生土器	甕	肩部	外面頸部横ナデ、体部粗い縦ハケ目、内面斜ナデ。内外面灰白色。3㎜以下の石英・長石・雲母含む。	27
114	R61072	r6030	e1層	DS49	弥生土器	甕	口縁部	口縁部横ナデ。外面にぶい橙色、内面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。	27
115	R61132	r6058	e1層	DX47	弥生土器	甕	肩部	内外面頸部横ナデ、外面体部横ミガキ、内面体部上端横ケズリ、以下横ミガキ。外面にぶい橙色、内面浅黄橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	27
116	R61094	r6035	e1層	DT47	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。内外面明赤褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	27
117	R61038	r6021	e1層	DR48	弥生土器	甕	底部	外面幅広の縦ミガキ、内面磨滅。外面橙色、底部外面明赤褐色、内面浅黄橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	27
118	R61093	r6035	e1層	DT47	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。内外面明赤褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	27
119	R61073	r6030	e1層	DS49	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。外面橙色、内面灰白色。2㎜以下の石英・長石・雲母をやや多く含む。	27
120	R61095	r6035	e1層	DT47	弥生土器	ミニチュア甕?	下半部	内外面磨滅。内外面黄褐色。3㎜以下の石英・長石・雲母多く含む。	27
121	R61150	r6068	e1層 (Ⅲ・Ⅳ再)	DY46	弥生土器	鉢	胴部	ヘラ描沈線4条。内面横ナデかミガキ。外面にぶい橙色、内面橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。	28
122	R61046	r6023	e1層	DR49	弥生土器	鉢	口縁部	口縁端部に耳状突起、その下に孔(双孔か)。内外面浅黄橙色。1㎜以下の石英・長石やや含む。	28
123	R61039	r6021	e1層	DR48	弥生土器	鉢	底部	凸状。内面オサエ。外面浅黄橙～橙色、内面灰褐色、焦げ付着。石英・長石・雲母・赤色の微細粒含む。	28
124	R61045	r6023	e1層	DR49	弥生土器	鉢	底部	凸状底部。底部外側面オサエ。内外面にぶい橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	28
125	R61089	r6035	e1層	DT47	弥生土器	鉢	底部	底部外側面・内面オサエ。内外面明赤褐色、外面有黒斑。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	28
126	R61155	r6068	e1層 (Ⅲ・Ⅳ含)	DY46	弥生土器	高坏	口縁部	口縁部外面4条・口唇部1条の1条単位の凹線文。外面縦ハケ目後縦ミガキ、内面縦ハケ目後4単位の横ミガキ。外面明褐～褐色で有黒斑、内面にぶい黄橙色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。	28
127	R61158	r6070	e1層	DY47	弥生土器	高坏	坏部	内外面縦ハケ目後縦ミガキ。内外面橙色。石英・長石・雲母・赤色の微細粒含む。	28
128	R61001	r6008	e1層	DQ45	弥生土器	高坏	坏部	脚上部ヘラ描き沈線6条以上。坏底部円板充填。坏内面・脚外面磨滅、脚内面横ケズリ。内外面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒多く含む。	28
129	R61030	r6018	e1層	DQ50東畔	弥生土器	高坏	脚部	脚上部ヘラ描き沈線4条、脚部矢羽根透。坏底部円板充填剥落。外面磨滅、内面絞り目。内外面明赤褐色。石英・長石・雲母の細粒やや含む。	28
130	R61147	r6067	e1層	DY46	弥生土器	高坏	脚端部	脚部外面3条・端部1条の1条単位の凹線文。内面横ナデ。内外面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。	28
131	R61052	r6026	e1層	DS47	弥生土器	高坏?	脚部	有孔。内外面橙色。石英・長石・雲母の細粒含む。	28
132	R61084	r6035	e1層	DT47	縄文土器	深鉢	口縁部	外面横の条痕後ナデ、内面横～斜の条痕、口縁ナデ。外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	29
133	R61083	r6035	e1層	DT47	縄文土器	深鉢	体部	内外面横～斜のナデ。内外面灰白色、外面下半煤付着。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。	29
134	R61082	r6034	e1層	DT46	縄文土器	深鉢	体部	外面斜の条痕、上部の一部に縄文、内面ナデ。外面橙～にぶい橙色、内面褐色、一部焦げつきあり。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。	29
135	R61085	r6035	e1層	DT47	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面横～斜の条痕後ナデ、内面横～斜の条痕、口縁部横ナデ。外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色。3㎜以下の石英・長石やや多く含む。	29
136	R61078	r6030	e1層	DS49	土製品	管状土錘	完形	にぶい黄橙～灰黄褐色。胎土精良。	29
137	R61079	r6030	e1層	DS49	土製品	管状土錘	半切	橙色。石英・長石・雲母の微細粒含む。	29
138	R61007	r6010	e1層 (Ⅲ・Ⅳ含)	DQ46	石器	砥石		断面五角形状。砂岩製。現重量1,040g。	29
139	R61164	r6072	e1層	DY48	石器	剝片		サヌカイト製。現重量15.5g。	29
140	R61130	r6056	e1層	DW50畔	鉄器	釘?		断面方柱状。	77

きないものである。それでも、胎土自体が赤みをもつものが多い（図版19－１・２）。

１～10は坏口縁部。１は外反する口縁部で、口唇内面が凹線状を呈する。２も口唇内面に浅い凹みをもつ。３は、横ナデにより口縁部外面に浅い凹線２条が巡る。４は底部まで残り、高台が付かないタイプとなる。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。５・６も同様に内湾しながら立ち上がり、５は口縁部の外反が強く、６は小型。７は口縁部横ナデにより外反するがやや大型。８～10は内湾気味に開く口縁部で、９・10は端部がやや尖り気味。

11～15は、高台をもたない坏底部。11・12は深みのある底部で、底は薄く、立ち上がり部分が厚い。11は内面回転ナデの後、横方向の散発的なミガキを施す。13もやや深みのある底部であるが、体部は一度内湾して立ち上がった後、外反してのびる。14・15はやや大型で、皿底部の可能性もある。14は底部から直線的に外傾してのびる体部で、15の底部から立ち上がりは、やや急である。

16～21は高台をもつ坏底部。16は小型ながら外にしっかり踏ん張る高台で、胎土はにぶい黄橙色で多くの砂粒を含む。17～20はやや丸みをもつものの、断面台形状の高台を有する。21は幅広ながら、三角形状に近い高台である。なお、18･19は赤い胎土が多い中で、白い胎土をもつ。

22～24は小型の皿。22は内湾する体部に、端部が外

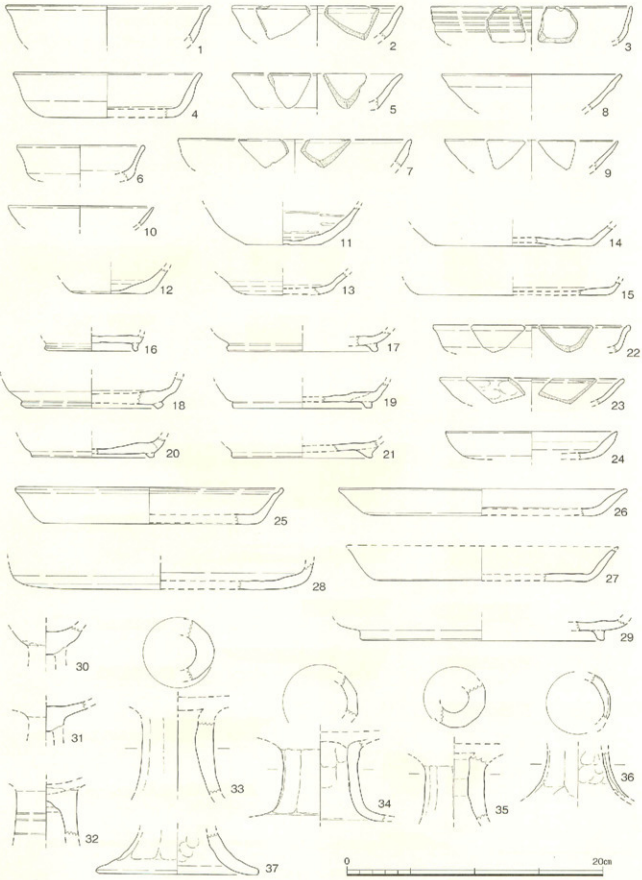


図83　SR-301-③層出土遺物(1)　－古代土師器①－　(縮尺1/3)

反して内面に浅い沈線をもつ。23は直線的に開く体部で、口唇内外面に炭素が吸着する。24は横ナデにより口縁部をやや尖り気味に収める。25～27は大型の皿。25は内湾する体部に、端部が外反して内面に浅い凹線をもつ。26･27は外反する口縁部で、端部は丸く収める。

28・29は盤の底部。28は高台をもたず、内湾気味ながら、底部からほぼ垂直近くに体部が立ち上がる。29は体部の立ち上がりよりやや内側に、断面細長い方形の高台を貼り付ける。内面立ち上がり部は、横ナデによりやや凹む。

30～37は、古代に降ると判断した高坏である。30・31は坏部と脚部の接合部である。ともに、ヘソ状に坏部側が突出し、辛うじて残る脚上端部は多角形状を呈していた可能性が高い。32は円柱状の脚上端部で、細い沈線２条がみられる。胎土から古代に位置づけた。33～37は、脚部をヘラケズリにより多角形状に面取りする脚部。34は上部が坏部との接合用に外方に開き、下部も裾部への広がりがみられ、脚がまっすぐ立ち上がるのは６cm程度と低脚であることがわかる。35・36も裾への広がりがみられ、37の脚裾部も径約13cmと大

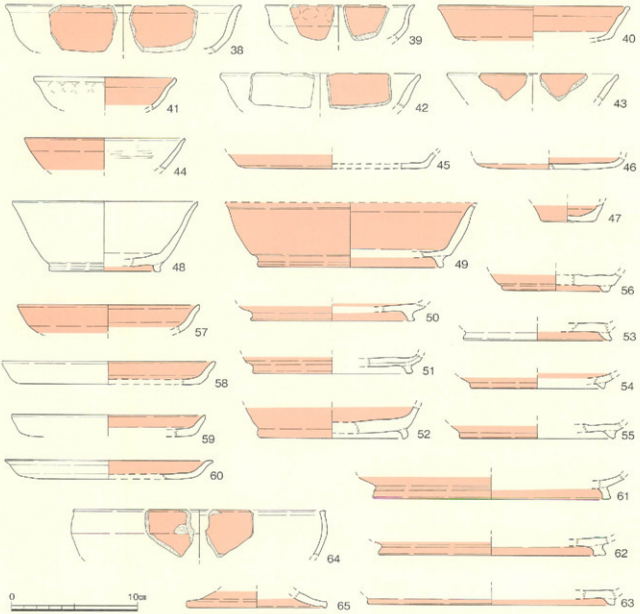


図 84　SR-301-③層出土遺物② －古代土師器②－　（縮尺 1/3）

型ではない。33がやや大型高脚の可能性を残すものの、他は小型低脚とみられる。なお、36は赤彩ではないが、内傾とは異なる赤い胎土を、外面側に用いている（図版19－2）。

38～65は赤彩の確認できた土師器を一括した（巻頭図版4－2）。

38～44は坏口縁部。38は深みのある内湾する体部に、ナデで口縁部が外反する。赤褐色の赤彩が内外面に施される。39も深みのある内湾する体部に、強く外反する口縁部を有する、やや小型の坏。橙色の赤彩がみられる。40は口縁部が外方へ緩く屈曲し、口縁端部は丸く形作られる。明赤褐色の赤彩を内外面に施す。41は丸みのある内湾する体部から口縁部が外反する。黄色みの強い黄褐色の胎土に、橙色の赤彩が内面下半に残

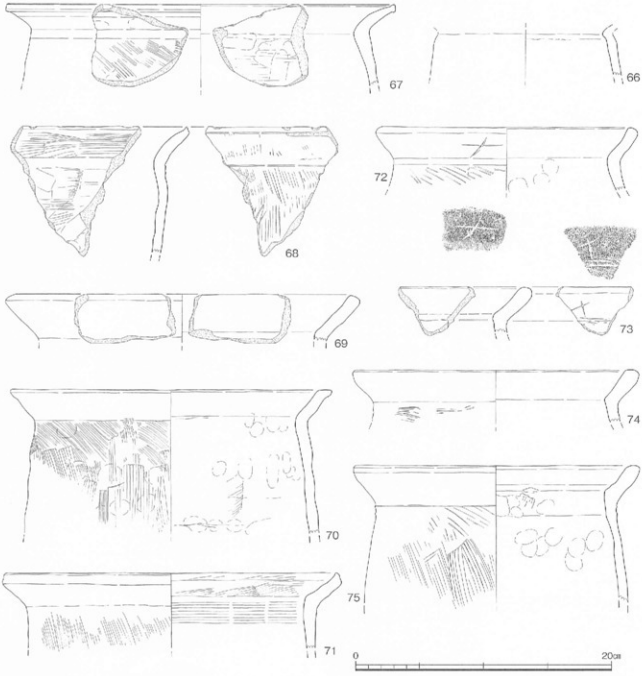


図85　SR-301-③層出土遺物[3]　－古代土師器③－　（縮尺1/3）

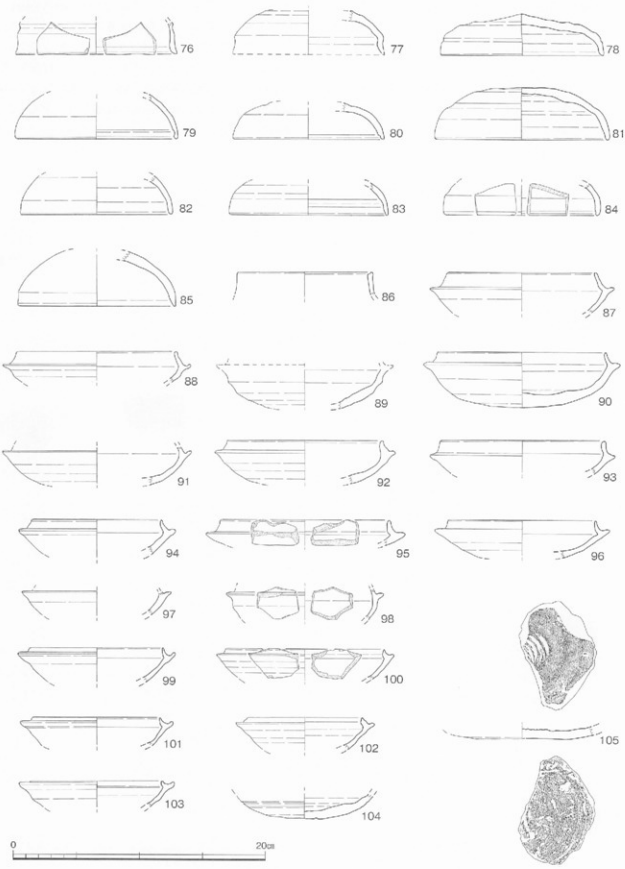


図86　SR-301-③層出土遺物(4)　－須恵器①－　(縮尺1/3)

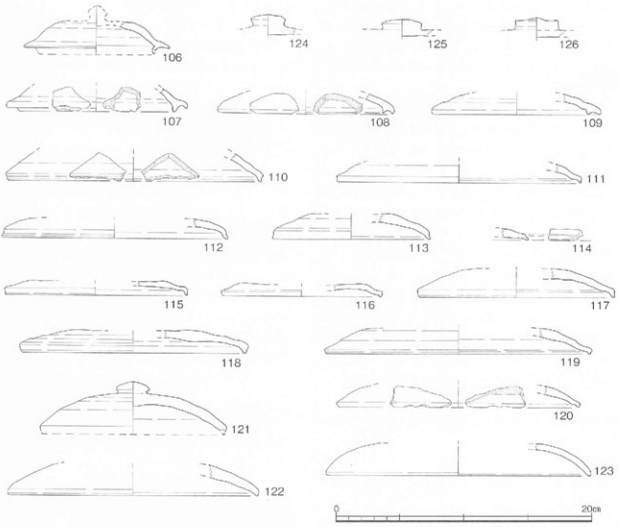


図87　SR-301-③層出土遺物(5)　－須恵器②－　(縮尺1/3)

る。42・43は口縁部が回転ナデによりやや外反し、端部をつまみ上げて丸く収める。42は明赤褐色の赤彩が内面に残り、43は橙色の赤彩が内外面に残る。44はやや内湾してのび、端部を尖り気味に収める口縁部。回転ナデ調整の後、内面に散発的な横方向のミガキを行う。橙色の赤彩が外面に残る。

45～47は高台をもたない坏底部。45はやや大型で、明赤褐色の赤彩が外面に残存する。46は内面に明赤褐色の赤彩が残る。47は小型で、橙色の赤彩が内外面にわずかに残る。

48は深みのある坏で、断面方形で外に踏ん張る高台をもつ。49は口径約20cmと大型で、やや深みのある坏。外にしっかりと踏ん張る断面台形状の高台をもつ。明赤褐色の赤彩が体部内外面と底部外面に残る。

50～56は高台をもつ坏底部。50・51は外に踏ん張る断面台形状の高台、52は内側に湾曲した細い台形状、53は外にのびた台形状、54・55は三角形状、そして56は低平な台形状。50・52は明赤褐色、53・56は橙色、54・55は赤褐色の赤彩を施す。51は外面に淡黄色、内面に橙色の胎土を用い、体部および高台部の外面に橙色の赤彩を施す。

57～60は皿。57は口縁部が回転ナデによりやや外反し、端部をつまみ上げて丸く収める。赤褐色の赤彩が内外面に残る。58・59は体部が短く直線的にのび、口縁端部は尖り気味に丸く収める。両者とも明赤褐色の赤彩が内面にわずかに残る。60は口縁端部を外方へつまみ出し、内面端部に浅い沈線が一条めぐる。橙色の赤彩が内面に残存する。

61～63は高台付の盤。61は高い断面台形状の高台で、明赤褐色の赤彩が体部外面と高台部内外面に残る。62も断面台形状の外に踏ん張る高台で、橙色の赤彩。63は断面三角形状の高台で、橙色の赤彩が内外面全面に認められる。

64は高盤の口縁部か。体部から内湾してのび、口縁端部はやや内側に面を向ける。断面は浅黄橙色。赤彩というよりも、器表を橙色の胎土で薄く覆っている状況である。

65は高坏の脚裾部で、端部を下方につまみ出す。径約11cmと小型で、橙色の胎土に赤褐色の赤彩がわずかに残る。

66～75は、古代に降ると判断した土師器甕である（図版19－3）。66は口縁部を欠く上胴部。67・68は外反する口縁部と膨らみをもたない胴部をもつ。口縁端部は面をなす。67は口縁部横ナデ調整で、68はハケ目調整、胴部はいずれもハケ目調整である。69～75は口縁部がやや内湾気味にのびる口縁部と、あまり張らない胴部をもつ。ほとんどのものが口縁部内外面横ナデ、胴部外面左上がりのハケ目、胴部内面指オサエ・ナデ調整である。72・73の口縁部外面には×印のヘラ記号が認められる。

[須恵器]

須恵器は、76～389の314点を提示する（図86～100、図版19－4～図版20－6）。

まず、76～105は古墳時代に遡る供膳具で、76～86が坏蓋、87～105が蓋坏である。76は天井部と口縁部の境に段を有し、口縁端部は内傾して面をなす。77は口縁部が屈曲し、口縁端部は内傾し、面をなす。78は天井部と口縁部の境に浅い沈線を巡らす。79・80は口縁部内面に段を有する。81は天井部と口縁部の境に弱い段を設けるが（図版19－4）、82～85は天井部から口縁部へ緩やかに移行する。85は高さがあり、土師器坏の可能性も考えたが、砂粒の含み具合から赤焼け品と判断した。

87は高くのびる口縁部で、口縁端部内面に段をもつ。口径から6世紀前葉頃か。87・88はやや高めの口縁部と短く突出する受け部をもち、口縁部を欠失する。89も同様とみられ、底部の1/3程度に回転ヘラケズリを施す。6世紀中葉頃に位置づけられる。90～103は、口縁部・受け部とも脆弱で、底部回転ヘラケズリも1/3以下の範囲となる（図版19－5）。中でも、97～103は口径の小型化が進んでいる。6世紀後葉から7世紀初め頃。104・105は底部。105は内面中央に青海波文のあて具痕を残す。

106～123は7世紀以降の蓋（図版19－6）。106～109は口縁部内面にかえりをもつ。106・107はかえりが口縁部よりも下方に突出し、天井が比較的高い。やや高い擬宝珠つまみをもつと推定する。108・109はかえりが短い。

110～123は口縁部内面にかえりをもたない蓋（図版19－6）。110・111は大型で、口縁端部を強く回転ナデし、下方に突出する。112～114も同様の回転ナデで、端部が外下方に突出する。115は端部を下方に折り曲げ、内面に凹みをもつ。116～118は端部が断面三角形状に突出する。117は赤焼け。119は皿とも考えたが、蓋とした。端部を内面側に巻き込み、焼きはやや軟質。120～122は端部をわずかに下方に肥厚させる。121は天井部が高く、丸い擬宝珠つまみがつく。123は天井部から緩やかに口縁部にいたり、端部は丸く収める。赤焼け。124～126は擬宝珠つまみ部。124・125は丸みをもったボタン形で、126は中央部がわずかに突出する程度で扁平。いずれも赤焼け。

127～245は供膳具の坏。坏には、底部に高台をもたないものともつものの2者があるが、口縁部形態のみでは判別できない。そのため、高台をもつことが明らかなものを除いた口縁部をまず提示し、続いて高台をもたない底部、そして高台をもつ底部を示す。

127～175が口縁部（図版19－7・8）。127～132は体部が内湾する。小型の127・128は口縁端部を丸く収め、他はやや尖り気味に収める。130の外面には回転ナデにより浅い沈線状の凹みが数条みられる。131は口縁端部が少し外反し、底部は回転ヘラ切り未調整。胎土はやや黄色みのある白色で、焼きがやや軟質である。132は口縁端部をわずかに欠失する。

133～171は、底部から直線的あるいは若干外反して立ち上がる口縁部で、端部は丸く収めるものと、やや尖り気味に丸く収めるものがある。口径の小さいものから配列している。138の体部内面に×印のヘラ記号が施されている。137・147は瓦器様に体部外面あるいは口縁端部内外面が黒色を呈する。この他にも、白みの強い精良な胎土で、焼き上がりが軟質のものが少なくない。

172～175は、外反気味に立ち上がる体部から、端部でさらに強く外反して、口縁端部を小さくつまみ上げる。172・173は軟質で、172は外面と口縁端部内面が

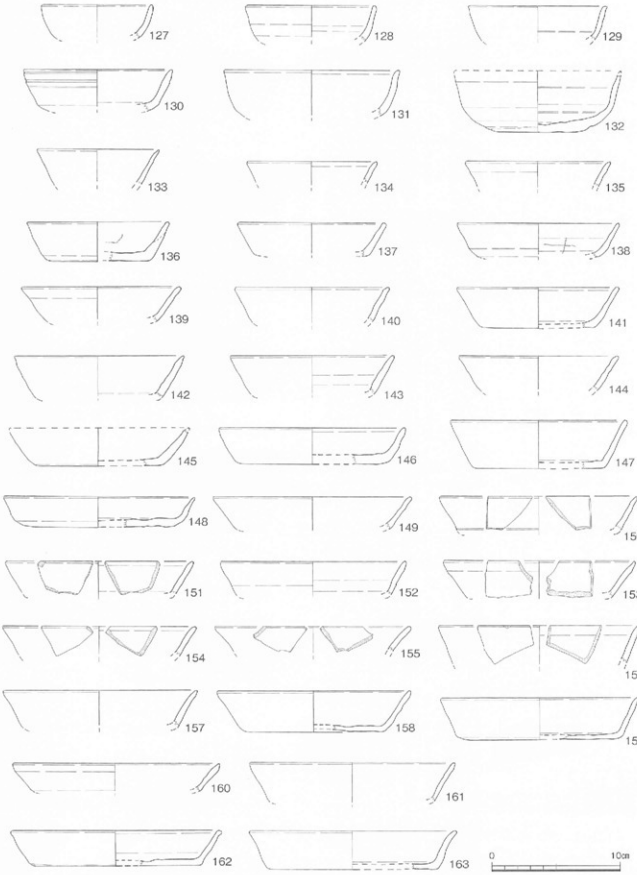


図88　SR-301-③層出土遺物(6)　－須恵器③－　(縮尺1/3)

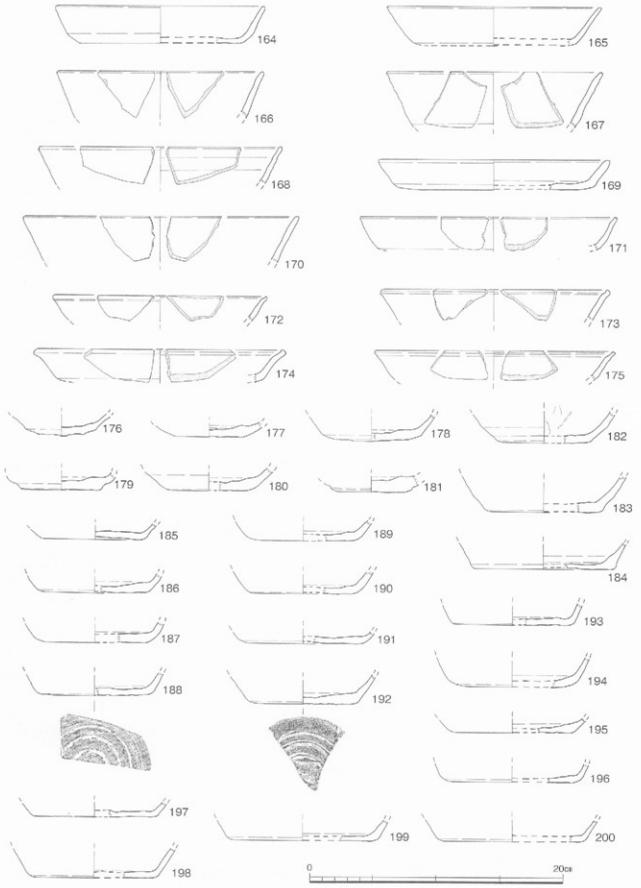


図89　SR-301-③層出土遺物(7)　－須恵器④－　(縮尺1/3)

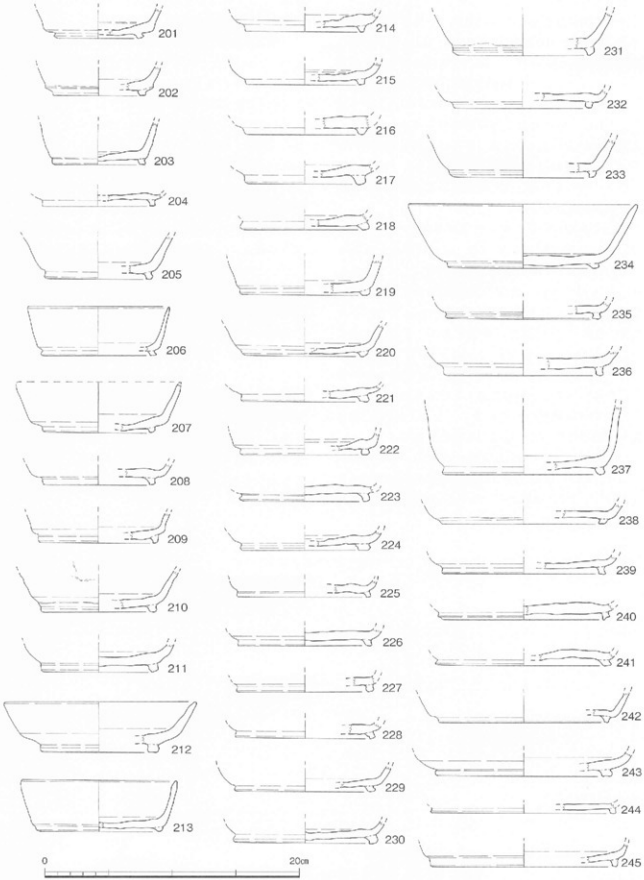


図90　SR-301-③層出土遺物(8)　－須恵器⑤－　(縮尺1/3)

黒色化している。

176～200は高台をもたない底部で、基本的に回転ヘラ切り未調整（図版19－９）。176～181は若干凸気味を呈し、179・181は厚い。182～184はほぼ平坦な底部から軽く立ち上がり、内湾気味の体部となる。182の内面には火襷痕がよく残る。180・183の焼き上がりは軟質。185～200はほぼ平坦な底部からやや丸みをもって外傾して立ち上がる底部。体部は内湾気味のものが多いが、直線的なものもある。195は立ち上がりが緩やかで、内外面を黒色化している。この他にも、軟質の焼き上がりが目立つ。

201～245は高台を有する底部（図版20－１）。高台径の小さい順に配列している。高台は断面が丸みをもった台形ないし平行四辺形で、外方にしっかり踏ん張ったものが多い。底部から体部の立ち上がりは、212・234のように大きく開くものから、立ち上がりの急な206・213・237等、多様である。また、高台に接した部分から体部が立ち上がるもの、201・202・207・208・209・212・222のように、高台貼り付け部からさらに外方で屈曲して立ち上がるものがある。焼きは、やはり軟質のものが多い。なお、244等、径が大きく器壁の薄いものは皿の可能性もある。

246～251は全形の窺える皿（図版20－２）。246～248は口径13～15cm。246は口縁の端部を内面側につまみ上げる。247は回転ナデにより、口縁端部内面が凹線状。248は外反して端部をやや尖り気味に収める。249～251は口径19cm前後。249は口縁端部をつまみ上げ、端部内面が凹線状となる。250の口縁端部は面をもち、251は外反して端部をやや尖り気味に収める。252・253は高台をもたないが、底径および厚さから皿とした。251・253の焼きは軟質。

254～257はさらに大型となり、盤とした（図版20－２）。254は口縁端部が内面側に肥厚し、段をもつ。255は外反する口縁の端部を上方につまみ上げる。焼きは軟質。256は、底部から緩やかに少し立ち上がる程度と非常に浅い。焼きはやはり軟質。257は、高さ１cm前後の外にしっかり踏ん張った高い高台をもつ。焼きは軟質で、外面は瓦器様に灰色を呈する。

258～270は塊（図版20－３）。258・259は小型の口縁部で、丸みのある体部からわずかに外反して、口縁端部はやや尖り気味に収める。260は体部片で、外面に沈線を２条施し、内外面に灰オリーブ色の自然釉が厚く付着する。261～264は小型の底部。261は回転ナデによる外面の凹凸が激しい。264は底部外面がやや凸状。265は台付塊の塊部で、脚台の接合痕が残る。体部はほぼ直立から内傾気味。266・267は底部付近の体部片。266には１条の沈線がある。268は塊と脚台の接合部。269・270は脚台部だが、小型壺類の脚台部片の可能性もある。269は接地部を内側につまみ出し、270は外側にしっかり踏ん張る。

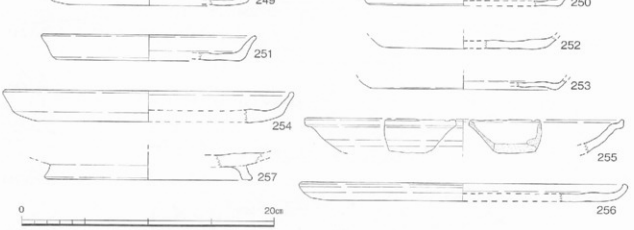


図91　SR-301-③層出土遺物⑨　－須恵器⑥－　（縮尺1/3）

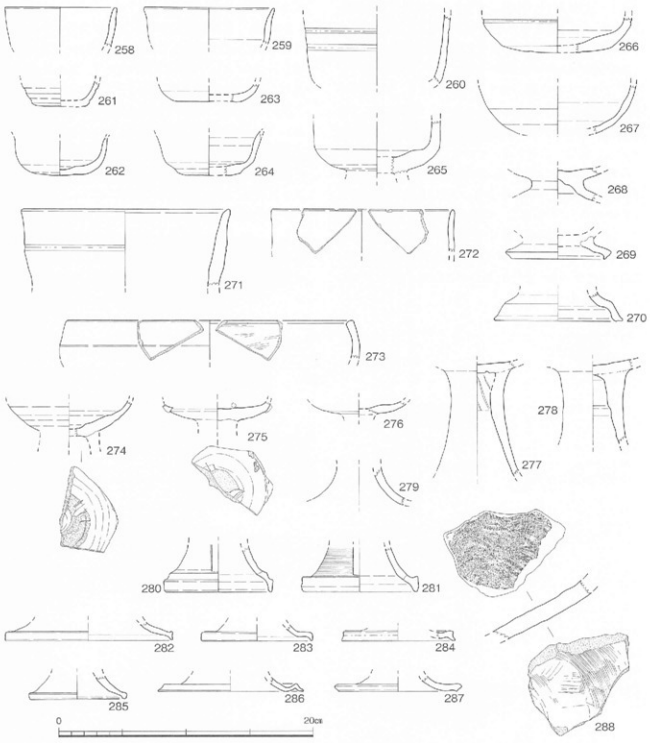


図92　SR-301-③層出土遺物⑩　－須恵器⑦－　（縮尺1/3）

271・272は鉢の口縁部。271の体部外面には凹線が1条ある。273は鉢の可能性も考えたが、径の大きさと内湾の程度から高盤と推定した。焼成は軟質。

274～287は高坏（図版20－3）。274～276は坏部で、274・275には透穿孔に伴うヘラ痕が残り、275はその残存状況から3方向透と推定される。体部外面に1条の沈線がみられ、坏内面にはオリーブ灰色の自然釉が付着し、窯壁片を巻き込んでいる。276は軟質。277・278は脚柱部で、文様・透はみられない。277の内面上半横方向のヘラケズリを施し、278は内面にナデによる段がある。279は裾近くの脚部片。280～287は脚裾部。280・281は脚端部を上下に拡張して段をなす。ともに長方形透で、281は4方向に復元できる。282～287は端部を下方に若干拡張させる程度。282は軟質の焼き上がり。

288は焼け歪みが激しいが、高坏形器台の坏部片。外面は約1.5cmの幅狭の工具による平行タタキの後、部分的にカキ目、内面は青海波文をナデ消す。市場窯系とみられる（図版20－4）。

289～360は甕、瓶類を含んだ壺類。289～292は甕。289・290は内湾する口縁部片で、289の外面には波状文がある。291は胴部上半から頸部で、体部外面カキ目調整で、頸部に波状文を施す。292の上胴部は外面カキ目調整。291・292とも孔は残らない。

293～303は瓶類。293は提瓶の口縁部。端部を外面に巻き込み、丸く収める。294・295は提瓶または平瓶の口縁部。294は外反して口縁端部を丸く収める。295は端部内側に面をもち、尖り気味に収める。296は提

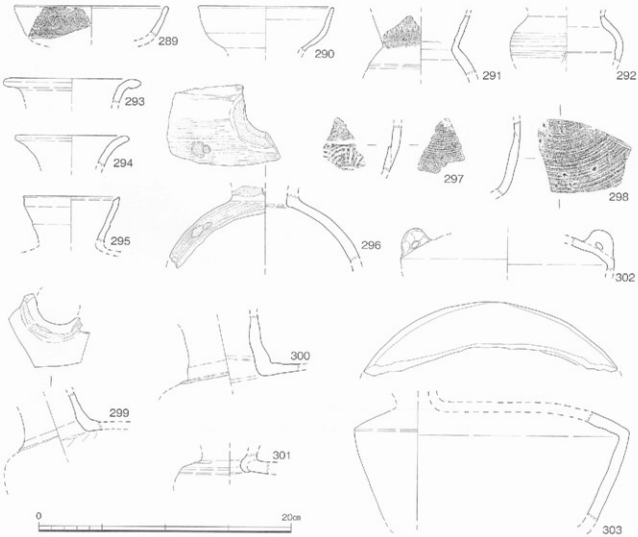


図93　SR-301-③層出土遺物(1)　－須恵器⑧－　（縮尺1/3）

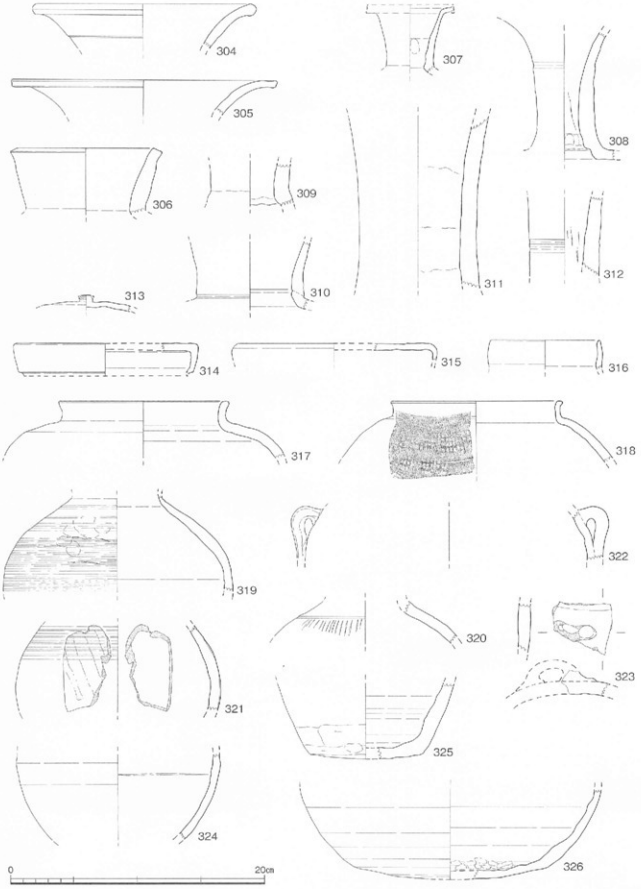


図94　SR-301-③層出土遺物(2)　－須恵器③－　（縮尺1/3）

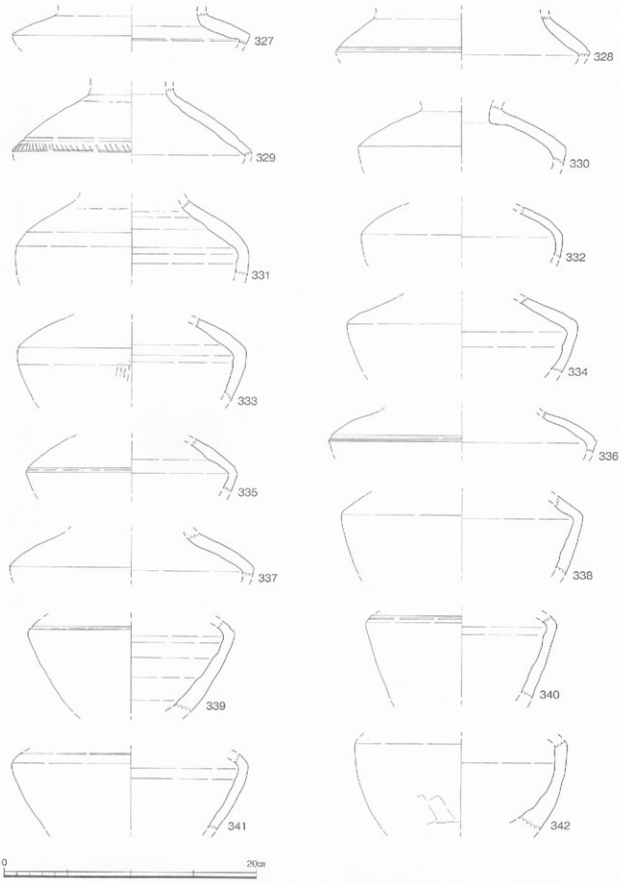


図95　SR-301-③層出土遺物⑬　－須恵器⑩－　（縮尺1/3）

瓶の肩部。外腹面をカキ目調整、背面を回転ヘラケズリする。やや腹面側に寄った位置に把手部の接合痕が残る。297・298は提瓶の体部片で、ともに円盤閉塞の際の接合痕が残る腹面側の体部片。外面はカキ目調整を施し、内面は297にあて具痕の青海波文が残り、298は回転ナデ調整と閉塞部周辺に指オサエの痕跡がよく残る。

299～301は平瓶の頸部。内外面回転ナデ調整で、頸部と胴部で回転軸が異なる。302・303は肩部に稜をもつ体部で、302は高い耳がつくことから、303は大きさから平瓶体部片と判断した。

304・305は広口壺の口縁部片。306は直口壺の口縁部片で、口縁端部は面をなす。307～312は長頸壺の口縁部から頸部。307は小型ながら口縁部を上下に拡張し、体部は長胴を呈するとみられる。308・312には頸部に凹線が施されている（図版20－5）。

313～315は短頸壺の壺蓋。313は小さいボタン形のつまみが付く。314は口縁端部を内側につまみだす。316～318は短頸壺口縁部。316は小型で、若干外側へ膨らんで直立し、端部は尖り気味に丸く収める。317

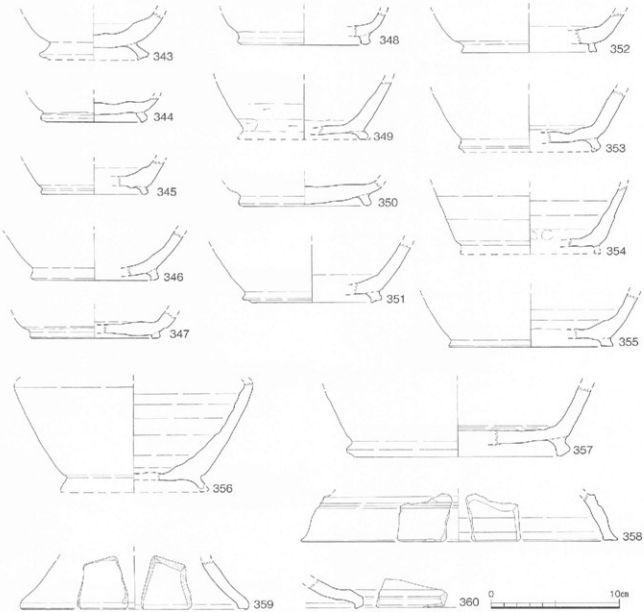


図96　SR-301-③層出土遺物⑭　－須恵器⑪－　（縮尺1/3）

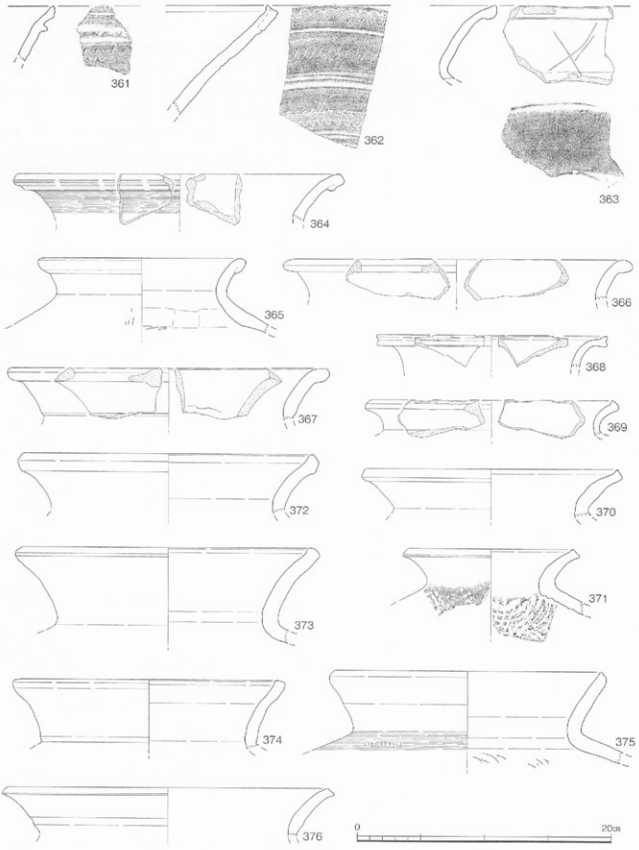


図97　SR-301-③層出土遺物⑮　－須恵器②－　（縮尺1/3）

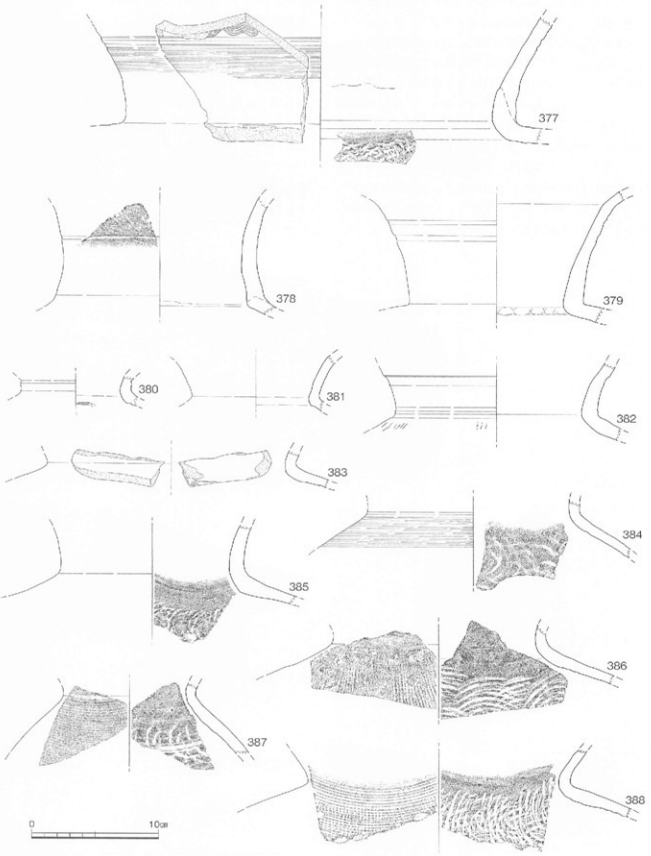


図98　SR-301-③層出土遺物⑯　－須恵器⑬－　（縮尺1/3）

は若干肩が張る（図版20－5）。318は外面に格子目タタキが残り、内面は青海波文をナデ消す。

319～322は丸く張る壺の胴部。319・321は外面をカキ目調整し、321の外面には緑色の自然釉が数条滴っている。320は肩部外面に凹線を1条巡らし、その下にヘラ状工具による連続刻目文を施す。工具は幅約2.2cmの先の尖ったヘラ状工具で、木目が明瞭。323は耳部を有し、壺肩部の可能性がある破片。頸きは任意。324は丸底とみられる壺下半部で、内外面回転ナデ調整。325はやや凸気味の平底底部で、外側面にヘラケズリを施す。326は丸底の底部で、底部内面から指オサエにより、丸底を作り出している。

327～342は、肩部から胴部へ稜をもって屈曲する壺の体部である。327・328は頸部径が大きく、広口壺ないし短頸壺の肩部。肩部から胴部の屈曲は鋭い。328は肩部と体部の境の上側に凹線1条を巡らす。329・330は頸部径が小さく、長頸壺とみられる。肩部から体部へは鋭角に屈曲する。329は肩部下端に左上がりの刻み目を施し、その上方に凹線を巡らす。331～334は肩部に稜をもつ上半部だが、体部自体丸みをもつ。下半部も342のように、丸みをもつと推定される。対して、同じ上半部でも335・336は肩部に1条の凹線を巡らし、稜が明瞭。339・340がそれらの胴下半部に相当する。そして、稜をもつものの凹線をもたないの

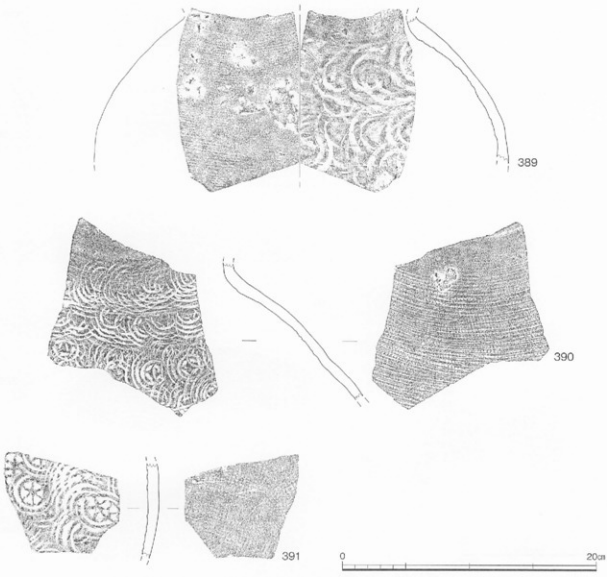


図99　SR-301・③層出土遺物(17)　－須恵器(4)－　（縮尺1/3）

が337・338、そして下半部での341である。

343～357は貼付高台を有する壺の底部。高台径や内面回転ナデの状況などから坏と区別した。343は丸い胴下半に、高く外に踏ん張り内端部で接地する高台を有する。同様に、外にしっかり踏ん張り内端部で接地する高台は、346・351・353・357等でも認められる。356は細く高い高台であるが、欠損部付近に体部の屈曲部が辛うじて残る。

358～360は脚台部。358は径約27cmと大型で、接地面は平坦。359は「ハ」の字状に開く裾部で、端部を内側に突出させる。外面には暗灰色の自然釉が付着する。360は大きく開く鞆台部。端部は内側に巻き込む。

361～391は甕類。361～376が口縁部。361・362は文様を施す大型甕の口縁部。361は端部付近を外方に屈曲させ、端部を上方へ拡張し、端面に凹線を巡らす。屈曲部には断面三角形状の突帯を貼り付け、その下方に7条1単位のクシ描き波状文を施文する。362は外傾してのび、口縁端部内面を若干拡張し、外面は幅広に薄く折り曲げる。口縁部外面はナデによって形成された3～4条の凸線で区画され、その間を5条1単位の工具を用いて施文する。まず口縁外面上端部にクシ描き波状文、その下段にクシ歯列点文、さらにその下段にクシ描き波状文である（図版20－6）。

363～365は口縁端部を外側に折り曲げて肥厚させる口縁部。363・364は大型品。363の頸部外面には×印のヘラ記号が認められる。ただし線は微弱（図版20－6）。364は口縁外端部がナデにより段状となり、頸部外面はカキ目調整。365は中型品で、口縁部が短く外反する。外面タタキ調整、内面青海波文が残る。

366・367は短く外反してのび、端部を外方へ屈曲させ丸くやや肥厚させて収める（図版20－6）。368は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線を1条巡らす。369は短く外反し、口縁端部を上方にややつまみあげる。370～375は、口縁端部をナデ調整して面を作り、内面側を尖り気味につまみ上げる口縁部。370は中型品。371は小型品で、肩部外面は格子タタキをナデ消し、内面は青海波文。372～375は大型品で、口縁部は立ち気味に開く。肩部まで残るものは、外面にタタキ後カキ目、内面に青海波文が残る。376は短く外反してのび、端部が面をなす。

377～381は頸部。377は大型品。377・378は口縁部外面に凹線による区画とクシ描き波状文がみられ、377の波状文下部にはカキ目調整がみられる。379はナデによる凹線が認められる。380・381は頸部と胴部の屈曲部で、やや小型。382～390は頸部から肩部。基本的に外面タタキの後カキ目調整で、内面にあて具痕の青海波文が残る。387はやや小型でなで肩。391は外面のタタキが不定方向で、底部付近と推定される体部片。内面のあて具痕が車輪文である。

392は円面硯の脚部。残存状況から連続した長方形透を持つ圏足硯で、遺は9前後と復元される。硯面には整形時のナデ痕が残り磨滅はみられず、ほとんど使用されていない（巻頭図版4－3）。

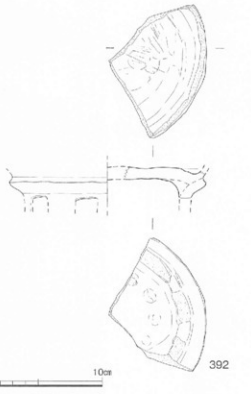


図100　SR-301-③層出土遺物[18]　－須恵器⑤－
（縮尺1/3）

【瓦】

出土遺物中には瓦片も少なくない。ここでは393～408の16点を提示する（図101・102、図版20－7）。

393～404の12点は平瓦。393～397は凸面に縄タタキ痕、凹面に布目痕を残し、いずれも須恵質の焼き上がりである。393は隅部で、側端面は凹面側を面取りする。396は側端部に調整時の沈線が深く残り、布目痕をもつ凹面には、桶巻き作りの模骨に伴う凹凸がみられる。397は凸面縄タタキの後、一部を格子目タタキとナデ調整がなされ、凹面は布目をナデ消そうとして

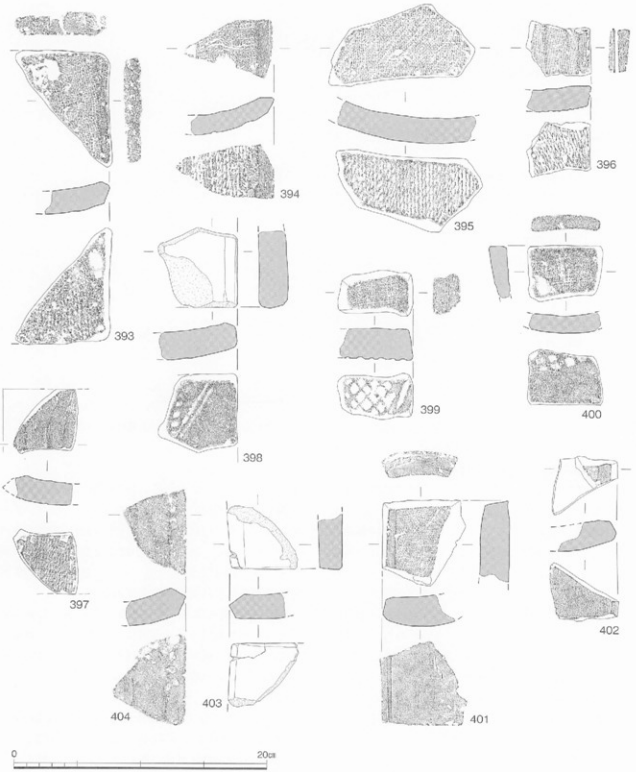


図101　SR-301-③層出土遺物⑲　－瓦①－　（縮尺1/3）

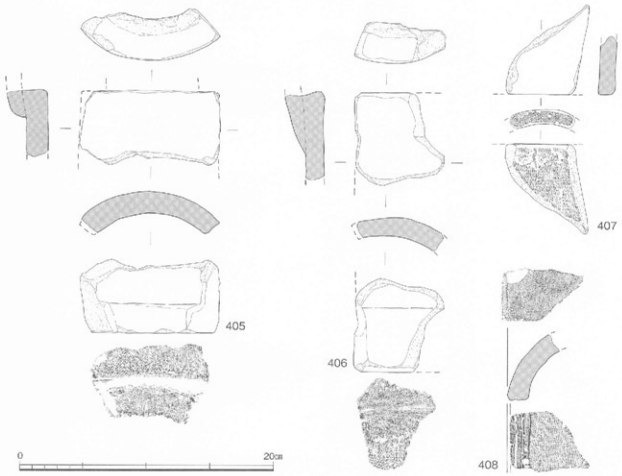


図102　SR-301-③層出土遺物⑳　－瓦②－　（縮尺1/3）

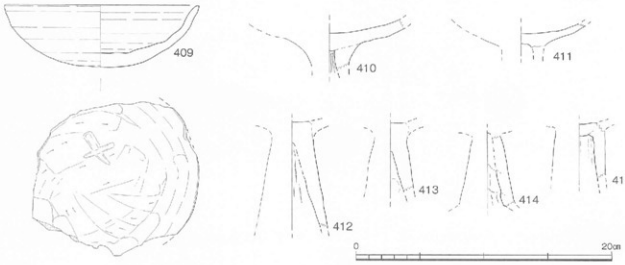


図103　SR-301-③層出土遺物㉑　－古墳土師器①－　（縮尺1/3）

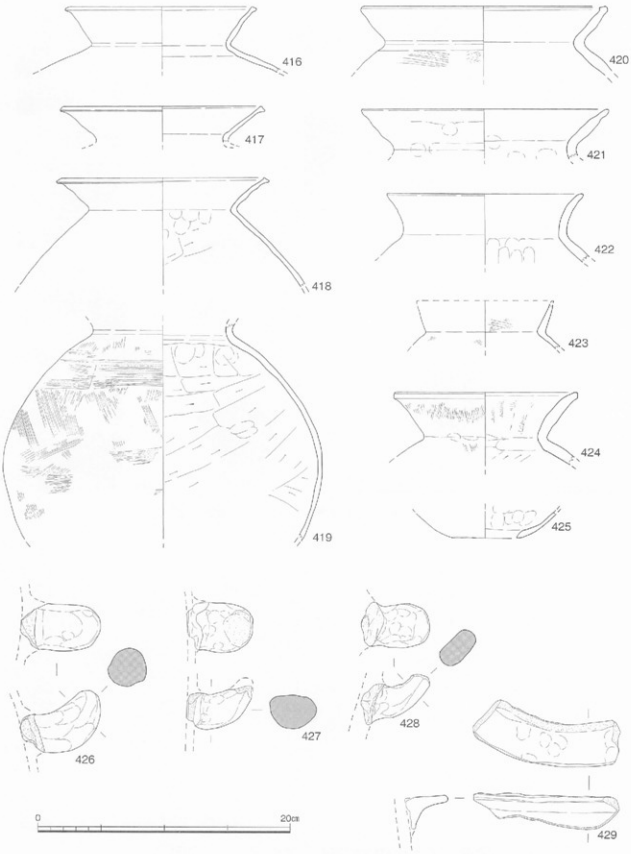


図104　SR-301-③層出土遺物㉒　－古墳土師器②－　（縮尺1/3）

いる。398～400は凸面に格子目タタキ痕、凹面に布目痕を残す。焼成は軟質である。格子目はいずれも1辺6㎜前後の菱形に近く、凹凸は深い。401・402は凸面ナデ仕上げ、凹面布目痕で、須恵質の緻密な焼き上がり。側端面を両側から面取りすること、緻密な布目、そして焼成・色調から、同一個体の可能性がある。403・404は凹凸両面をナデ仕上げしている。

405～408は丸瓦。405・406は玉縁接合部であるが、ともに玉縁部は欠損している。405の接合部は、本体との接合幅が短く段差が高い。対して、406は接合部が幅広で、緩やかに本体部へと移行している。いずれも凹面には、一枚前の布目痕が残るが、405の段部は布がうまく密着せず布目が残らない。ともに表面に炭素を吸着させている。407・408は丸瓦片。凸面は磨滅しているが、ナデ調整とみられ、凹面には細かい布目がある。

[古墳時代の土師器]

先に、供膳具を中心とした古代の土師器を提示したが、以下では土師器でも古墳時代に遡る可能性が高いものを報告する。提示する資料は409～429の21点（図103・104、図版20－8）。

409は坏。回転により口縁部まで成形した後、底部外面を時計回りにヘラケズリし、口縁部外面を横ナデ仕上げする。底部外面に×印のヘラ記号がある。

410～415は高坏。410・411は坏部で、ともに坏部外底面に脚部を接合して成形する。410の脚部内面には絞り痕がよく残る。412～415は脚部で、前3者が円錐形、415は円柱形をなす。いずれも内面に絞り痕を残す。412・413は脚部上端側面に坏部を接合し、414は坏部外底面に脚部を接合するタイプ。なお、414は内面に輪積み痕を残し、裾部が屈曲し大きく広がる。415は円板充填を行っている可能性が高い。

416～423は甕。416～419は薄手に成形されており、古墳時代前期の布留式甕とみられる。416～417の口縁部は、横ナデにより内湾気味にのび、口縁端部は若干肥厚させる。419の胴部は球形をなし、外面は右上がりハケ目の後、左上がりハケ目を施し、肩部と胴部中位に横ハケ目を施す。内面は口縁部と胴部の境よりやや下がった位置までヘラケズリを施す。下半は左上がり、上半は右上がりから横方向。420は口縁端部を内側にやや肥厚させ、面は内側を向き、布留式の特徴を残しているが、全体的に器壁が厚く、胴部内面にケズリは施さない。421は外傾して直線的にのびる口縁部。端部は丸く収めるが薄い。422はが立ち気味に外反する口縁部で、端部を尖り気味に丸く収める。423は直線的に短くのびる口縁部に球形の胴部をもつ。

424・425は壺。424は口縁部で、器壁がやや厚く、端部は面をなす。口縁部内外面ハケ目調整で、体部内面にはヘラケズリが行われている。425は焼成前穿孔をもつ底部片。全面磨滅のため不明瞭であるが、穿孔のない底部を形成した後、倒立状態で、何らかの工具を用いて底を切り開き、端部をつまみ上げるようにナデで整形したと推定される。底部内面には指頭圧痕がよく残る。

426～428は甕または甑の把手。426・427は厚みがあり、横断面が円形または楕円形をなす。428は扁平で横断面扁楕円形。

429は円弧を描く鉢状部。中世羽釜鍔部の可能性も考慮したが、上面が水平になる点と破片下部の湾曲から、移動式竈の庵部と判断した。

[弥生土器]

弥生土器は430～736の307点を、器種別に示す（図105～119、図版21～23－1）。

430～438は前期前半の壺、壺蓋。430・431は大型壺の口縁部で、ともに結上帯接合部を利用して段を形成する。431は段部に刻み目を施し、口縁端部に接合部の段が残る。432・433は段を有する頸胴部境片。前者の段は明瞭だが、後者は微弱（図版21－1）。434～438は胴部片。434は外面横方向のミガキを密に施した大きく張る胴部から、凹線状の凹みを形成して頸部に移行する。夜白系。胎土に角閃石を含み、搬入品とみられる（図版21－2）。435～437は、頸胴部境にヘラ描き沈線を3条ないし4条施す。438は特に段・沈線が認められない。

439・440は壺蓋。439は頂部が二山となると推測でき、内面はハケ目を残す（図版21－3）。440は扁平な円盤状で、壺蓋以外の可能性もある。

441～461は前期後半から中期初頭の壺（図版21－4）。441～449は口縁部。441は口縁下端部に刻み目を施し、短く外反する頸部から下がった位置に、上下を刺突文列で画す2条のヘラ描き沈線をもつ。442も同様に、頸部に刺突文列で画した4条以上のヘラ描き沈線がある。443はやや立ち気味の口縁部で、口縁端部に1条のヘラ描き沈線、破片下端の頸胴部境に1条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面、丁寧な横方向のミガキ仕上げである。444～448は大きく外反する口縁部。

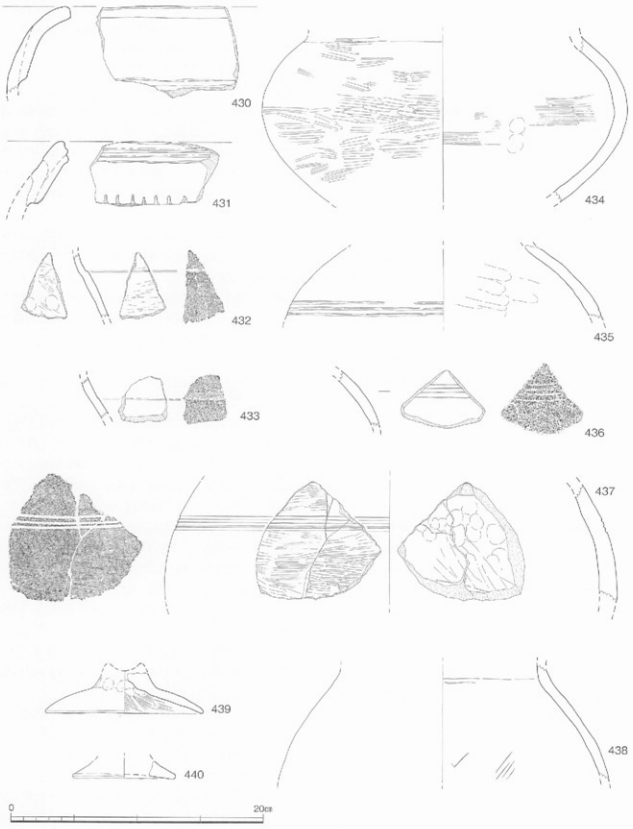


図105　SR-301-③層出土遺物23　－弥生土器①－　(縮尺1/3)

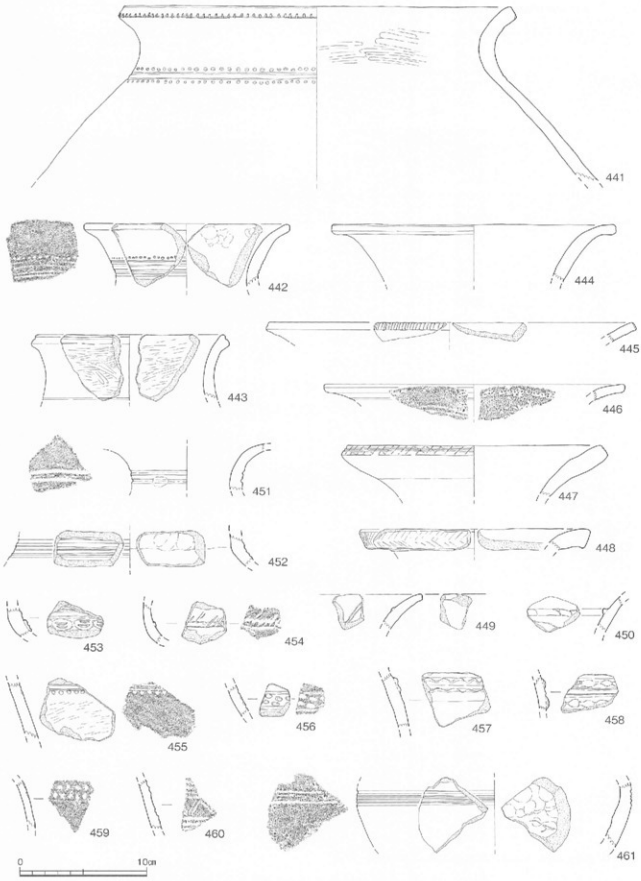


図106　SR-301-③層出土遺物24　－弥生土器②－　（縮尺1/3）

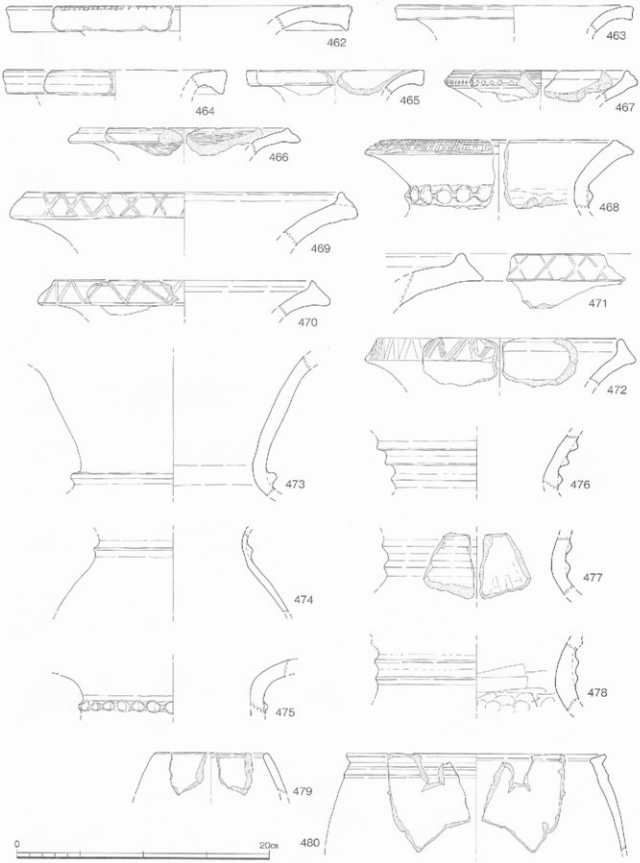


図107　SR-301-③層出土遺物25　—弥生土器③—　(縮尺1/3)

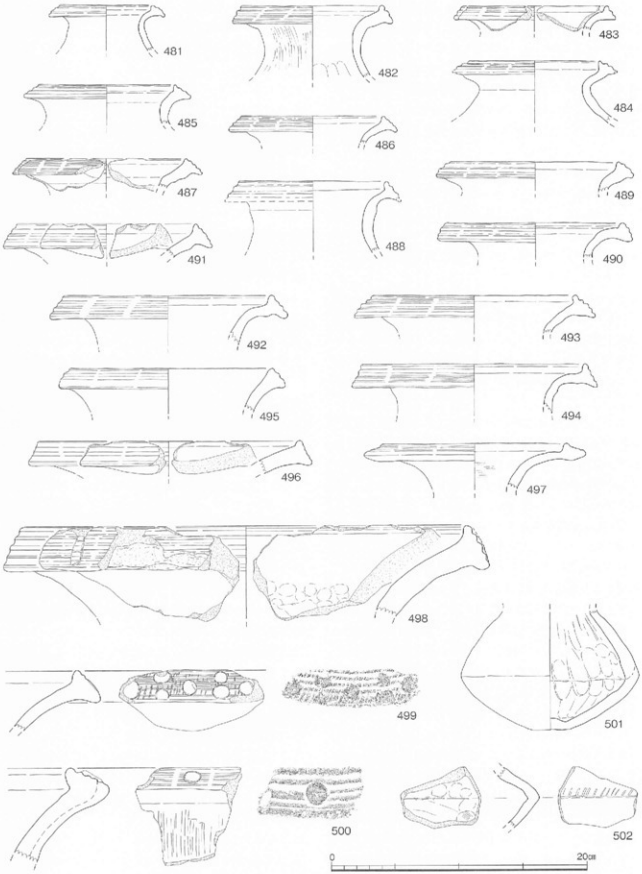


図108　SR-301-③層出土遺物㉘－弥生土器④－　（縮尺1/3）

445は口縁端部全面を細かく刻み、甕口縁部とも考えたが、やや長いため壺と判断した。446は口縁部内面に円管刺突文が巡る。447は口縁部がやや肥厚し、端面にヘラ描き沈線1条を施した後、×の2方向に連続線文を断続的に加える。448は口縁端部が下方にやや肥厚し、端面には綾杉の単線文がみられる。449は内面斜め方向に突帯を貼り付ける口縁部片。突帯が注口状を呈する部位である。

450～454は頸部片。450は、内面に突帯が貼り付けられている。451は太いヘラ描き沈線を2条以上、452は4条以上のヘラ描き沈線が見られる。453はヘラ描き沈線2条と、連鎖状突帯1条が見られ、後者上面の刻みは2単位である。454は敲弱な突帯を貼り付け、上部を刻む。

455～461は胴部片。455と456はヘラ描き沈線と刺突文の組み合わせ、457は貼付突帯、458は貼付突帯と沈線文の組み合わせ、459は円管刺突文のみ、460はヘラ描き沈線による、直線文と山形文の組み合わせである。461は胴最大幅部にクシ描き直線文1条を施す。クシ描きは深い。

462～478は中期前葉から中葉の壺（図版21－5）。462～465は口縁部が大きく外反して、端部が断面三角形状に肥厚する。462は口縁上端部に刻み目を施す。464の肥厚は大きく下垂する。466も大きく外反し、端部がさらに外方へ突出し、上端部をつまみ上げる。467は外反する口縁部を上下にやや拡張し、沈線状の凹線2条を施し、下端部を刻む。468は、押圧を施す貼付突帯を有する頸部から口縁部が緩やかに外反し、端部にヘラ描き沈線3条の後、2条1単位の短線文を刻む。469～470は大きく外反する口縁部の端部を上につまみあげ、端面に短線文を刻む。469・471は連続×字文、470は山形文である。472はやや直線的に外反する口縁部で、端部を内側に突出させ、幅広の端面を形成する。その口縁外端面には、3条1単位のクシ描きによる連続山形文が施される。

473～478は頸部。473・474は頸部に1条の断面三角形突帯を貼り付けるもので、比較的張る体部から、頸部で明確に屈曲して直線的に開く頸部をもつ器形に復元できる。前期末葉まで遡る可能性もある。475は頸部に押圧を施す貼付突帯をもち、口縁部は頸部から一度立ち上がって、大きく外反する。476～478は筒状から外傾する頸部に、断面三角形の突帯を複数条貼り付ける。

479・480は無頸壺。479は口縁部小片で、時期の詳細は不明。480は、瀬戸内型甕様に、口縁端部に接して断面三角形の突帯を貼り付け、外面口縁下に横ナデを顕著に施す。口縁部突帯が小さいこと、丁寧な仕上げであることから、無頸壺と判断し、時期も中期中葉を前後するとして、ここに提示した。

481～500は中期後葉の凹線文が卓越した壺（図版21－6）。481～494は、内傾ないし直立する頸部から外反し、口縁端部を上下に拡張して凹線文を3～4条施す。495～497は同様に口縁端部に凹線文をもつが、頸部からの開き具合がやや異なる。495はやや立ち気味に開き、496は大きく直線的に開く。497は大きく外反し、口縁端面はむしろ上方を向く。498～500は大型品で、やはり外反する口縁部を上下に拡張し、凹線文を4～5条施す。498では棒状浮文がさらに付され、499は凹線文上を短線文で刻み、円形浮文を2段1段2段と交互に密に貼り付ける。500もさらに大型の円形浮文が貼り付けられている。

501・502は、「く」の字状に屈曲する壺体部。501は残存部分から、筒状の頸部が立ち上がると推測される。502は屈曲部上側に、「ノ」字状の刻み目を施す。時期の詳細は不明ながら、中期後葉を前後する時期の可能性が高いとして、ここに提示している。

503～521は後期から終末期の壺。503～506は凹線文をなお有するが、条数も少なく微弱。505・506は口縁部がやや内湾気味である。後期初頭に位置づけられよう。507～511は直立する頸部から外反する口縁部。凹線文をもたず、口縁端部は厚さの変化もなく、そのまま収める。507の頸部には、板小口によるとみられる「ノ」字状の刻み目が施されている。512はやや頸胴部の屈曲が明瞭。いずれも後期初頭から前葉。

513は外面の磨滅がとりわけ著しいが、直線的に外傾する口縁部に凹線文ないし貼付突帯を連続的に施す。器台の可能性も考慮したが、口縁端部の形状や口径から壺口縁部と判断した。中期に遡る可能性もある。514は外反する口縁部から短く口縁端部が直立し、受け口状。頸部は緩方向のミガキ仕上げが丁寧になされている（図版21－7）。515・516は直立する口縁端部に凹線文を施す。515は小型で甕の可能性もあるが、ここで提示した。517はやや内傾であるが、やはり端部に多条の凹線文がみられる（図版21－8）。513～517は在地で器形の系譜が辿えず、いずれも中部瀬戸内系と考えられる。

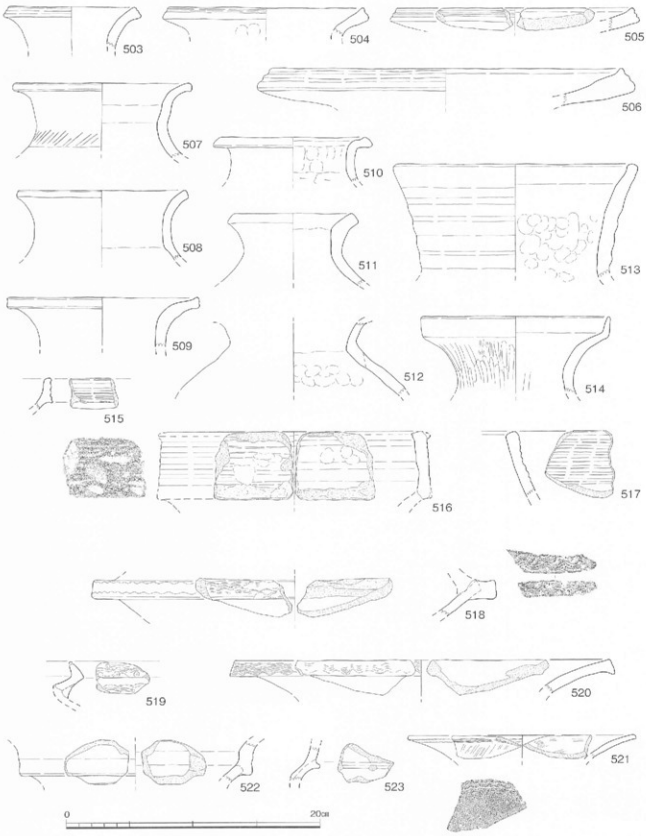


図109　SR-301-③層出土遺物27　－弥生土器⑤－　（縮尺1/3）

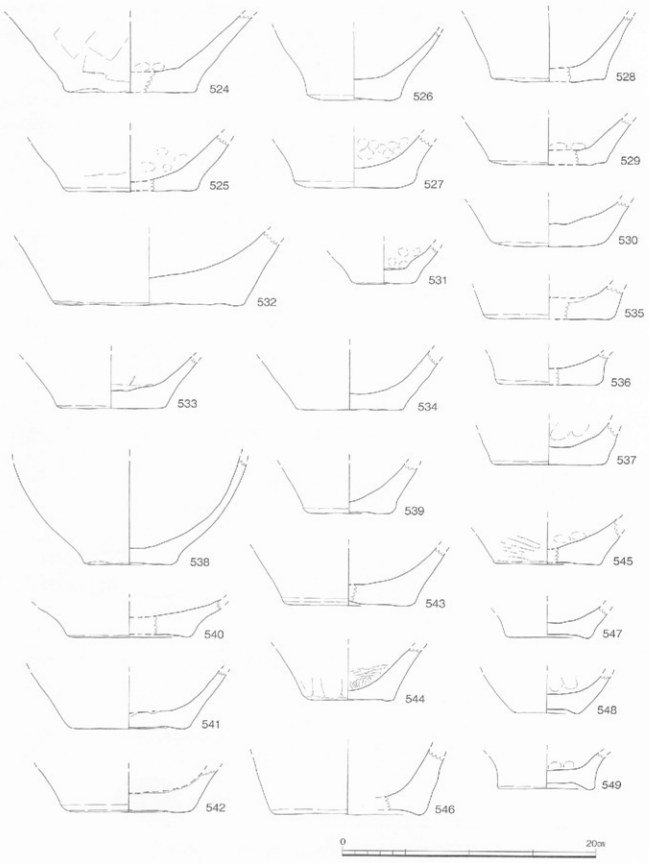


図110　SR-301-③層出土遺物26　－弥生土器⑥－　(縮尺1/3)

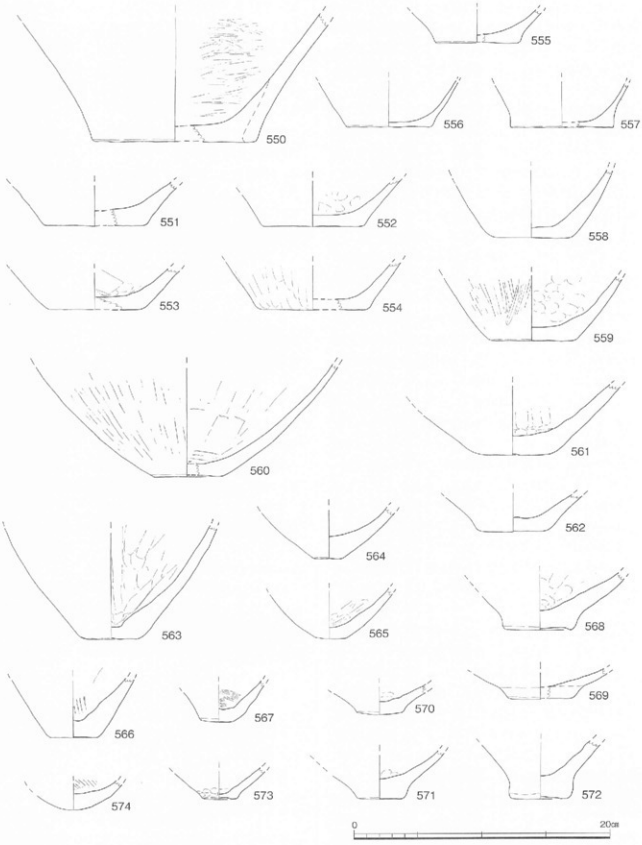


図111　SR-301-③層出土遺物㉘　－弥生土器⑦－　（縮尺1/3）